

[030]報告

脇坂, 真彩子
九州大学留学生センター : 准教授

大神, 智春
九州大学留学生センター : 教授

郭, 俊海
九州大学留学生センター : 教授

斉藤, 信浩
九州大学留学生センター : 准教授

他

<https://doi.org/10.15017/4783565>

出版情報 : 九州大学留学生センター紀要. 30, pp.17-126, 2022-03. 九州大学留学生センター
バージョン :
権利関係 :



部門・コースの活動報告2022

九州大学留学生センター

(報告)

Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語	脇坂真彩子	17
日本語研修コース	大神智春	31
基幹教育の日本語	郭俊海・大神智春・脇坂真彩子	39
補講コース・日本語 (JTCs)	斉藤信浩	45
病院地区・日本語コース	斉藤信浩・田尻由美子・浅賀智絵	51
筑紫・大橋地区日本語コース — 2020年度～2021年度 —	小山悟	59
農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育 — 2021年度の実施状況 —	柴田あづさ	67
日本語・日本文化研修コースの報告 (第21期生)	郭俊海	71
2020年度 “AsTW2021” 実施報告	生田博子	77
Summer in Japan (SIJ) 2021 オンラインプログラム実施報告 野中ちさと・柴田あづさ・五嶋佳夜		81
アジア太平洋カレッジ in Hawai'i	木下博子	91
International Education Lessons from the Pandemic and Suggestions for the Future HIGO Masa, NONAKA Chisato, IKUTA Hiroko and KINOSHITA Hiroko		99
2020年度 九州大学留学生センター・留学生指導部門報告 (カウンセリング関係)	高松里	109
令和3年度スーパーグローバル大学創成支援事業 学部生・大学院生共通基幹教育科目「世界が仕事場 I & II」	生田博子	117
官民協働海外留学支援制度「トビタテ! 留学 JAPAN 日本代表プログラム」	生田博子	121

Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語

Japanese Academic Courses (JACs) / Fundamental Subjects for Language and Culture, Japanese

脇坂 真彩子*

1. はじめに

「Japanese Academic Courses / 言語文化基礎科目・日本語 (以下、JACs)」は九州大学伊都キャンパスで開講される単位取得を目指す学部留学生向けの日本語コースである。総合日本語 (I コース)、漢字 (K コース)、会話 (S コース)、作文 (W コース) の4つのコースから構成され、入門から上級まで8段階の幅広いレベルのクラスが展開されている。現在、九州大学の学部正規留学生 (共創学部および農学部・工学部学士課程国際コース: IUPE に所属する学生を含む)、留学生センターが提供するプログラム (Japan in Today's World Program: JTW、日本語・日本文化研修コース: JLCC、日本語研修コース: JTAS) の参加学生、大学間・部局間交流協定に基づく交換留学制度を通じて留学し各学部所属する交換留学生が、本コースを受講している。2018年度秋学期に JACs と基幹教育の日本語科目および IUPE の日本語科目との統合が完了し、2019年度春学期によりやく全クラスを伊都キャンパスセンター5号館で開講する体制が整った。しかし、今般の新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2020年度から全科目をオンラインで実施することとなった。2021年度も、対面授業を一部取り入れつつ、オンライン (双方向型) を基本として開講した。以下に、2021年度 (令和3年度) の実施状況を報告する。

2. JACs の概要

2. 1. コースの編成

本コースは総合日本語 (I コース)、漢字 (K コース)、会話 (S コース)、作文 (W コース) の4つのコースから成る。表1は2021年度春学期 (Q1) と夏学期 (Q2)、表2は秋学期 (Q3) と冬学期 (Q4) のコース編成を示している。1コマ90分の構成であり、クォーター制に基づき、各クォーターで週に2回を7.5週、計15回授業が行われる。括弧内の数字はクラス数を示している。なお、各クラスの科目名は留学生センターと基幹教育で異なっているが、本稿では留学生センターで使用している科目名を使用する。科目名の一覧は本稿稿末を参照されたい。

*九州大学留学生センター准教授

表1 コース編成 (2021年度春夏学期)

レベル	総合 (I コース)	漢字 (K コース)	会話 (S コース)	作文 (W コース)
上 級	I-8 (1)	K-8 (1)	S-8 (不開講)	W-8 (1)
上 級 入 門	I-7 (1)	K-7 (1)	S-7 (1)	W-7 (1)
中 級 2	I-6 (3)	K-6 (1)	S-6 (1)	W-6 (1)
中 級 1	I-5 (1)	K-5 (1)	S-5 (1)	W-5 (1)
中 級 入 門	I-4 (2)	K-4 (1)	S-4 (1)	
初 級 2	I-3 (2)	K-3 (2)	S-3 (1)	
初 級 1	I-2 (2)	K-1+2 (1)	S-2 (1)	
入 門	I-1 (1)			

表2 コース編成 (2021年度秋冬学期)

レベル	総合 (I コース)	漢字 (K コース)	会話 (S コース)	作文 (W コース)
上 級	I-8 (1)	K-8 (1)	S-8 (1)	W-8 (不開講)
上 級 入 門	I-7 (3)	K-7 (1)	S-7 (1)	W-7 (1)
中 級 2	I-6 (1)	K-6 (1)	S-6 (1)	W-6 (1)
中 級 1	I-5 (1)	K-5 (1)	S-5 (1)	W-5 (1)
中 級 入 門	I-4 (2)	K-4 (1)	S-4 (1)	
初 級 2	I-3 (2)	K-3 (2)	S-3 (1)	
初 級 1	I-2 (2)	K-1+2 (2)	S-2 (1)	
入 門	I-1 (2)			

2021年度も大学間交換留学生の大幅な減少が続いたため、春夏学期にS-8、秋冬学期にW-8が不開講となった。しかし、その他のクラスについては例年通りのクラス数を維持した。

2. 2. 授業形態

2021年3月19日に、令和3年度の九州大学の授業については「新型コロナを含む様々な感染症対応を前提に、段階的な対面授業の再開を進める」との全学方針が出された。その後、緊急事態宣言発令中またはまん延防止等重点措置適用期間中は、原則、オンライン授業を実施し、国による特段の行政的制約がかかっていない期間中は「令和3年度後期（秋学期・冬学期）基幹教育科目授業ガイドライン」に沿って、対面授業を基本として授業を実施する方針が出された。

一方、日本政府の方針により、外国人の新規入国は2021年1月14日以降、特段の事情がある場合を除き、原則停止されていた。JACsを受講する学生には、九州大学の学部正規留学生、留学生センターが提供するプログラムの参加学生、大学間・部局間交流協定に基づく交換留学制度を通じて留学し各学部所属する交換留学生が含まれるが、このうち、高年次の学部正規留学生の半数程度は、2021年度4月段階ですでに日本に來日していた。しかし、2021年度4月入学の学部正規留学生や留学生センターが提供するプログラムの参加学生、各学部所属する交換留学生の大半は來日しておらず、渡日

の目処も立っていなかった。また、留学生センターが提供するJTWプログラムについては全面オンラインで実施することが決定していた。このように、JACs受講者にはすでに来日し福岡で生活する学生と、渡日できず現地からクラスを受講しなければならない学生が混在していた。そのため、JACsは以下の方針で授業を実施することとした。

【2021年度のJACsの授業方針】

- オンライン（双方向ライブ形式）を基本とする。
- 初回は全クラスをオンラインで実施し、プレースメントテストの結果、クラスの全員が福岡にいる場合には、基幹教育の方針に従い、状況を見つつ対面授業へ移行する。

2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大の第4波、第5波の到来により、基幹教育の授業方針も対面とオンラインを繰り返すこととなった。幸い、春学期（Q1）開始時と、秋学期（Q3）の開始時には国による規制がかかっておらず、基幹教育の授業は原則対面に移行する方針であった。そこで、JACsでは各クラスを受講者が決定した後に居住地調査を実施し、全員が福岡にいたクラスを対面授業へ移行した。春夏学期にはI-3とI-6a、秋冬学期はS-8とW-7の2クラスが対面授業となった。対面授業には教室収容人数の3分の2以下を満たす伊都キャンパスセンターゾーンの教室を使用し、JACsで作成した「JACs Guidelines for face-to-face Classes」（学生用）および「JACs科目対面授業実施のガイドライン」（教師用）に沿って感染症対策を講じた上で授業を実施した。表3は1年間の授業形態の変化をまとめたものである。

表3 2021年度のJACsの授業形態

JACs スケジュール		福岡県に対する政府の措置	基幹教育の方針（原則）	JACsの授業形態
春学期 (Q1)	2021年 4月8日 ～5月11日		対面授業 ¹	I-3：対面授業 その他のクラス： オンライン授業
	5月12日 ～6月3日	第4波 緊急事態宣言 5月12日～6月20日 まん延防止等重点措置 6月21日～7月11日	オンライン授業	オンライン授業
夏学期 (Q2)	6月10日 ～7月11日		対面授業	I-6a：対面授業 その他のクラス： オンライン授業
	7月12日 ～8月1日		対面授業	
	8月2日 ～8月4日	第5波 まん延防止等重点措置 8月2日～8月19日 緊急事態宣言 8月20日～9月30日	オンライン授業	オンライン授業
秋学期 (Q3)	10月6日 ～12月3日		対面授業	S-8とW-7：対面授業 その他のクラス： オンライン授業
冬学期 (Q4)	12月8日 ～2022年1月16日		対面授業	
	1月17日 ～2月9日	第6波 まん延防止等重点措置 1月27日～2月20日	オンライン授業	オンライン授業

(2022年1月28日現在)

1 最新の「基幹教育科目ガイドライン」に沿って、一部の授業を除き受講学生数の上限を教室定員の3分の2として、原則として対面授業を実施する。

2. 3. 使用教材

各クラスでの使用教材は表4の通りである。

表4 各クラスでの使用教材

総合	使用教材	漢字	使用教材
I-1	『初級日本語げんき I (第3版)』	K-1+2	『初級日本語げんき I (第3版)』 『Essential Japanese Kanji vol.1』
I-2	『初級日本語げんき I, II (第3版)』		
I-3	『初級日本語げんき II (第2版)』	K-3	『Basic Kanji Book vol.1』
I-4	『中級へ行こう (第2版)』	K-4	『Basic Kanji Book vol.1, vol. 2』
I-5	『中級を学ぼう (中級前期)』	K-5	『Basic Kanji Book vol. 2』
I-6	『中級を学ぼう (中級中期)』	K-6	『上級へのとびらきたえよう漢字力』
I-7	『日本語5つのとびら TOBIRA 中上級編』	K-7	『Intermediate Kanji Book vol.1』
I-8	自主作成教材を使用	K-8	『Intermediate Kanji Book vol.2』
会話	使用教材	作文	使用教材
S-2	『聞く・考える・話す 留学生のための初級日本語会話』	W-5	『表現テーマ別 にほんご作文の方法』
S-3	『聞く・考える・話す 留学生のための初級日本語会話』	W-6	『小論文の12のステップ』
S-4	『会話に挑戦! 中級前期からの日本語ロールプレイ』	W-7	『この一冊できちんと書ける! 論文・レポートの基本』
S-5	『会話に挑戦! 中級前期からの日本語ロールプレイ』	W-8	自主作成教材を使用
S-6	『日本語上級話者への道』		
S-7	自主作成教材を使用		
S-8	自主作成教材を使用		

2. 4. 学生区分／所属別の受講可能コース

JACsでは学生区分と所属によって受講できるコースやレベルに制限がある。表5に学生区分／所属別の受講可能コースを示す。表内の「○」はプレースメントテストを受験した上で、そのコースを受講できることを示し、「×」はそのコースが受講できないことを示している。学部にも所属する正規留学生はプレースメントテストなしで特定のクラスを受講することになっているため、表内にそのクラスを記している。

表5 受講可能コース一覧

学生区分／所属	Iコース	Kコース	Sコース	Wコース
留学生センター生 (JTW、JLCC、研修)	○	○	○	○
学部所属交換留学生	○	○	○	○
農学部・工学部国際コース (IUPE) 1年生	○	○	×	×
農学部・工学部国際コース (IUPE) 2年生	○	×	×	×

共創学部 (10月入学)	○	○	○	○
学部正規留学生 (共創学部10月入学生・IUPE 生以外)	I-6 (Q1&2) I-7 (Q3&4) I-8 (Q1&2) W-8 (Q1&2)	×	×	×

2. 5. 開講日程とプレースメントテスト

2021年度の各クォーターの開講日程は表6の通りである。

表6 授業の開講スケジュール

クォーター	開講期間
春学期 (Quarter 1)	2021年4月8日 ~ 2021年6月3日
夏学期 (Quarter 2)	2021年6月10日 ~ 2021年8月4日
秋学期 (Quarter 3)	2021年10月6日 ~ 2021年12月1日
冬学期 (Quarter 4)	2021年12月8日 ~ 2022年2月9日

JACsの履修には履修希望者本人が春学期(Q1)と秋学期(Q3)の始めに、オンラインによる受講申し込みを行う必要がある。通常であれば、漢字コース(K)と作文コース(W)のレベル判定は、オンラインテストと漢字テスト(筆記)の結果から総合的に判断し、会話コース(S)のクラス分けはオンラインテストと対面でのインタビューテストの結果に基づいて行う。しかし、新型コロナウイルス感染症対策のため、2020年度に続き2021年度も学期開始前の対面での一斉漢字テスト(筆記)とインタビューテストの実施を取り止め、代わりに、各クラスの初回にオンラインで実施することとした。なお、秋学期(Q3)に関しては大学間交換留学生の大幅な減少により、開講クラスの検討が必要となったため、当初の予定を前倒しし、8月下旬に履修登録とオンラインプレースメントテストを実施することにした(表7参照)。

表7 2021年度の受講登録・プレースメントテストの日程

クォーター	オンラインシステムによる受講登録・プレースメントテスト	漢字テスト(60分)	インタビューテスト(約10分/人)	作文テスト(40分)
春学期(Q1)	2021年3月22日~4月5日	4月9日	4月8日	4月9日
秋学期(Q3)	2021年8月22日~8月30日	10月6日	10月7日	10月6日

3. 履修者

3. 1. 履修者の内訳(クラス別)

2021年度春学期(Q1)の最終履修者数は88名(延べ155名)、秋学期(Q3)の最終履修者数は、114名(延べ209名)であった。春学期と秋学期のクラス別履修者数を表8と表9に示す。

表8 2021年度春学期（Q1）クラス別履修者数（延べ履修者数）

レベル	総合コース		漢字コース		会話コース		作文コース	
上級	I-8	11	K-8	3	S-8	—	W-8	2
上級入門	I-7	2	K-7	3	S-7	5	W-7	2
中級2	I-6	20	K-6	7	S-6	4	W-6	3
中級1	I-5	7	K-5	5	S-5	3	W-5	6
中級入門	I-4	5	K-4	10	S-4	3		
初級2	I-3	14	K-3	17	S-3	3		
初級1	I-2	11	K-1+2	4	S-2	2		
入門	I-1	4						
総計 155名								

表9 2021年度秋学期（Q3）クラス別履修者数（延べ履修者数）

レベル	総合コース		漢字コース		会話コース		作文コース	
上級	I-8	1	K-8	2	S-8	2	W-8	—
上級入門	I-7	23	K-7	3	S-7	2	W-7	2
中級2	I-6	6	K-6	3	S-6	5	W-6	3
中級1	I-5	17	K-5	11	S-5	9	W-5	6
中級入門	I-4	21	K-4	11	S-4	8		
初級2	I-3	17	K-3	7	S-3	5		
初級1	I-2	6	K-1+2	18	S-2	5		
入門	I-1	16						
総計 209名								

新型コロナウイルス感染症拡大前の2019年度と比べると、履修者数は、春夏学期・秋冬学期ともに約40名（延べ約100名）減少した。このため、10名以下で構成されるクラスが大半を占めている。とくに、留学生センターが提供するプログラムに所属する留学生の数が大幅に減少したため、それらの学生が主な受講対象である会話コース（S）と作文コース（W）の履修者が例年よりかなり少なくなっている。

3. 2. 履修者の内訳（出身地域別）

表10は春学期（Q1）と秋学期（Q3）の履修者を出身地域・国籍別にまとめたものである。

表10 出身地域別の履修者数

アジア			春学期	秋学期	ヨーロッパ			春学期	秋学期
中華人民共和国			24	19	フランス共和国			4	9
インドネシア共和国			10	20	ドイツ連邦共和国			3	4
大韓民国			8	10	ルーマニア			1	—
台湾			6	5	ウクライナ			1	—
タイ王国			5	7	英国			—	4
ベトナム社会主義共和国			5	4	オランダ			—	1
フィリピン共和国			2	3	スウェーデン王国			—	1
香港			2	—	小計			9名	19名
モンゴル国			1	1					
エジプト・アラブ共和国			1	2	北アメリカ			春学期	秋学期
シンガポール共和国			1	1	アメリカ合衆国（米国）			2	6
トルコ共和国			1	2	カナダ			1	1
日本国			1	1	小計			3名	7名
パキスタン・イスラム共和国			1	1	中南米			春学期	秋学期
バングラデシュ人民共和国			1	1	コスタリカ共和国			1	1
マレーシア			1	2	グアテマラ共和国			1	1
インド			—	2	チリ			1	—
スリランカ			—	1	ペルー共和国			1	1
イスラエル			—	1	ブラジル			1	2
小計			70名	83名	小計			5名	5名
オセアニア			春学期	秋学期	総計			88名	114名
オーストラリア連邦			1	—					
小計			1名	0名					

3. 3. 履修者の内訳（身分別）

表11は、春学期（Q1）と秋学期（Q3）の身分別の履修者数を学期ごとにまとめたものである。

表11 身分別の履修者数

留学生センター生	春学期	秋学期
Japan in Today's World (JTW)	12	22
日本語・日本文化研修コース (JLCC)	8	5
日本語研修コース	7	4
小計	27名	31名
学部正規留学生	春学期	秋学期
工学部国際コース (IUPE)	14	33
農学部国際コース (IUPE)	10	14
共創学部 2019年度秋入学	3	2
共創学部 2020年度秋入学	9	9
共創学部 2021年度春入学	1	1
共創学部 2021年度秋入学	-	5
その他の学部正規留学生	22	15
小計	59名	79名
学部所属交換留学生	春学期	秋学期
芸術工学部	2	-
法学部	-	3
経済学部	-	1
小計	2名	4名
総計	88名	114名

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、2020年度に九州大学と学生交流協定を結ぶ海外の大学からの短期交換留学生数が大きく減少した。2021年度秋学期にはやや回復基調が見られたものの、2019年度以前と比べると依然6割程度にとどまっている。一方、学部正規留学生に関しては、2019年度以前と比べるとやや減少しているが、減少幅は交換留学生ほど大きくない。とくに、工学部・農学部IUPE生は2019年度とほぼ変わらない学生数を維持している。

4. 2021年度の運営に行った改善

4. 1. JACs 学生用システムの改修

2020年度にJACs学生用システムを一新し、所属や身分にかかわらず、JACsを受講する全ての学生の受講登録・プレースメントテスト受験と成績管理ができるようになった。2021年度には実際の運用を通して、以下の点について改修を行った。

1) Google Chrome 対応

これまでオンラインテストはInternet Explorer (Windows) と Safari (Mac) のブラウザにしか対応していなかった。Internet Explorerは2022年6月にサポートを終了することから、今後主流となる

Google Chrome に対応できるように修正した。

2) ポップアップウィンドウの廃止

旧オンラインプレースメントテストでは、学生がシステムにログイン後、ポップアップウィンドウが表示され、テストを受験する仕様になっていた。しかし、ブラウザの初期設定で、ポップアップウィンドウを表示しない設定になっている場合が多く、学生からポップアップブロックの解除方法に関する問い合わせが多数あった。そこで、今回の修正でポップアップウィンドウを廃止し、元のブラウザでテストが受験できるようにした。これにより、学生からの問い合わせが格段に減少した。

4. 2. JACs 教師用受講管理システムの改修

2020年度のJACs学生用システムの改修に続き、2021年度は教師用システムを一新した。これにより、操作性・機能性が高まり、より使い勝手の良いシステムとなった。主な修正点を以下に示す。

1) 不要な機能の削除・修正

旧システムは10年以上改修を重ねながら使用してきたが、その間にJACsの統合やコース編成の変更などがあり、実際の運営とは合わない機能が複数存在していた。新システムでは、それらの機能を削除または、現在のコース運営に合わせて修正した。

2) 「お知らせメール送信」

JACs教師用システムには、受講生にメールを一斉送信できる機能があるが、旧システムは所属学部やプログラムごとの一斉送信には対応していなかった。2018年の日本語コースの統合以降、さまざまな身分・所属の学生がJACsを受講するようになったため、新システムでは「JACs ID」「学生のクラス」「身分」に加え、「所属学部・プログラム」ごとに学生を検索し、メールを一斉送信できる機能を追加した。

3) 「学生情報検索」および「コースの登録変更」

JACs教師用システムには、受講生の基本情報を検索するための「学生情報検索」画面と学生の受講管理のための「コースの登録変更」画面がある。旧システムでは、これらの画面に「学期」「クラス」「JACs ID」で学生を検索できる機能がついており、その検索結果を1画面に15件ずつ表示していた。しかし、新システムでは、これらの検索機能に加え「学生番号」でも学生を検索できるようにし、検索結果を1ページに一覧で表示できるようにした。

4) 画面のレイアウト

新システムでは各機能を運用目的ごとに、以下の5つに整理した。

- A) コース運営：コースの登録・変更、学期末成績入力、お知らせメール送信
- B) プレースメントテスト管理：学生情報検索、プレースメント結果入力、各コースの自動レベル判定
- C) システム設定：スケジュール設定、学期設定、開講クラス設定、テスト配点設定、レベル判定基準設定、プレースメントテストメッセージ登録、一括継続登録、年次切替
- D) その他：ファイルアップロード設定、教師情報設定、パスワード変更
- E) 事務処理：受講証明書発行、認定資料発行

A) は授業担当者が学期中に使用する機能であり、B) ～ E) は JACs 運営スタッフのみが使用する機能である。管理者権限を有するユーザーがログインすると上記の全ての機能を表示され、それ以外のユーザには、A) と「パスワード変更」のみが表示される仕様になっている。JACs 運営スタッフのみに管理者権限を付与して使用することで、授業担当教員には授業に必要な機能のみを表示できるようになった。

4. 3. 学生ポータルシステムへのシラバスおよび成績入力方法の変更

2018年度秋学期に JACs が基幹教育科目になったことにより、「基幹教育言語文化基礎科目・日本語」として開講されている全科目について、学生ポータルシステム (campusmate) へのシラバス登録が必要になった。しかし、従来、JACs の受講管理には独自のシステムを使用しており、担当教員が学生ポータルの使用に不慣れであったことから、昨年度までは担当教員から word 形式で提出されたシラバスを JACs 運営チームが手作業でコピーして学生ポータルに登録していた。しかし、コース統合から約 2 年が経過し、担当教員も学生ポータルの使用に慣れてきたことから、2021年度より担当教員が学生ポータルに直接シラバスを登録する方式へ変更した。

また、成績入力に関しては、2018年度の統合をきっかけに、正規留学生 (共創学部や工学部・農学部の IUPE 生を含む) も JACs を受講するようになったことで、彼らの成績を学生ポータルシステムに登録する必要が生じた。しかし、2020年度までは JACs 科目を担当する非常勤講師が直接システムを操作することが技術的に不可能であったことから、担当教員が JACs 教師用受講管理システムに登録した成績から、JACs 運営チームが正規留学生の成績を抽出し基幹教育へ提出する方法を採っていた。しかし、システム改修により非常勤講師も成績登録が可能となったことから、2021年度秋学期から担当教員自身が学生ポータルシステムにアクセスし、正規留学生の成績を直接登録する方式に変更した。

4. 4. Zoom の設定方法の変更

2020年度に Zoom でのオンライン授業が始まって以来、授業の Zoom ミーティングは JACs 運営チームが設定し、学生へ周知していた。これは、オンライン授業に不慣れな非常勤講師への配慮であった。しかし、2021年度に Zoom 側のシステム変更により、同一アカウントの主催となるホストが作成したミーティングは同時に 2 つまでしか開催できず、3 つ目を開催しようとした場合には開催中の他のミーティングが終了するという仕様になったことから、上記の方法ができなくなった。そこで、2021年 7 月より、担当教員自身が Zoom ミーティングを設定し、学生へ周知する方式に変更した。Zoom の使用開始から約 1 年半が経過しており、JACs 担当教員が Zoom の使用にも慣れていたこともあり、全クラスにおいて問題なく設定が完了した。

4. 5. 学期末授業評価アンケートの実施方法の変更

2020年度までは Google フォームを使用して各学期末に学生向け授業評価を実施していた。しかし、オンライン授業を中国から受講する一部の学生が Google フォームへアクセスができないことがわ

かったため、2021年度夏学期（Q2）より、Office 365のMicrosoft Formsを使用して授業評価を実施することとした。なお、本アンケートの結果は春学期（Q1）と秋学期（Q3）の開始前に実施するJACs担当教員向け連絡会議で共有し、問題点を話し合うことにより、コース改善に活用した。

5. 今後の課題

今後の課題として、以下の4点を挙げる。

5. 1. 「基幹教育言語文化基礎科目・日本語」科目名の変更

JACsには、留学生センター所属の学生が使用する科目名と、正規留学生が受講する際の「基幹教育言語文化基礎科目・日本語」の科目名が存在する（稿末資料の科目名一覧を参照）。後者は2018年度後期にJACsが統合した際に作られたものであるが、名前が非常に長くレベルの一貫性が伝わりにくい。また、一つの科目に対し、横並びで複数のクラスが開講されることを表す「a」「b」と各クォーターを示す「A」「B」が似通っている。これらが原因で、学生が受講登録の際に混乱したり、事務スタッフが開講科目を設定する際に登録を間違えたりするケースが多発している。これらの問題を解消するため、今後は学生、運営スタッフ双方にとってわかりやすい科目名に変更したい。

5. 2. 学部正規留学生の受講方法の見直し

現在、学部正規留学生（共創学部4月入学生を含む）はプレースメントテストを受験することなく、特定のクラスを受講することになっている。これは学部に入學する留学生の日本語レベルが均一であると想定されてのことである。しかし、実際には学生の日本語レベルのばらつきが非常に大きいという問題がある。そのような場合、明らかにレベルの低い学生には個別にプレースメントテストを実施し、指定されたクラスよりも低いレベルのクラスを受講してもらったり、秋学期にI7クラスを3クラス設置し、春学期の成績に応じてクラス分けを行ったりしてきた。これらの工夫により、状況はやや改善されているが、根本的な解決には至っていない。本来であれば、学生が自分の日本語レベルにあったクラスを受講するのが望ましい。他の身分／所属の学生と同様に、学期開始前にプレースメントテストを実施し、レベルにあったコースを受講してもらえるよう今後も働きかけていきたい。

5. 3. 日本にルーツを持つ学習者への対応

近年、両親や祖父母が日本人であったり、幼少期の一定期間を日本で過ごした経験がある等、日本にルーツを持つ学生がJACsを受講するようになってきている。これらの学生は、インターナショナルスクールや日本人学校、日本語ができる周囲の人々との関わり、インターネットやアニメ・漫画等から日本語を学んできている。彼らの日本語能力は4技能にバラつきがあり、口頭コミュニケーション能力に比べ、読み書き能力が低い場合が多い。時には、会話能力は極めて高い一方で、読み書きの能力が著しく低い学生もいる。

JACsが提供する日本語教育は、外国語・第二言語として日本語を学ぶ留学生を対象としたもので

あり、当初は上記のような学生の受講は想定していなかった。そのため、このような学生がいた場合にはJACsの枠組みの中で学生が最大限に日本語能力を高めていけるように、学生本人および関係教員と相談の上、特別対応をしてきた。これまでに行った対応から浮かび上がってきた課題を以下に記す。

- 1) 自分自身の文章表現力や漢字能力が低いことを自覚し、自ら低いレベルのクラスの受講を希望する学生がいる一方で、自分の日本語力をネイティブレベルであると評価し、留学生向けの日本語クラスの受講に抵抗感を抱く学生もいる。また、プレースメントテストの結果、自己評価よりも低いレベルに入ることに嫌悪感を示す学生もいる。彼らの日本人としてのアイデンティティを尊重し、プライドを傷つけないような配慮が必要であると思われる。
- 2) 通常のクラス分けでは、多くの場合、漢字コース (K) と作文コース (W) のレベルは総合コース (I) のレベル±1の範囲内に納めるのが基本である。しかし、彼らのように口頭コミュニケーション能力と読み書き能力の差が著しく大きい場合には、漢字コースや作文コースで総合コースよりも2レベル以上低いコースに入ることを認めたり、JACs科目は漢字コースや作文コースのみを受講してもらい、残りの必要単位数は日本語とは別の科目で読み替えるなどの対応をしてきた。しかし、総合コースのレベルが漢字コースや作文コースのレベルよりも2レベル以上高い場合、総合クラスでの読解活動で漢字が読めず、教員が個別に特別対応を迫られる場合もあるため、クラス分けの際はコース間のレベル差を慎重に判断する必要がある。
- 3) 彼らは、外国語・第二言語として日本語教育を受けた経験がないため、日本語教育で用いられる文法用語が理解できなかったり、授業の進め方に戸惑ったりすることがある。他の学生に配慮しつつ、これらの学生がスムーズに授業内容を理解できるように工夫が必要であると思われる。また、このような学生が日本語能力をバランスよく高めていくために、教師が教室内外でどのようにサポートできるかを考える必要がある。

今後、多様な背景を持つ学習者はさらに増えることが予想される。JACsがどのような学生を対象に日本語教育を行い、どこまでサポートすべきなのかを今後しっかりと議論していく必要がある。

6. おわりに

2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大の状況と学生の渡日状況を鑑み、一定期間一部のクラスで対面授業を実施したものの、大半のクラスについては昨年度に引き続きオンライン（双方向ライブ形式）で授業を実施した。ありがたいことに、このような状況であっても、大多数の学生は日本時間で行われる授業に休むことなく出席し、学習活動に熱心に取り組んでくれた。そして、学期末授業評価アンケートの結果から、受講生らがJACsの授業に概ね満足していることがわかった。しかし、時差が大きくなる場合に学生の身体的・精神的負担が非常に大きくなることや、オンライン授業ではクラス内の日本語での発話機会やクラスメートとのやり取りが少なくなる傾向があることには十分な配慮が必要である。依然、学生の渡日状況は不透明であるが、今後入国制限が緩和され学生が来日でき

れば、多くの授業が感染症対策を講じた上で対面授業に移行していくことになるだろう。2020年度と2021年度にオンライン授業を行ったことにより、学習システム Moodle で授業資料の共有や宿題・課題の管理を行うようになる等、学習におけるさまざまなメリットもあった。また、オンライン授業の経験を通して、授業担当教員や運営スタッフは対面授業とは異なるスキルを身につけることができた。今後は、これまでの対面・オンライン両方の授業経験を活かし、授業形態に関わらず、より柔軟に質の高い教育を提供できるよう努めていきたい。

参考文献

- 脇坂真彩子 (2018) 「九州大学留学生のための日本語コース (JACs)」『九州大学留学生センター紀要』26, 83-88.
- 脇坂真彩子 (2019) 「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」『九州大学留学生センター紀要』27, 79-90.
- 脇坂真彩子 (2020) 「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」『九州大学留学生センター紀要』28, 39-51.

付録「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」科目名一覧

留学生センター生	共創学部生・IUPE生・学部所属交換留学生		学部正規留学生	
科目名	シラバス上の科目名	略称	シラバス上の科目名	
I-1	Integrated Courses : Beginners A	I1A		
	Integrated Courses : Beginners B	I1B		
I-2	Integrated Courses : Elementary 1A	I2A		
	Integrated Courses : Elementary 1B	I2B		
I-3	Integrated Courses : Elementary 2A	I3A		
	Integrated Courses : Elementary 2B	I3B		
I-4	Integrated Courses : Pre-Intermediate A	I4A		
	Integrated Courses : Pre-Intermediate B	I4B		
I-5	Integrated Courses : Intermediate 1A	I5A		
	Integrated Courses : Intermediate 1B	I5B		
I-6	Integrated Courses : Intermediate 2A	I6A		日本語Ⅰ (Q1)
	Integrated Courses : Intermediate 2B	I6B		日本語Ⅱ (Q2)
I-7	Integrated Courses : Pre-Advanced A	I7A		日本語Ⅲ (Q3)
	Integrated Courses : Pre-Advanced B	I7B		日本語Ⅳ (Q4)
I-8	Integrated Courses : Advanced A	I8A		日本語Ⅴ (Q1)
	Integrated Courses : Advanced B	I8B		日本語Ⅵ (Q2)
K-1+2	Kanji Courses : Elementary 1A	K1+2A		
	Kanji Courses : Elementary 1B	K1+2B		
K-3	Kanji Courses : Elementary 2A	K3A		
	Kanji Courses : Elementary 2B	K3B		
K-4	Kanji Courses : Pre-Intermediate A	K4A		
	Kanji Courses : Pre-Intermediate B	K4B		
K-5	Kanji Courses : Intermediate 1A	K5A		
	Kanji Courses : Intermediate 1B	K5B		
K-6	Kanji Courses : Intermediate 2A	K6A		
	Kanji Courses : Intermediate 2B	K6B		
K-7	Kanji Courses : Pre-Advanced A	K7A		
	Kanji Courses : Pre-Advanced B	K7B		
K-8	Kanji Courses : Advanced A	K8A		
	Kanji Courses : Advanced B	K8B		
S-2	Speaking Courses : Elementary 1A	S2A		
	Speaking Courses : Elementary 1B	S2B		
S-3	Speaking Courses : Elementary 2A	S3A		
	Speaking Courses : Elementary 2B	S3B		
S-4	Speaking Courses : Pre-Intermediate A	S4A		
	Speaking Courses : Pre-Intermediate B	S4B		
S-5	Speaking Courses : Intermediate 1A	S5A		
	Speaking Courses : Intermediate 1B	S5B		
S-6	Speaking Courses : Intermediate 2A	S6A		
	Speaking Courses : Intermediate 2B	S6B		
S-7	Speaking Courses : Pre-Advanced A	S7A		
	Speaking Courses : Pre-Advanced B	S7B		
S-8	Speaking Courses : Advanced A	S8A		
	Speaking Courses : Advanced B	S8B		
W-5	Writing Courses : Intermediate 1A	W5A		
	Writing Courses : Intermediate 1B	W5B		
W-6	Writing Courses : Intermediate 2A	W6A		
	Writing Courses : Intermediate 2B	W6B		
W-7	Writing Courses : Pre-Advanced A	W7A		
	Writing Courses : Pre-Advanced B	W7B		
W-8	Writing Courses : Advanced A	W8A	日本語Ⅶ (Q1)	
	Writing Courses : Advanced B	W8B		

日本語研修コース

Japanese Training for Advanced Studies¹

大神 智 春*

1. はじめに

日本語研修コースは、大学院に進学する予定の国費研究留学生を主な対象として、来日後の半年間日本語予備教育を集中的に行うコースである。日本語研修コース（以下研修コース）では、初級からの日本語教育、日本事情教育、専門教育の場への適応を促進するための活動、の3点を予備教育として行っている。目標は「会話を中心とした初級日本語を習得させること」、「研究の場において日本人と基本的なコミュニケーションができるようにすること」である。以下に令和2年度（2020年度）の実施状況を報告する。

2. 実施概要

令和2年度（2020年度）は、4月13日にコース開始予定であったが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が急速に感染拡大したため、4月は休講となり、全学的に5月7日に学期開始となった。感染防止のため、春学期は全てオンライン授業となり、秋学期は、初級学習者については大学の方針に従い、11月11日から12月25日までの約1か月半のみ対面授業、残りの期間はオンライン授業を実施した。既習者については、秋学期も全てオンライン授業となった。尚、毎学期、学習者の渡日後に実施しているオリエンテーションであるが、令和2年度（2020年度）はオンラインツールが問題なく使用できるかどうかの確認も兼ね、コース開始前に実施した。

- 1) 実施期間 前期 5月7日 - 8月12日（第70期）
 後期 9月27日 - 3月2日（第71期）

2) 主な日程

①前期²

ゼロ初級者への平仮名指導（オンライン）

4月中旬に開始

*九州大学留学生センター教授

1 令和2年度（2020年度）より、英語名を Japanese Training for Advanced Studies に変更した。

2 学期開始日が変則的であったため、開講式を実施することができなかった。

第1回目オリエンテーション（オンライン）	4月中旬
第2回目オリエンテーション（オンライン）	4月下旬
授業開始	5月7日
日本人学生とのビジターセッション（オンライン）	8月5日
発表会（オンライン）	8月12日
閉講式（オンライン）	9月2日

②後期

ゼロ初級者への平仮名指導（オンライン）	9月上旬に開始
第1回目オリエンテーション（オンライン）	9月中旬
第2回目オリエンテーション（オンライン）	9月下旬
開講式（オンライン）	10月5日
授業開始	10月5日
見学旅行（大宰府）	11月28日
発表会（オンライン）	2月8日
閉講式（オンライン）	3月1日

3) 受講者

受講者は、文科省の国費外国人留学生のうち九州大学および北部九州地区の大学へ配属された研究留学生である。

①前期 9名

前期はゼロ初級者が5名、既修者4名であった。既習者はJapanese Academic Courses(以下JACs)で総合コース、漢字コース、会話コースを受講した。

出身：アルゼンチン、インド、コンゴ民主共和国、ジンバブエ、タンザニア（2名）、フランス、メキシコ、ルーマニア

進学先：九州大学9名

②後期 6名

6名中5名が九州大学に進学予定であり、1名が九州工業大学に進学予定であった。また、2名がゼロ初級者、4名が既習者であった。既習者はJACsで総合コース、漢字コース、会話コースを受講した。

出身：クウェート、コロンビア、シリア、ナイジェリア、ペルー、メキシコ

進学先：九州大学5名、九州工業大学1名

4) 時間割

ゼロ初級コースについては、研修生の国の時差を考慮し、全コース午後を開講することにした（下記時間割）。既習者については、JACsで開講している4コースの中から3コース以上を受講すること

になっているため、時差的に可能なコースを受講させるようにした。

なお、ゼロ初級コースでは、対面授業で行っていた時間配分がそのままオンライン授業でも適用できるか不明であったため、1コマ当たりの授業内容を軽減し学習者の負担が大きくなるようにした。また、授業で時間が余った場合は宿題をさせることで時間調整をした。

限	時間	月	火	水	木	金
3	13:00-14:30	I-1	文化	I-1	文化	
4	14:50-16:20	I-1	S-1	K-1	S-1	K-1
5	16:40-18:10		I-1	文化	I-1	文化

3. 授業内容³

日本語研修コースではゼロ初級コースを独自開講していることから、本稿ではゼロ初級コースの内容について記載する。

1) 授業時間数

前期・後期：各15週間（195時間）

2) 使用教材

I-1	『初級日本語げんき I』 『初級日本語教材げんき ワークブック I』	坂野永理他 坂野永理他	The Japan Times The Japan Times
I-2	『初級日本語げんき I』『初級日本語げんき II』 『初級日本語教材げんき ワークブック I』 『初級日本語教材げんき ワークブック II』	坂野永理他 坂野永理他 坂野永理他	The Japan Times The Japan Times The Japan Times
K-1	『初級日本語げんき I 読み書き編』 プリント教材	坂野永理他	The Japan Times
S-1	『初級日本語げんき I』 プリント教材	坂野永理他	The Japan Times
文化	自習作成教材		

3) 授業内容

ゼロ初級レベルのクラスの授業内容は下記のとおりである。

I-1：日本語学習経験のない学習者を対象に、基礎的な文法や語彙を勉強し、簡単な日常会話ができるようになることを目指す。教科書の第1課から第8課がI-1に該当する。

I-2：I-1で動詞、形容詞の過去形、非過去の活用を学習した後にI-2に入る。日常会話に必要な基本

3 既習者の授業内容についてはJACs (Japanese Academic Courses) の年報を参照。

的文法や語彙を学び、身近な話題で会話ができる日本語能力を養成する。教科書の第9課から第15課が学習範囲である。

S-1 : I-1のクラスと連動させながら、テキストの会話部分を補足発展させ、十分に会話の練習を行う。また、日常会話に必要な基礎的な表現を学ぶ。

K-1 : ひらがな・カタカナの定着をはかった後に漢字学習を開始する。文法学習 (I-1クラス) の進捗の後を追う形ですすめる。

文化: ①日本の大学や日本社会での生活に適応できる力をつけること、②日本文化と研修生それぞれの国の文化の違いに気づき、異なる価値観を理解すること、③アカデミックな発表の方法を学ぶこと、の3点を目標としている。このクラスでは教室活動の他にフィールドトリップなどの見学や訪問も取り入れている。当コース終了前の最終発表会の準備も含む。

4. 研修生からの評価

毎学期、コース終了前に研修生による評価をアンケート形式で実施している。結果は今後の本コース改善の資料として活用している。以下に評価の結果をまとめる。尚、アンケートでは自由記述形式で研修生にコメントを書いてもらっている項目がある。本稿では代表的なコメントおよび今後の課題として考えさせる意見を抜粋し紹介する。

①前期 9月2日実施 回答者：9名（ゼロ初級者5名・既習者4名）

a. 日本語のクラスに関して（ゼロ初級者5名が回答）

*数字は人数

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
I-1	5	0	0	0	0	0
S-1	4	1	0	0	0	0
K-1	2	2	1	0	0	0
文化	5	0	0	0	0	0

- All the teachers and the classes were great and fun! I had a really wonderful time. Getting an opportunity to know about so many different cultures from the teachers as well as my classmates was a great learning experience.
- We had a lot of time to practice our speaking. The teacher was kind and she always corrected our mistakes.
- The writing and reading practice the teacher gave was very valuable. Her great attention to the order of strokes was very inspiring.
- The Bunka class was very interesting. I had the opportunity to learn a lot about the Japanese and classmates' culture and speak about my country.

b. もっと勉強したいこと（初心者5名が回答、複数回答可）

文法	会話	漢字	リスニング	発音	単語	読解	筆記	文化	スピーチ	その他
4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	4

c. 「最終発表会」について（ゼロ初級者5名回答）

大変有意義	有意義	どちらとも言えない	それほどよくない	全然よくない	無回答
5	0	0	0	0	0

- The last presentation was a great opportunity to integrate all the lessons learnt and to interact with all the teachers at the same time.
- I had a very nice impression on the presentation sessions. It was challenging to speak about our culture and very interesting to see how people from different countries think and see the world.

d. オンライン授業について（全員回答）

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
5	4	0	0	0	0

- The teachers prepared the online classes well. Despite the time differences between Japan and my country and sometimes, the low quality of my internet, I enjoyed the online class.
- The teacher's net connection was really good. But due to bad weather and other technical difficulties, my internet was sometimes bad. I am thankful that despite this, I was able to attend all the lectures. The online classes were a new, good experience.

e. コースに対する満足度（全員回答）

90%-100%	7
80% -89%	1
70% -79%	1
50% -69%	0
49% 以下	0

f. コースへの全体の感想（ゼロ初級者、既修者）

- The Professor always made extra effort to provide useful information and knowledge to their students, thinking in our needs
- Time frame is very small i think five months period will be accomodative. Also in the beginning slow pace of teaching is needed. It was very difficult for starters and i had to carry myself to cope with the class but later on after difficult start i managed to proceed well.

②後期 3月1日実施 回答者：4名（ゼロ初級学習者2名・既習者2名が回答）

a. 日本語のクラスに関して（ゼロ初級者2名の回答）

*数字は人数

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
I-1	2	0	0	0	0	0
S-1	2	0	0	0	0	0
K-1	1	1	0	0	0	0
文化	2	0	0	0	0	0

- The content was great, it enabled me to communicate more comfortably in day to day conversations outside of class, the homework was adequate, the teachers were all very helpful and understanding and willing to repeat as many times to get the idea across
- At first, I was not able to follow in the S1 class because the pace was fast considering I had no prior knowledge of speaking Japanese. The content was relevant especially in helping me make presentations in Japanese. Within a short time, I had built confidence in speaking.
- This class presented the greatest difficulty at first because I had to learn the right stroke order of Hiragana, Katakana and Kanji. This was daunting at first but with continual practice, assignments and attention to detail from my teacher, I was able to catch up.
- The content of the class was great and was a lot of fun to learn about the different cultural aspects of Japan that many people including myself might have not known before coming to Japan.

b. もっと勉強したいこと（複数回答可 ゼロ初級者2名の回答）

文法	会話	漢字	リスニング	発音	単語	読解	筆記	文化	スピーチ	その他
1	2		2		2	2	1	1	1	0

c. 「最終発表会」について（ゼロ初級者2名回答）

大変有意義	有意義	どちらとも言えない	それほどよくない	全然よくない	無回答
2	0	0	0	0	0

- the last presentation helped us manage to deliver certain points across that are relevant especially when introducing our cultures to Japanese people whom may have an interest. I found the questions very helpful and it helped us the presenters as well as the viewers interact more with the presentation.

d. オンライン授業について（全員回答）

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
1	2	1	0	0	0

- 私はいつもネットの問題がありました。
- Although ideally i would have preferred the classes to be seated to gain the full experience of the language learning, It is not really within our hands due to the pandemic. I think the professors did a great job teaching the subjects on the online platform, and made learning just as much enjoyable.

e. コースに対する満足度（ゼロ初級者・既習者4名回答）

90%-100%	4
80% -89%	0
70% -79%	0
50% -69%	0
49% 以下	0

f. コース全体の感想（全員回答）

- 作文を書いたり、日本語でいろいろなことについて話したりできてよかった。
- The friendly learning atmosphere and proactiveness of my teachers and classmate to help when I get confused.
- Perhaps allow for a more casual and informal means of interaction for practice purposes, weather with the professors themselves or guests that are meant to engage in this sort of role play.

4. 令和2年度（2020年度）のまとめと今後の課題

令和2年度（2020年度）は、新型コロナウイルス感染症パンデミックの影響でオンライン授業が実施されたことから、年間スケジュール、コースの進度、1コマ当たりの授業内容、授業方法など、全てにおいて大きな変更が求められた。オンライン授業の良かった点と課題をまとめる。

1) 良かった点

- ①オンライン上では複数名が同時に話すことが難しく、1人が話しているときは他の者は話さないというスタイルであるため、学習者1人1人の発話をしっかり聞くことができた。
- ②学習者の国の文化を紹介し合う授業では、パソコンやスマートホンなどの画面を通して現地の様子を直接見せ合うことができ、臨場感あふれる授業展開ができた。

2) 課題

- ①オンライン授業では、予習・復習・宿題などを学習者の自己管理にまかせる割合が大きくなる

が、日本の語学学習のスタイルと自国での学習スタイルが異なる者もあり、十分な学習効果を得られない者もいた。

- ②テストや小テストのときに、カンニングを防止するのが難しかった。
- ③様々な国の学習者がオンライン授業を受けることから、日本時間に合わせて授業を開講したが、時差の大きい国の学習者にとっては大きな負担となった。
- ④奨学金は学習者が渡日しないと支給されない。学習者たちは当コースを受講するために、また、学期中に渡日するために、国での仕事を辞めなければならないが、中には生活のために渡日直前まで仕事を辞めることができない者もいる。そのような学習者は、時間的余裕がないため当コースを受講するのが困難になり、途中で当コースを辞退せざるを得なくなる。新型コロナウイルス感染症パンデミックが続いている間は、文科省の方でもっと柔軟な対応をできないものだろうか。

基幹教育の日本語

Report on the Fundamental Subjects for Language and Culture/Japanese

郭 俊 海*

大 神 智 春*

脇 坂 真彩子**

1. はじめに

基幹教育では、「学び方、考え方を学ぶ」姿勢の涵養こそが学問追求の基本であるという観点に立ち、自ら問いを立て主体的な学びのできるアクティブ・ラーナーを育成することを目標として掲げている。基幹教育院のマネジメントのもと、全学出動態勢で教育が行われている。学部留学生が対象の「日本語」は、基幹教育院教員を班長とする日本語班において、留学生センターの日本語教育部門の教員と連携して、授業運営を行っている。

基幹教育の「日本語」は言語文化科目・言語文化基礎科目に分類されている。平成31年4月から、基幹教育の日本語は留学生センターの日本語コース（JACs: Japanese Academic Courses）と一本化され、言語文化基礎科目・日本語（Fundamental Subjects for Language and Culture/Japanese）として開講されている。

2. 令和3年度の実施概要

2. 1. 開講科目及び履修方法

「日本語」のカリキュラムは、四技能（聞く・話す・読む・書く）を段階的にバランスよく伸ばし、大学の学士課程で学術活動を行えるレベルの日本語の運用能力を身につけられるように編成されている。1年生においては、様々な話題を取り上げ、文法や語彙の学習、読解や作文練習、口頭発表やディスカッション等を行う。2年生以上においては、より抽象度の高い専門的なテーマを取り上げ、読解やディスカッション、アカデミック・ライティングの実践等を通して、より高度な日本語運用能力を身につけることを目指す。

4月入学の全学部1年生は「基幹教育科目（日本語Ⅰ～Ⅳ）」、2年生以上は「基幹教育科目（日本

*九州大学留学生センター教授

**九州大学留学生センター准教授

語Ⅴ～Ⅶ)」となっている。「日本語」を細分類すると表1のようになる。

共創学部10月入学生は、総合日本語 (Integrated Courses)、漢字 (Kanji Courses)、会話 (Speaking Courses)、作文 (Writing Courses) の4コースから必要単位数分の授業を選択し履修することになっている (表2)。

基幹教育科目の日本語を履修するには、通常の履修登録に加えて、授業開始前にならず専用のシステムへの受講登録が必要であり、春学期と秋学期の開始前に、基幹教育教務係を通じて学生へ周知している。

令和3年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、引き続きほとんどの授業をオンライン (双方向ライブ型) で実施することとなった。

表1 学部正規留学生対象日本語科目一覧及び開講学期¹

科目名	単位数	開講学期					
		1年前期		1年後期		2年前期	
		春	夏	秋	冬	春	夏
日本語Ⅰ	1	○					
日本語Ⅱ	1		○				
日本語Ⅲ	1			○			
日本語Ⅳ	1				○		
日本語Ⅴ	1					○	
日本語Ⅵ	1						○
日本語Ⅶ	1					○	

表2 共創学部10月入学生対象日本語科目一覧及び開講学期

コース レベル		I		K		S		W	
		Integrated Courses (総合コース) 各1単位		Kanji Courses (漢字コース) 各1単位		Speaking Courses (会話コース) 各1単位		Writing Courses (作文コース) 各1単位	
		春・秋 学期	夏・冬 学期	春・秋 学期	夏・冬 学期	春・秋 学期	夏・冬 学期	春・秋 学期	夏・冬 学期
1	Beginners (入門)	I-1A	I-1B	K-1+2-A	K-1+2-B	-	-	-	-
2	Elementary 1 (初級1)	I-2A	I-2B			S-2A	S-2B	-	-
3	Elementary 2 (初級2)	I-3A	I-3B	K-3A	K-3B	S-3A	S-3B	-	-
4	Pre-Intermediate (中級入門)	I-4A	I-4B	K-4A	K-4B	S-4A	S-4B	-	-

1 『2021年度入学者用 基幹教育履修要項』113頁より抜粋

5	Intermediate 1 (中級1)	I-5A	I-5B	K-5A	K-5B	S-5A	S-5B	W-5A	W-5B
6	Intermediate 2 (中級2)	I-6A	I-6B	K-6A	K-6B	S-6A	S-6B	W-6A	W-6B
7	Pre-Advanced (上級入門)	I-7A	I-7B	K-7A	K-7B	S-7A	S-7B	W-7A	W-7B
8	Advanced (上級)	I-8A	I-8B	K-8A	K-8B	S-8A	S-8B	W-8A	W-8B

2. 2. 単位履修のオリエンテーション

毎年4月の一週目に、新入学部留学生（共創学部生も含む）を対象に、基幹教育の言語文化基礎科目・日本語科目の履修方法、科目登録及び日本事情に関するオリエンテーションを実施している。また、秋学期開始前には、共創学部10月入学生及び工学部・農学部学士課程国際コース（International Undergraduate Programs in English(以下 IUPE)）の学生を対象にオリエンテーションを実施している。

令和3年度4月はコロナ感染拡大による影響があったものの、センター2号館で対面式のオリエンテーションを実施した。また、オリエンテーション後も、問い合わせがあった学生に対して、適宜履修に関する指導や対応を行った。共創学部10月入学生とIUPE生に対しては、オンラインでオリエンテーションを実施した。

2. 3. 単位の取り方

基幹教育科目では、第1・第2外国語の選択は、平成25年以前と大きく異なり、大半の学部では「日本語」は基本的に第2外国語（文科系5単位、理科系4単位）に変わった。留学生については、概ね表3のようである。なお、学部・学科別の第1・第2外国語の指定及び修得単位数は以下のようになっている。

表3 単位の取り方と卒業必要単位数²

卒業要件 単位数	基本的な単位の取り方		
	1年前期	1年後期	2年前期
2単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2単位分履修		
4単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2単位分履修	
5単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2単位分履修	日本語Ⅴから 1単位分履修
6単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2単位分履修	日本語Ⅴ・Ⅵから 2単位分履修
7単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2単位分履修	日本語Ⅴ・Ⅵ・Ⅶから 3単位分履修

2 『2021年度入学者用 基幹教育履修要項』113頁より抜粋

留学生の第1・第2外国語の選択では、英語・ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語・韓国語・スペイン語の7つの言語と日本語の中から選択できる。なお、日本語を第1・第2外国語に選択した場合は所属学部・学科の卒業単位数を満たすように履修しなければならないとしているが、特例として、所属学部が認める場合は、英語を第1外国語に指定する学部・学科においても英語を第2外国語とし、英語以外の言語を第1外国語にすることができる。また、その場合は、第1外国語と第2外国語のそれぞれの修得単位数を定めず、両者を合わせて12単位を修得することができるとしている。

第1・第2外国語の履修の特例を認める学部は、共創学部（10月入学者のみ）、教育、法、理、医、歯、薬、工、農学部である。文、経済、芸術工については、特例のケースは認めていない（表4参照）。

表4 学部・学科別の第1・第2外国語の指定及び修得単位数³

学部		区分	履修言語	1年次	2年次以降	修得単位数
共創学部	4月入学者	第1外国語	英語	10	2	12
		第2外国語	初修外国語	4	0	4
	10月入学者	第1外国語	日本語	8	4	12
		第2外国語	英語又は初修外国語 ^(※)	4	0	4
文学部 (右の2パターンから 選択)	第1外国語	英語	4	3	7	
	第2外国語	初修外国語	4	1	5	
	第1外国語	初修外国語	5	2	7	
	第2外国語	英語	4	1	5	
文学部 (国際コース)	第1外国語	英語	10	2	12	
	第2外国語	初修外国語	4	1	5	
教育・法・経済学部	第1外国語	英語	4	3	7	
	第2外国語	初修外国語	4	1	5	
理・医・工・芸術工・ 農学部	第1外国語	英語	4	4	8	
	第2外国語	初修外国語	4	0	4	
歯・薬学部	第1外国語	英語	4	6	10	
	第2外国語	初修外国語	2	0	2	

このような複雑な履修方法のため、従来、学務部基幹教育課と留学生センターの日本語教育部門・留学生指導部門は共同で、新入生オリエンテーションで留学生のみを集めて履修解説を行っている。

2. 4. 受講者数

本年度の「日本語」の延べ受講者数は計92名（前期46名、後期46名）であった。以下に、所属学部別と履修科目別の内訳を示す。なお、新型コロナウイルス感染症の影響で一年前の2020年3月末に海外からの渡航者に入国制限がかけられたことにより、このうち約半数が渡日できず、海外からオンライン授業を受講することとなった。

3 『2021年度入学者用 基幹教育履修要項』102頁より抜粋。

※第2外国語は第1外国語で履修する言語を除き、主となる母語以外の言語を履修する。

前期（春夏学期）

受講者：35名
 延べ受講者：46名

所属学部	(名)
教育学部	3
経済学部	2
工学部	12
農学部	3
文学部	1
法学部	1
共創学部（4月入学生）	1
共創学部（10月入学生）	12

（履修科目別）

科目名	(名)
日本語Ⅰ・日本語Ⅱ	13
日本語Ⅴ・日本語Ⅵ	9
日本語Ⅶ	1
I-3A・I-3B	2
I-4A・I-4B	1
I-5A・I-5B	3
I-6A・I-6B	3
I-7A・I-7B	1
K-3A・K-3B	1
K-4A・K-4B	1
K-5A・K-5B	1
K-6A・K-6B	1
K-7A・K-7B	3
K-8A・K-8B	1
W-5A・W-5B	4
W-6A・W-6B	1

後期（秋冬学期）

受講者：33名
 延べ受講者：46名

所属学部	(名)
教育学部	2
経済学部	2
芸術工学部	1
工学部	8
農学部	2
共創学部（4月入学生）	1
共創学部（10月入学生）	17

（履修科目別）

科目名	(名)
日本語Ⅲ・日本語Ⅳ	16
I-2A・I-2B	1
I-4A・I-4B	2
I-5A・I-5B	2
I-6A・I-6B	4
I-7A・I-7B	4
I-8A・I-8B	1
K-1+2A・K-1+2B	1
K-8A・K-8B	3
S-3A・S-3B	1
S-4A・S-4B	1
S-5A・S-5B	1
S-6A・S-6B	4
S-8A・S-8B	2
W-7A・W-7B	3

2. 5. 時間割

時間割は表5の通りである。前期（春夏学期）、後期（秋冬学期）ともに同様の時間割となっており、各コースとも1週間に2回のクォーター制で開講されている。初級～初中級向け Integrated Courses (I1～I4) については、IUPE 生向けクラスと共創生向けクラスに分割し、きめ細かい指導が行えるようにしている。

表5 時間割

時限	火	水	木	金
1	I-1 (IUPE 生対象) I-2 (IUPE 生対象) I-3 (IUPE 生対象) I-4 (IUPE 生対象)	I-1 (共創生対象) I-2 (共創生対象) I-3 (共創生対象) I-4 (共創生対象) W-5 W-6 W-7 W8 / 日本語Ⅶ	I-1 (IUPE 生対象) I-2 (IUPE 生対象) I-3 (IUPE 生対象) I-4 (IUPE 生対象)	I-1 (共創生対象) I-2 (共創生対象) I-3 (共創生対象) I-4 (共創生対象) W-5 W-6 W-7 W8 / 日本語Ⅶ
4	S-2 S-3 S-4 S-5 S-6 S-7 S-8	K-1+2 K-3 K-4 K-5 K-6 K-7 K-8	S-2 S-3 S-4 S-5 S-6 S-7 S-8	K-1+2 K-3 K-4 K-5 K-6 K-7 K-8
5		I-5 I-6 / 日本語Ⅰ・Ⅱ I-7 / 日本語Ⅲ・Ⅳ I-8 / 日本語Ⅴ・Ⅵ		I-5 I-6 / 日本語Ⅰ・Ⅱ I-7 / 日本語Ⅲ・Ⅳ I-8 / 日本語Ⅴ・Ⅵ

3. おわりに

留学生の中には、様々な理由で日本語の「聴く」、「話す」、「読む」、「書く」の4技能のバランスがよくない学生が少なくない。特にレポートや論文などの文章作成や、日本語による口頭発表など応用面において問題がある学生が散見される。しかし、現在の履修規定では、正規留学生は日本語レベルにかかわらず、特定の科目を受講することになっているため、必ずしも自分の日本語レベルに合ったクラスを受講できる訳ではない。今後は教育効果をさらに高めるため、課題として、学期開始前にプレースメントテスト等を実施し、学生がレベルに合ったクラスを受講できるよう検討を継続していきたい。

また、「日本語」を第2外国語とした場合、大半は2単位或いは4単位しか必要がなくなる。卒業に向けての専門科目の学習は、日本語の力、特に聴く力と書く力がなくとかなり難しいため、統合後のカリキュラムでどのように学生の実践的な日本語力の向上を図るべきかが課題である。また、高度な日本語力を持っている学生が、日本語学習のモチベーションを保ちつづけられるように、指導法の工夫もさることながら、履修規定の見直しなどの検討も引き続き必要である。

補講コース・日本語 (JTCs)

Japanese Training Courses (JTCs)

齊藤 信浩*

1. はじめに

JTCsは大学院に所属し、語学の単位を卒業単位として要さない大学院生(修士・博士・研究生・大学院交換留学生)のための日本語補講コースである。大学院所属の学生は各所属の院で研究活動を行う一方、日本で生活上必要な日本語の習得が必要であり、補講科目として、自由選択でJTCsを受講することができる。コロナ禍の前は、受講者数が300名を超える九州大学内で最大の日本語コースとなっていたが、2020年度前期以降は、COVID-19(コロナウイルス)の影響で、世界中で出入国の禁止措置が取られ、その影響が本コースにも顕著に現れた。コロナ対策は、コロナが発生し、対応に追われた2020年度の報告書に詳述されているので、そちらを参考にされたい。

2. JTCsのコース構成

2. 1. コースの期間について

令和3年度(2021年度)のコースの募集、及び、開講期間は以下、表1の通りである。

表1 令和3年度(2021年度)開講スケジュール

	前期	後期
受講申し込み	4月13日～4月19日	10月12日～10月18日
オンラインテスト	4月13日～4月19日	10月12日～10月18日
レベル結果通知	4月21日	10月20日
クラス選択	4月22日～4月26日	10月21日～10月25日
授業開始～授業終了	5月11日～7月16日	11月2日～1月28日

受講希望者はオンラインによって受講申請をし、オンラインテスト期間に、文法・聴解・読解のテストを受験し、プレースメントされる。COVID-19の影響は、2021年度も続いており、他校では多くの留学生のためのコースが閉鎖に追い込まれている。一方、九州大学は、国費留学生や大使館推薦の留学生が

*九州大学留学生センター准教授

多いこと、九州大学でなければ研究できないという特殊性のある専攻分野があること、かつ、九州大学を卒業したいというブランド力によって留学を諦めなかった学生が多かったことなど、多くの要因に助けられ、また、そもそもの大学の規模が大きいことにも助けられ、コースの閉鎖は起こらず、規模縮小による非常勤講師への雇用減少の被害も最小限に押さえ込むことができています。

2. 2. 受講までの手続きについて

受講までの手続きは全てオンライン上で行われる。受講を希望する学生は、受講申し込み期間内に留学生センターのホームページの中にある、for International Students の下の「Japanese」へ進み、その中の「詳細 / see more」で情報をとり、「Online Placement Tests」をクリックすると、申し込みの画面が現れる。ここで申し込みとオンラインテストを行う。オンラインテスト終了後、「レベル結果通知」が学生へメール配信され、学生は自分のレベルを知り、クラス選択期間に、どのクラスが良いかを「クラス登録」の機能を用いて、自分で選択する。例えば、自分のレベルが日本語4であることを「レベル結果通知」で知った学生は、開講されている日本語4の3種類のクラス（日本語4aは火曜と木曜の2限、日本語4bは水曜と金曜の2限、日本語4cは水曜と金曜の3限）の中から、自分の都合の良いクラスを選択し、「クラス登録」で登録をする。クラス選択は早い者順である。オンラインテストは、日本語1の希望者は登録のみとし、日本語2以上の希望者には、文法・読解・聴解の3つのテストを課している。

2. 2. コースの構成について

以下の、表2と表3は前期と後期のそれぞれのコース一覧である。コースは、前期も後期も、日本語1から日本語7までの7レベルが準備されており、幸いなことに、前期も後期も一定数以上の学生が集まったため、全レベルを開講することができた。

表2 令和3年度（2021年度）前期の授業構成

レベル基準	レベル名称	教科書	クラス数
中級後半 (inter-mediate2)	日本語7 (Japanese7)	中級を学ぼう 中級中期	1
中級 (inter-mediate1)	日本語6 (Japanese6)	中級を学ぼう 中級前期	1
中級入門 (pre-intermediate)	日本語5 (Japanese5)	中級へ行こう	3
初級後半 (elementary3)	日本語4 (Japanese4)	GENKI II	2
初級2 (elementary2)	日本語3 (Japanese3)	GENKI II	2
初級1 (elementary1)	日本語2 (Japanese2)	GENKI I	2
入門 (beginners)	日本語1 (Japanese1)	GENKI I	3

表3 令和3年度（2021年度）後期の授業構成

レベル基準	レベル名称	教科書	クラス数
中級後半 (inter-mediate2)	日本語7 (Japanese7)	留学生のためのケースで学ぶ日本語	1
中級 (inter-mediate1)	日本語6 (Japanese6)	中級を学ぼう 中級前期	1
中級入門 (pre-intermediate)	日本語5 (Japanese5)	中級へ行こう	3
初級後半 (elementary3)	日本語4 (Japanese4)	GENKI II	3
初級2 (elementary2)	日本語3 (Japanese3)	GENKI II	3
初級1 (elementary1)	日本語2 (Japanese2)	GENKI I	2
入門 (beginners)	日本語1 (Japanese1)	GENKI I	5

3. 受講者数、及び、受講者の内訳

3. 1. 受講者数

表4に、令和3年度（2021年度）の前期と後期の、各レベル別の受講者数を示した。

表4 各期別の受講者数

前期			後期		
申請者	ブレース	受講者	申請者	ブレース	受講者
149	135	117	193	191	173

前期は申請者149名、ブレース135名であり、実際のクラス開始時の受講者は117名だった。後期は申請者193名、ブレース191名であり、受講者は173名であった（ブレースとは、クラスにブレースされた学生数であり、受講者数は実際にクラス開始時点で受講した学生数を示している）。実際のニーズは申請者数が示しているのだが、コロナ前の2019年あたりでは、後期であれば、申請者は300名を超えるのだが、コロナ以降は大幅に減ってしまった。しかし、2020年度の後期の申請者数が96名だったことを考えると、急激に回復していると言える。学生数が回復している影響が顕著に見られるのが、各クラスの人数である。前期の各クラスの人数を表5に、後期の各クラスの人数を表6に示す。

表5 令和3年度（2021年度）前期のクラス別の受講者数

日本語7	13				
日本語6	10				
日本語5	10	日本語5b	10	日本語5c	5
日本語4a	10	日本語4b	9		
日本語3a	5	日本語3b	10		
日本語2a	6	日本語2b	11		
日本語1a	5	日本語1b	8	日本語1c	5

表6 令和3年度（2021年度）後期のクラス別の受講者数

日本語7	8								
日本語6	11								
日本語5	12	日本語5b	12	日本語5c	13				
日本語4a	11	日本語4b	12	日本語4c	6				
日本語3a	11	日本語3b	9	日本語3c	3				
日本語2a	10	日本語2b	10						
日本語1a	10	日本語1b	8	日本語1c	10	日本語1d	10	日本語1e	7

表5の各クラスの人数を見ると、概ね、5～10名程度であるが、表6の各クラスの人数を見ると、10～12名程度であり、ほぼ充足されている。通常の対面授業では、クラス定員は18～20名で取ってあるが、オンライン授業では10～13名以内に抑えるようにしている。そのため、10～12名程度というのは、ほぼコースが満席の状態になったと言える。

JTCsの問題点として、単位の要らない補講授業であるため、本業の大学院の実験や論文が忙しくなると出席しなくなるという現象があった。特に後期は、開始時には人数が多いが、1月、2月に院試を控えた研究生、修士論文提出を控えたM2の修士過程の学生が激減し、15名程度で開始したクラスが、2～3名に減少してしまうこともある。しかし、オンライン授業になってから、この減少数が大幅に改善し、2割以上の現象ということは少なくなった。恐らく、これは、オンラインの利便性・簡便性によるものと推測される。

3. 2. コース申請者の内訳（所属・身分別）

表7と表8はコース申請者の所属部局と身分（修士・博士・研究生・交換留学生）別に集計したものである。交換留学生はまだほとんど回復していないが、研究生の回復が顕著に見られる。

表7 令和3年度（2021年度）前期の所属・身分別の申請者数内訳

	修士	博士	研究生	交換留学	部局別計
生物資源環境科学府	9	9			18
経済学部・経済学府	15	5	3	1	24
教育学部				1	1
統合新領域学府	1	1	1		3
地球統合科学府	4	2	1		7
人間環境学府	6	2	9		17
システム情報科学府	8	3	2	1	14
システム生命科学府		1	1		2
法学部・法学府	9	1		1	11
文学部・人文科学府	6	1	2		9
数理学府	1			2	3
理学部・理学府	3	3			6

工学部・工学府	8	12	3		23
芸術工学部・芸術工学府	1				1
歯学部・歯学府		1	1		2
医学部・医学府		4			4
薬学部・薬学府		1			1
農学部			3		3
課程別計	71	46	26	6	149

国籍（上位5ヶ国）：中国90、ベトナム8、インドネシア7、エジプト・台湾4、他

表8 令和3年度（2021年度）前期の所属・身分別の申請者数内訳

	修士	博士	研究生	交換留学	部局別計
生物資源環境科学府	19	7	1		27
芸術工学部・芸術工学府		2			2
経済学部・経済学府	9	1	7		17
教育学部		1			1
統合新領域学府	1	1	3		5
地球統合科学府	2	3			5
人間環境学府	2	1	19		22
システム情報科学府	8	4	14		26
システム生命科学府		6	4		10
法学部・法学府	18	2		1	21
文学部・人文科学府	1	1	3		5
数理学府	2	1	1		4
歯学部・歯学府					0
医学部・医学府	1	2			3
薬学部・薬学府	3	1	4		8
理学部・理学府	2	5	2		9
工学部・工学府	3	14	8		25
農学部			3		3
課程別計	71	52	69	1	193

国籍（上位5ヶ国）：中国102、ベトナム12、エジプト9、インドネシア9、タイ7、他

4. JTCs のオンライン化の改革について

2020年度は前期と後期をオンライン（zoom）によって授業を行ったが、2021年度も前期と後期、全ての授業をオンライン（zoom）で運営する方式で進めることとした。JTCsは、コースの長さが10週間と短いこともあり、一旦、オンラインで授業を進めることにした以上、最後までオンラインで進め、途中

で対面に戻すという方針は取らないことにした。また、未来日の海外からの受講者数も多いため、対面に戻すという判断は、コロナが改善しても年度内はしないこととした。

このオンラインの利便性が、2020年度に意外なかたちで顕れた。1つは、分散キャンパスである馬出キャンパスからの受講生が、従来は通学不可能であった伊都キャンパスのJTCsに参加するようになったことである。馬出は留学生規模が少ないため、日本語コースも2レベル（4コマ）で、初級に限られていた。それが、中級または中上級に達した馬出キャンパスの学生がオンラインでJTCsの中上級のクラスを受講できるようになった。

もう1つは、3. 1. でも言及したが、学生の減少幅が大幅に減り、最後までコースを受講する学生が増えたことである。私達教員は、教室での授業に長く従事してきたため、教室での対面授業を学生も求めているものと思込んでいるが、オンラインに強い昨今の学生たちは、むしろ、利便性も強く感じているのだと思われる。

そのため、2022年度以降、対面のクラスによる授業運営に戻ったとしても、一部のクラスは引き続きオンラインで提供する体制を整えたいと考えている。従来、Japanese1からJapanese5までは複数のabc…のクラスが用意されていた。この一部、例えば、Japanese3aとJapanese3bを対面授業にしつつ、Japanese3cはオンライン（zoom）で開講するという方式にしたい。オンデマンド方式など、配信には様々な種類がありつつも、オンデマンド方式にするよりも、1つの完全なオンラインコースを設定しておいた方が、効率がよく運営上の負担も少なくなる。

この実施のため、2021年度前期には、馬出の初級のクラスをJTCsのJapanese1に試験的に統合し、表5のJapanese1cとして開講した。それが運営上、特に問題もなく行えたことから、2021年度後期からは馬出の日本語コースは、JTCsの中で開講することとし、馬出キャンパスの日本語コースは今後も全てオンラインで提供することとした。この経緯と計画については、本号掲載の病院キャンパス日本語コースで詳述する。

コロナによって多くの被害が出たが、同時に、オンライン化による改革が進んだことは間違いのない事実であり、これを利用して、一歩先の日本語コースの在り方を模索していくのがコーディネータの務めであり、また、世界の潮流でもあると言える。ただし、日本語クラスを録画にして、録画配信すればよいという意見には正面から反対したい。日本語の授業は技能学習であるとともに、体験学習でもあり、語学学習が机上の座学と異なるのは学生と学生、教師と学生のコミュニケーションの中で育成されるものである。知識の一方的な配信で達成されるならば、NHK教育テレビの外国語講座で、かなりの数の日本人が語学学習を達成していなければならないわけだが、そのようにはなっていない。利便性と学習成果は別であり、語学のような技能習得については、今後も、対面とLive形式によるオンライン授業が提供されるべきである。

病院地区・日本語コース

Japanese Language Courses at Hospital Campus

齊 藤 信 浩*

田 尻 由美子**

浅 賀 智 絵**

1. はじめに

2017年度の後期より、病院地区（医学部・薬学部・歯学部）に所属する留学生を対象に日本語コースが開講されてきたが、本コースが「病院地区・日本語コース」として単独で運営されるのは、今回の2021年度が最後となる。受講生は、大学院所属の留学生（修士・博士・研究生）と医系3学部の部局間交換留学の交換留学生、そして、2018年度の秋学期からは、博多駅サテライトキャンパスで運営されている九州大学ビジネススクールの交換留学生（QBS）も参加するようになっていた。また、ごく少数ではあるが、東区や博多区方面に在住している留学生も、通学の利便性から病院地区・日本語コースを受講してきた。しかし、病院地区自体の留学生の絶対数が少ないことで、運営できるコースが2レベル（4コマ）と少なく、受講者が不便を感じていたことも事実である。2020年度は、コロナウィルス（COVID-19）の影響により、新規の来日ができなくなり、病院地区・日本語コースもその影響を大きく受け、学生数の減少とオンラインによる開講という大きな変化があった。その結果、病院地区の留学生が、病院地区・日本語コースで開講されたオンライン科目ではなく、伊都キャンパスでオンライン開講された補講日本語コースのJapanese Training Courses（JTCs）を受講する現象が見られるようになった。特に、中級以上は病院地区での開講がなかったため、オンラインによる距離的な障壁が除去された場合、学生の当然の選択肢になったと言える。2017年度後期から2021年度前期まで、数多くの試行錯誤を繰り返しながら、5年間、病院地区・日本語コースは独自で運営されてきたが、2021年度前期を最後にJTCsのオンライン授業に統合し、今後は、オンライン科目として日本語の授業を提供していくこととなる。本報告は、2021年度についての報告と、これまで5年間の歩みについて総括的に報告したい。

*九州大学留学生センター准教授

**九州大学留学生センター非常勤講師

2. コース概要

2. 1. コースの変遷について

病院地区の開講理由として、箱崎地区で日本語科目を受講していた病院地区の留学生が、箱崎キャンパス移転に伴う留学生センターの移転によって、日本語科目を受講できなくなるため、病院地区で独自に日本語コースを開講して欲しいとの医系3部局からの要望から起こったものだった（コースの設立経緯については詳しくは斉藤（2018）を参照されたい）。そのため、2017年度の開講当初は、箱崎地区で受講していたJTCsの枠組みと同じ枠組みで提供すべきだと考え、JTCsで設定されている、ゼロ初級（Japanese1）と初級（Japanese2）の2レベルを開講した。しかし、早くも2期目からこの枠組みに合わなくなり始め、第4期には、Japanese1の受講者がゼロとなる事態に陥った。そのため、開設後わずか1年半をもってコースの形を変更せざるを得なくなり、第4期には、急遽、Japanese3を設けて対処したが、第5期にはBeginner（週2回）、Speaking1（週1回）、Speaking2（週1回）へと再編し、4コマの予算内で3レベルに拡げて、従来、拾いきれなかった学生を拾う方策を取った（2019年度の再編については詳しくは斉藤（2020）を参照されたい）。以下、表1は、コースの構成と受講者数の推移を示したものである。

表1 病院地区の補講日本語コースの構成と受講者数の推移

2017年後期～2018年後期		Japanese1	Japanese2	
第1期	2017年後期	4 (4)	7 (6)	
第2期	2018年前期	4 (1)	5 (3)	
第3期	2018年後期	10 (8)	12 (5)	
2019年前期			Japanese2	Japanese3
第4期	2019年前期		5 (1)	10 (5)
2019年前期～2020年後期		Beginner	Speaking1	Speaking2
第5期	2019年後期	15 (8)	10 (5)	11 (5)
第6期	2020年前期	3 (2)	3 (3)	6 (4)
第7期	2020年後期	13 (6)	6 (5)	6 (4)
2021年前期			Speaking1a,b	
第8期	2021年前期	1 (1)*	11 (11)	

注1：()内は最終的にD以上で合格した学生の数

注2：* Beginnerクラスは1名のみであったため、JTCsのJapanese1cへ編入

3レベルへ拡げたことによって、第1期から第4期まではコース平均14.5名の受講者数だったのが、第5期から第7期には24.4名になり、10名前後の学生を拾えたことになった。しかし、2021年度前期、学生募集の結果、Speaking2に該当する学生がおらず、Beginnerも1名という状態だった。そのため、Speaking1のクラスを2つに分けて、Speaking1a、Speaking1bのように変えて開講した。Beginnerの1名は、伊都キャンパスのJTCsがオンラインによる受講が可能であったため、Japanese1cのクラスへと入れ込むことで解決をした。やはり、コースの運営がこのように変動することは望ましいことで

はなく、小規模なコース運営の難しさを示していると言える。

2. 2. コースの内容について

改編後の第5期以降のコース編成は、表2のようなコース編成となっている。改編前はJTCsと同じ枠組みであるため、JTCsのコース報告書を参照されたい。

表2 コース内容

	開講数/週	開講週数	開講コマ数	レベル内容
Beginner	2回	10週	20コマ	ゼロからの学習者を対象に初級文型を提示しつつ口頭練習をしていく。授業内では文字学習は行わない。
Speaking1	1回	10週	10コマ	Beginnerを終えた段階の学生が口頭練習を中心に、生活上必要な表現や語彙を学習する。
Speaking2	1回	10週	10コマ	Speaking1よりも上の一定レベルの日本語力がある学生のために口頭練習を中心に表現や語彙を補強する。

病院地区では、再編の結果、特定の教科書は用いず、教師の用意したプリントやスライドで学習を進める方式にしたのだが、この方式がオンライン授業では非常に有効だった。他のコースでは、教科書を購入させなければならないのだが、海外在住の学生への手当てが困難だった。一方、病院地区では、海外からの受講者がいても、教科書の問題が全く発生せず、非常にスムーズに学期を滑り出すことができた。この運営上の利便性は見逃すことができず、これがJTCsのJapanese1で使用している教科書を病院地区の自作教材に変更するという契機になった。JTCsで2021年前期に開講されたJapanese1cのクラスでは、既に先行して病院地区の自作教材が用いられ、2021年後期には、JTCsのJapanese1のレベルで全面的にこの教材を使用することとなった。

2. 2. 1. Beginner コースの内容

ここではBeginnerコースの概要について述べる。2. 2. でも述べたように、病院地区のゼロ初級クラスでは、当初は伊都JTCsと同様『げんき』を用いていたが、改編の中で独自教材を用いるようになった。それは、馬出地区の学生のレディネスやニーズと『げんき』がうまく合致していなかったことによる。学生らは研究室では日本語を必要とせず、日常生活のための簡単な日本語を学ぶことを目的としてコースに参加している。しかし『げんき』を使用すると、まず平仮名やカタカナの習得が必須となる。また『げんき』での学習においては、1日の授業を終えても、どんなタスクがこなせるようになったのかが学習者にとって結びつきにくいことも多い。病院地区の、特に初級の学生は、日本で生活していて大学外で日本語を必要としているにも関わらず、日々の研究に追われ日本語学習に挫折する学生も多かった。忙しい中でも学習を継続したくなるような達成感を味わわせつつ、最短で必要最低限の口頭能力を伸ばすことが最優先事項であると考え、そのようなニーズに合う教材を独自で作成した。シラバスは以下の通りである。

表3 Beginner コースのシラバス

	タスク	文型		タスク	文型
1	自己紹介	Noun は Noun、助詞「の」	11	習慣について話す	動詞文非過去、助詞「を」「で」
2	好きな物を話す	Noun が好き、助詞「と」、数字1-10	12	日常生活について話す	助詞「と」「(場所)に」、動詞分類説明
3	時間を言う	time から time まで 数字11-20	13	予定について話す	ませんか、ましょう、助詞「(手段)で」
4	眼前の物について聞く	これ/それ/あれ、助詞「で」	14	過去について話す	動詞文過去、から(理由)
5	注文する、値段を言う	このそのあの	15	願望について話す	形容詞+名詞、Noun がほしい、Verb たい
6	家族や友達の描写①	形容詞文非過去	16	思い出について話す	形容詞・名詞文過去
7	家周辺の描写	Noun は～にある、ここ/そこ/あそこ	17	できることを話す	Noun/Verb ことができます、Verb のがすき
8	家族や友達の描写②	Place にいる、位置表現、～ですね	18	お願いする	Verb てください、Verb てもらえません
9	室内描写、予定を話す	〈イベント〉がある	19	復習、質問練習	
10	復習・好き嫌いを話す	疑問詞・タスク整理 ～が好き/嫌い	20	プレゼンテーション	テーマ：私の好きな場所

シラバス作成には、庵(2011, 2015)などで提案されている「やさしい日本語」の文法項目リストの step1を参考にした。庵の提案する step1では形態変化に関する負担をなくすために活用を扱っていない。この Beginner コースでも、最小限の負担で最大限のコミュニケーション能力を育成するため、基本的には活用は扱っていないが、学習者の特性やニーズや実用性を考え、最終課である18課において、変換練習などはせずに、語彙としてテ形を入れている。「やさしい日本語」の step1の文法項目を、学習者が文法を積み上げられるよう並び替え、各課にタスクを明示し、到達目標をつけたのが、病院地区の教材である。教材にはすべてひらがな・カタカナとローマ字が併記されており、文字についての学習者の負担が軽減されている。課の構成の特徴としては、2回目から「好きです」、8回目でコメントの言い方(「かわいいですね!」「かっこいいですね!」)など、すぐに使えるものを取り入れていることである。これにより、ゼロ初級の2回目の授業から、テキストで出てきた物や身の回りにあるものなどで「好きです!」と自己表現できたり、クラスメイトや先生に対して「それいいですねえ!」「かわいいですねえ!」とコメントできるようになり、「日本語で話せている」という達成感や満足感が高くなっていた。授業内の会話で日本語が増えるだけでなく、日々の生活の中ですぐに日本語での会話に参加できるようになっており、日本語学習意欲の向上に大きく貢献していることが感じられた。

独自教材は受講した学生からは概ね好評であったし、授業中の日本語での発言や質問量は『げんき』を使用していた頃よりも多くなった。また、練習のための会話ではなく、話したいことを話す会話が多くできており、必然的にコース終了後の口頭能力は従来よりも高くなっていると感じられた。ただ、

最初期の段階から日本語で話すことを多く求められ、また、周りの学生もどんどん話していくことから、劣等感があるなど、気後れしてしまいがちな学生に対しては、より一層のケアが必要となった。

2. 2. 2. Speaking 1 コースの内容

病院地区の Speaking 1 は、はじめは Beginner クラスを終了した学生を対象としていたが、実際には第5期から第7期は Beginner クラスの修了者から自学で日本語学習を進めてきた初級後半の学習者までと、幅広いレベルの学生が受講してくることが多かった。全10回と限られた回数の授業の中で、受講者の日本語レベルの差にどう対応するかが課題となった。そのため、試行錯誤の結果、レベル差に対応すべく、文法積み上げ式ではなく、タスクベースのシラバスにし、タスク毎に出てきた初級前半から初級後半にかけての文法内容を紹介しながら、会話の練習を行うという方法で行った。タスクはできるだけ、学習者が身近に使う場面で必要なものを難易度の低いものから高いものへと進めるようにした。ただし、Speaking1には毎度、再受講のリピーターがいたため、每期、学習者のレベルを見ながら、トピックや教材を更新し、同じ内容にならないように工夫する必要がある。

第5期から第7期の Speaking1 のクラスでは、学習者のレベル差のおかげで、学習者同士が互いに教え合い、助け合っている様子が見られた。しかし、会話や発表では、日本語レベルの高い学生の発話内容を日本語レベルの低い学習者が理解できなかったため、そのたびに教師が介入して補足するという方法を取らざるを得なかった。結果として、Beginner クラスから進んできた学習者には、難しい内容になってしまうことが多かった。しかし、学習者の学習意欲が高く、毎回、質問も多かったので、限られた回数の中で、それぞれのレベルの学習者が日本語を使って、表現したいことを表現したり、学んだりする場になっていたと思われる。

第8期（2021年度前期）の Speaking1 クラスのシラバスは表4のとおりである。第8期の受講者は、第7期のリピーターが半数で、新しく受講した学習者の日本語レベルも初級半ばであり、ほぼ日本語のレベルが揃っていた。そのため、初級後半にかけての文法を紹介しながら、できるだけ会話練習に時間を割くようにした。具体的には、タスク先行型で会話のロールプレイをしてもらい、そのタスクで使える文法を導入・練習、その後、再度ロールプレイを行うという方法を取った。タスク先行型では、学習者がロールプレイで良く使えていた文法は練習を省き、タスクで使えていなかった文法に時間を割くことができたので、通常の文法導入から練習へと進む教え方よりも効率よく進めることができた。Speaking1では毎回、学習者のレベル差から対応に迫られたが、コース最後となる第8期の Speaking1 クラスでは、学習者のレベルに合った充実したものとなったと言える。

表4 Speaking1コースのシラバス

	Topic
1	友達を誘う
2	あげた／もらったものについて話す
3	友達を慰める・励ます
4	伝言を頼む・聞いた話を伝える
5	将来について話す
6	謝る・過去の出来事について話す
7	好きなものについて説明する
8	準備をする
9	情報を得る、メールの書き方
10	発表

2. 2. 3. Speaking2 コースの内容

次に Speaking2 について述べる。病院地区では 3 レベルしか開講されておらず、実質的に中級以上の学生はすべてこの Speaking2 に登録される。そのため OPI でいえば、中 - 下から超級レベルまでが在籍し、また、同じ学生が 2 年間 4 期に渡り受講を続けることもあった。そのため、常に受講者の状況を考慮しつつ、クラスを運営しており、毎回、固定したシラバスを用いることができなかった。授業は主に下記の 3 種の活動を織り交ぜながら、全 10 回の授業を組み立てた。

表 5 Speaking2 コースの活動内容

活動種別	具体例
ロールプレイ	<ul style="list-style-type: none"> ・体調不良の友達を気遣う、手伝いを申し出る ・約束の詳細を詰める ・お土産を渡す／お土産について説明する ・待ち合わせ時間を勘違いして友達と情報のすり合わせをする ・レストランで注文する、相手のミスを指摘する
文法整理	<ul style="list-style-type: none"> ・「んです」の機能 ・やりもらい ・助詞整理
描写練習	<ul style="list-style-type: none"> ・鉛筆削り、ホチキス、ポイントカードなど具体物 ・ 4 コママンガのストーリー

このクラスで核となったのはロールプレイの活動である。日本語についての学生のニーズが、主に研究室の日本人とのコミュニケーションのためであること、また、ロールプレイという手法が最もレベル差に対応しやすいからである。ロールプレイではタスクの達成と共に、ポライトネスの指導にも力を入れた。ある程度話することができる中級話者は、話せるがゆえにポライトネスの問題が起りやすく、それを防ぐための知識や気づきを得ることも重要な指導点だと考えたからである。ロールプレイの他には、固定化した誤りに気づき直すための文法整理や、結束性を持って詳細に説明するための語彙や文法力を身につけるための描写練習も行った。

学生のレベル差に十分に対応できないことも多く、すべての学生に満足のいく授業はできなかったと思うが、日本語で日常生活を送る学生からは「このような場合はどう言ったらいいのか」もしくは「この言い方は失礼にならないか」といった言語的な相談のみならず、生活や文化についての悩みも随所で出され、留学生活の中で一定の役割を果たしていたように思う。

2. 3. 開講期間と受講者募集について

コース設置からの全ての開講期間を以下に記した。第 4 期からは、オンラインテストを行わず、自己申告でレベルを選ぶようにさせた。これは、2 レベルでは学生を拾える人数が少なく、厳密にオンラインテストのレベル範囲を適用してしまうと、弾き出される学生が多くなってしまったためである。前述したが、すでに第 2 期からレベル判定で分けるのは困難になっており、ゼロはゼロ初級として Beginner で受け入れ、それ以上は Speaking として大まかに 2 つのレベル設定で学生を拾う方式にした。そのため、自己申告制でレベルを選んで受講する方式にした。

- 第1期：2017年11月 2日～2018年 1月26日（オンラインテスト10月13日～10月16日）
- 第2期：2018年 5月 8日～2018年 7月13日（オンラインテスト 4月19日～ 4月23日）
- 第3期：2018年11月 1日～2019年 1月29日（オンラインテスト10月17日～10月22日）
- 第4期：2019年 5月 7日～2019年 7月12日（申請期間 4月18日～ 4月22日）
- 第5期：2019年11月 5日～2020年 1月31日（申請期間10月11日～10月28日）
- 第6期：2020年 5月12日～2020年 7月17日（申請期間 4月14日～ 5月 1日）
- 第7期：2020年11月 4日～2021年 1月29日（申請期間10月13日～10月19日）
- 第8期：2021年 5月11日～2021年 7月16日（申請期間 4月13日～ 4月26日）

2. 3. オンライン授業について

病院地区・日本語コースのオンライン導入の経緯については、斉藤（2020）を参照されたい。第6期、第7期、第8期の1年半がオンライン（zoomを使用）によるリモート授業となった。オンライン化した後の特徴としては、ドロップアウトする学生が極端に減ったことであり、表1を見るとわかるように、2021年度前期は100%の学生が合格判定を得ており、その前年度の2020年度前期、2020年度後期もドロップアウトの率は改善している。やはり、本務である大学院での研究活動の合間に、生活上、必要なものとして日本語を学習する補講コースであるため、場所を選ばないオンラインのコースは、一定の利便性があったのではないかと推測される。

3. おわりに

病院地区・日本語コースの運営が困難になった理由は何度も言及したところだが、予算規模の少なさが挙げられる。医系3部局の留学生数と伊都キャンパスの留学生数を比較した際に、病院地区へ当てられる予算は4コマ程度しかない。そのため、理屈上で考えれば、一番下のレベルから2レベルを設定して日本語の補講授業を提供し、初級前半の範囲が終わるくらいでコース卒業（その後の自学自習の礎にする）という形を取ったのだが、留学生自身は、自身の語学力の不足を実感しているため「もっと上のクラスを受講したい」「中級を開講して欲しい」という要望は、当然、出てくる。しかし、一方で、伊都キャンパスのクラスが20名で開講しているのに対して、病院地区で2～3名で開講するというのは、受講する学生にとっても、担当する教員にとっても、馬出と伊都で明らかな不公平感が出てくる。

これを解決するためには、医系3部局内の専任教員が動いて、予算を病院地区で獲得してクラスを増設するという方法が、本来のあり方だと思われ、医学部からの留学生センターへの兼任教員に働きかけ、病院地区・日本語コースを拡充するという方策もあった。しかし、それを実現しても、伊都キャンパスで提供している7レベルに近づけられるほどの予算は捻出しようがなかった。

このような現状を打破する契機になったのが、コロナ禍で沸き起こったオンライン化の波である。一斉に、九州大学の全教員と全学生がリモートによる授業を行うようになり、リモート授業は2019年には想像していなかった進化を遂げた。前述した通り、一部の学生は伊都キャンパスのJTCsを受講

するようになり、中上級レベルの日本語クラスが受講できなかったという病院地区の問題点は解消した。これと同時に、JTCsのほうで取った受講アンケートでも、オンラインの利便性を感じている学生がかなりの数存在し、コロナ終息後にも、一部のクラスをオンラインとして残そうということになった。これを契機に、病院地区・日本語コースは、JTCsのオンラインコースに統合し、オンラインによって今後も提供し続けるという解決策を取ることにした。コロナ禍によるリモート授業が一過性のものでなく、発展性のあるものとして残すためにも、病院地区・日本語コースがJTCsのオンラインコースの中で提供されるということは積極的に評価して良いと思われる。

参考文献

- 庵功雄 (2011) 「日本語教育文法からみた「やさしい日本語」の構想－初級シラバスの再検討－」『語学教育研究論叢』28, 255-271, 大東文化大学
- 庵功雄 (2015) 「日本語学的知見から見た初級シラバス」庵功雄・山内博之 (編) 『現場に役立つ日本語教育研究① データに基づく文法シラバス』, 1-14
- 斉藤信浩 (2018) 「病院地区・日本語コース」『九州大学留学生センター紀要』26, 103-104, 九州大学
- 斉藤信浩 (2020) 「病院地区・日本語コース」『九州大学留学生センター紀要』28, 113-115, 九州大学
- 斉藤信浩 (2021) 「病院地区・日本語コース」『九州大学留学生センター紀要』29, 75-77, 九州大学

筑紫・大橋地区日本語コース

— 2020年度～ 2021年度 —

Japanese Language Courses at *Chikushi/Ohashi* campus From 2020 to 2021

小 山 悟*

概要

本紀要の第28号（2020年3月発刊）では、筆者が本コースの担当になった2014年度から2019年度までの5年間の取り組みについて振り返った。本稿はその後の2年間について報告するものである。

この間に起こった最も大きな変化は、言うまでもなく、コロナウィルスの感染拡大によるオンライン授業の全面導入であった。一般の講義とは異なり、ペアまたは小グループで行う活動が多く、（特に初級では）目の前で書かせて学生の記憶や理解を確認することも多い日本語の授業を、オンラインでどのように行えばいいのか、最初は全くイメージできず、Zoomの使い方慣れるだけで精一杯であった。授業が始まってからも、回線が途中で切れたり、「授業に参加できない」と学生から問い合わせがあったりと、落ち着いて授業ができる状況ではなかった。また、ネット環境の悪さからカメラをオフにしたまま参加する学生が多く、黒い壁に向かって話しかけているようで、虚しさを感じることも少なくなかった。しかし、今では（Zoomはもちろん）MoodleやGoogle Formの使い方にも慣れ、当初は「いつになったら対面授業に戻れるのだろうか」と後ろ向きに考えていた筆者も、遅まきながら、対面授業にはないオンライン授業の利点に意識が向くようになった。

例えば「コース運営」である。本コースではこれまで筑紫・大橋の両地区でそれぞれ初級から上級まで4クラス（初級1・2、中級、上級）を開講してきた。しかし、コロナが終息した後も「対面+オンライン」のハイブリッド形式で授業を行うようにすれば、予算の増額なしに学生の選択肢を増やすことができる。例えば、中級と上級のクラスをそれぞれ2レベルに分け、筑紫地区では「中級1」と「上級1」を、大橋地区では「中級2」と「上級2」を開講するようにすれば、実質2レベルの増設となる。また、受講者の多い「初級1」と「初級2」をこれまでどおりそれぞれの地区で独自に開講する場合にも、地区によって教材やアプローチ、到達目標などを変えるようにすれば、学習者のニーズに合わせてより細かな対応をすることができるようになる。具体的には、筑紫地区では『みんなの日本語』や『げんき』などの文型積み上げ式の教科書を使ってオーソドックスな授業を行う一方、（短期留学生の多い）大橋地区では『いろどり』のような教材を使い、生活会話中心の授業をゆったりと行うといったことが考えられる。

*九州大学留学生センター准教授

「授業運営」についても同様である。例えば、これまで授業内で行っていたクイズを Moodle 上で行うようにすれば、学生たちは（授業外の）自分の好きなタイミングで受験することができ、その分こちらもより多くの時間を言語運用の訓練に割くことができる。また、受験回数を「制限なし」とし、満点が取れるまで何度でも繰り返し受けられるようにすれば、学生たちの記憶と理解の強化に繋がるであろう。

いずれもまだ「思いつき」程度の場合ではあるが、今後の課題として（特に「コース運営」については）来年度以降具体的に検討していきたい。

各学期の実施状況

A. 2020年度前期の授業

例年4月初旬に始まる全学の授業が「5月7日開始」と正式に決まったことを受け、本コースもそれに合わせて以下のスケジュールで前期の授業を開講することにした。

5月7日～13日	オンライン授業の準備期間
5月14日～20日	オンライン授業の試行期間
5月21日～7月31日	授業期間

まず、教員・学生共にオンライン授業に慣れていないことを考慮し、授業開始を（全学の授業開始日より）2週間遅らせ、5月21日から7月31日までの10週間とした。その上で、5月7日からの1週間を「オンライン授業の準備期間」とし、所属教員を対象としたZoomの使い方講習会を3度実施した。また、その翌週を「オンライン授業の試行期間」とし、クラスごとにオリエンテーションを実施してもらうなどして、学生には授業への参加方法を、教員にはZoomの使い方を実地で確認・練習してもらった。

表1は筑紫地区、表2は大橋地区の時間割である。大橋地区の「初級1」は例年、ヨーロッパからの短期留学生が受講者の大半を占めているが、当学期は全員が入学を辞退または10月に変更したため、開講を見送り、筑紫地区との合同授業とした。代わりに、筑紫地区でかねてより希望のあった「初級3」を当学期限定で設けることとした。筑紫地区の受講者は非漢字圏出身の学生が多く、「初級1・2」で初級前半（『げんき』vol.1）を学習した後、初級後半を飛ばして中級に進むことには無理があった。そこで、「この機会に」と開講してみたところ、12名の受講者があった（表3）。これまで日本語の学習を続けたくても続けられなかった学生たちが多数参加したと思われる。

地区全体の受講者数は筑紫地区が52名、大橋地区が16名（合計68名）であった（表3）。表3・6の太字で示した数字（筑紫地区の「初級1」クラスの受講者数）は、大学院の正規授業の受講者数を含めたものである。ここで言う正規授業とは、本コース（留学生センター主催の課外授業）とは別に、総合理工学府が独自に開講しているもので、前期（CSJ: Communication Skills in Japanese）は修士の、後期（FJC: Fundamentals of Japanese Communication）は博士の学生が対象である（授業の担当は筆者）。予算の出どころや科目としての位置付けは異なるものの、筑紫地区における日本語学習のニーズを示すデータとして、留学生センター内の会議には毎学期、本コースの受講者数と合わせた数字を報

告している。前年度前期の受講者数は7名であったが、当学期は開講を見送ったため0名であった。よって、筑紫地区の本コースのみの受講者数は前年度の47名から5名増ということになる。一方、大橋地区は前年度の42名から激減した。

表1 2020年度前期（筑紫地区）の時間割

	月	火	水	木	金
1時間目					
2時間目					
3時間目					
4時間目					
5時間目	初級1 初級3	初級1 中級		初級2 初級3 中級 上級	初級2 上級

表2 2020年度前期（大橋地区）の時間割

	月	火	水	木	金
1時間目					
2時間目				初級2【会話】	
3時間目		初級2【文法】			
4時間目					
5時間目		中級【会話】	中級【文法】 上級【作文】		上級【文法】

表3 筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（前期）¹

年度	14前		15前		16前		17前		18前		19前		20前		21前	
	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大
初級1	12	8	25	5	19	7	26	14	26	13	23	12	5		17	3
初級2	6		11	8	14	12	25	8	16	7	11	7	8	3	13	6
初級3													12		10	
中級	14		10		11	21	14	22	17	6	10	9	13	6	6	9
上級			8		12	19	15	16	18	19	10	14	14	7	8	6
合計	32	8	54	13	56	59	80	60	77	45	54	42	52	16	54	24

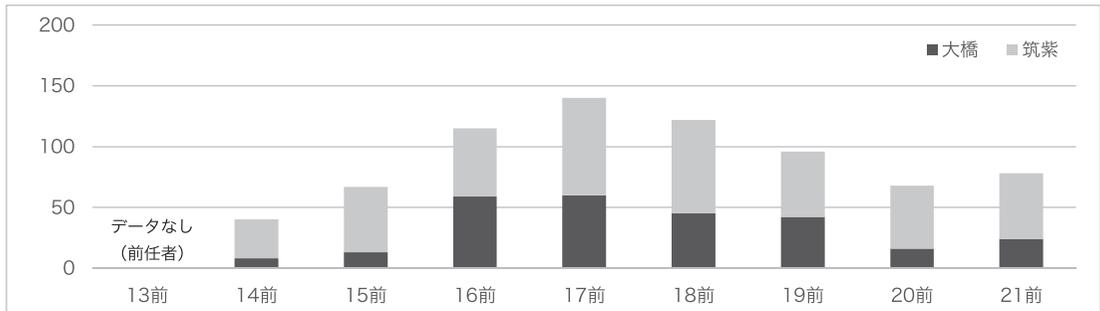


図1 筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移 (前期)

B. 2020年度後期の授業

夏休みの後半に入っても、留学生の入学制限が全面的に解除される見込みは得られなかった。そのため、当学期も引き続き全ての授業をオンラインで行うこととなったが、コース自体は例年どおり10月第2週から開講することができた(10月12日～12月22日)。また、前期とは異なり、未入国の学生も本国から多数受講することが予想されたため、両地区とも通常の4レベル編成(初級1・初級2・中級・上級)に戻し、授業は、日本との時差を考慮して全て4時間目以降に開講することとした(表4・5)。

受講者は筑紫地区が100名、大橋地区が43名(合計143名)であった(表6)。前者の数値には、先にも述べたように、大学院の正規授業(FJC)の受講者が含まれるため(当学期は32名³⁾、筑紫地区における本コースのみの受講者数は68名ということになる。同地区の前年度同期の受講者数は81名で、そのうち10名が正規授業の受講者であったことから、筑紫地区の受講者数はコロナ禍にもかかわらず、前期・後期ともにほとんど変わっていないことがわかる。一方、大橋地区では前期ほどではないものの、前年度同期の63名から大きく減っており、特に中級と上級のクラスで顕著であった。大橋地区では「日本語能力試験N2レベルの日本語力」を研究生受入可否の判断基準の1つとしていることから、中国からの入学者が減ったことが原因ではないかと推察される。

表4 2020年度後期(筑紫地区)の時間割

	月	火	水	木	金
1時間目					
2時間目					
3時間目					
4時限目					
5時間目	初級2	大学院	中級【文法】 上級【会話】	初級2 中級【会話】	
6時間目			初級1	上級【B】	初級1

表5 2020年度後期（大橋地区）の時間割

	月	火	水	木	金
1時間目					
2時間目					
3時間目					
4時限目	初級2【文法】		初級2【会話】 中級【文法】		
5時限目	初級1【会話】	中級【会話】	初級1【文法】 上級【作・発】		上級【読・会】

表6 筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（後期）²

年度	14後		15後		16後		17後		18後		19後		20後		21後	
	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大
初級1	22	15	28	8	50	14	27	14	34	15	30	12	53	8	21	8
初級2	10		6	6	12	5	21	11	22	10	15	4	20	7	9	5
初級3															8	11
中級	14		5	14	12	25	14	29	24	22	18	25	16	14	12	8
上級			8	20	5	19	8	21	19	39	18	22	11	14	17	12
合計	46	15	47	48	79	63	70	75	99	86	81	63	100	43	67	44

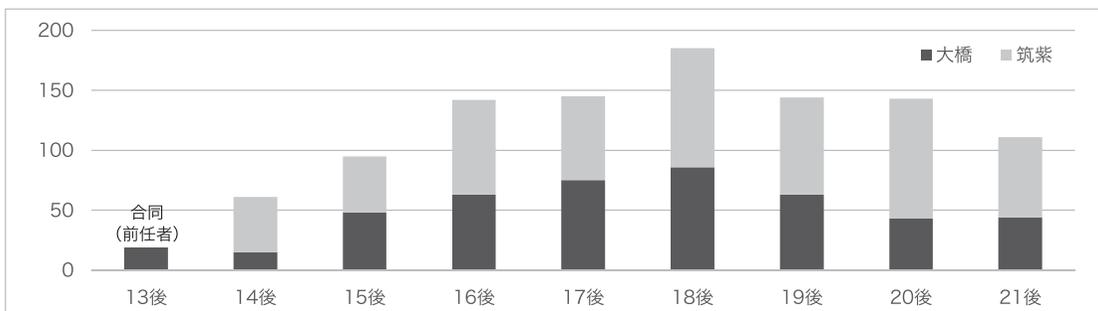


図2 筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（後期）

C. 2021年度前期の授業

コロナの感染拡大は年が明けても終息しなかったため、2021年度前期も全ての授業をオンラインで行うこととなった。開講期間は例年どおり4月第3週から6月末まで（4月19日～7月2日）の10週間であった。

筑紫地区においては当学期から1クラスの増設が認められ、初級が3レベル編成（全体では5レベ

ル編成)となった。これは、コロナ禍においても受講者が減っていないことに加え、前年度前期に試み的に開講した「初級3」クラスに12名の受講者がいたことで、初級後半(『げんき』Vol.2に相当)のクラスに一定のニーズがあることがセンター内で理解され、部門内からも「初級が2レベルでは厳しい」という増設を支持する意見が出たことから実現したものである。ご支援いただいた方々にこの場を借りて御礼申し上げたい。

受講者は筑紫地区が54名、大橋地区が24名(合計78名)であった。筑紫地区の正規授業(CSJ)の受講者は7名であったことから、本コースの受講者数だけで比較すると、筑紫地区は前年度同期の52名から5名減、大橋地区は同16名から8名増であった。

表7 2021年度前期(筑紫地区)の時間割

	月	火	水	木	金
1 時間目					
2 時間目					
3 時間目					
4 時間目		初級3		初級3	
5 時間目	初級2	中級	初級1 上級【会話】 大学院	初級2 中級 上級【読解】	初級1

表8 2021年度前期(大橋地区)の時間割

	月	火	水	木	金
1 時間目					
2 時間目					
3 時間目					
4 時間目		初級2【会話】			初級2【文法】
5 時間目		初級1【会話】 中級【会話】		初級1【文法】 中級【文法】 上級【作文】	上級【文法】

D. 2021年度後期の授業

留学生の入国が未だ解禁されないことから、2021年度後期も全ての授業をオンラインで行うこととなった。開講期間は10月11日～12月22日までの10週間で、例年どおりである。

受講者は筑紫地区が67名、大橋地区が44名(合計111名)であった。筑紫地区の正規授業(FJC)の受講者は13名だったため、本コースのみの受講者は54名で、前年度同期より14名減であった。一方、大橋地区は1名増であった。

例年、同じ試験を使い、同じ基準でクラス分けを行っているものの、当学期の大橋「初級2」クラ

スには学習歴の全く異なる学習者群が2つできていた。1つは過去に「初級1」クラスを受講しただけの学生たち（5名）で、デス・マス形の文法学習（『みんなの日本語』の1～13課に相当）を終え、これから辞書形やテ形、ナイ形などを学習しようという非漢字圏の出身者たちであった。もう1つは中国からの研究生たち（11名）で、N2合格者が6名、N1合格者が3名いたが、聞き話しの能力は明らかに初級後半もしくは初中級レベルであった。筑紫地区については、先にも述べたように、同年前期から1クラスの増設が認められ、初級が3レベル編成になっていたが、大橋地区については2レベルのままであり、地区全体の受講者数（20～40名）を考えると増設を要望できる状況にはなかった。そこで、それぞれの学習者群に別々の Meeting ID を設定し、2つの群を同時進行で教えることにした（担当は筆者）。教材は、「初級2」の学生たちには本クラス用に自作した教材を例年どおり使用し、「初級3（或いは初中級）」の学生たちには『J.BRIDGE』（初中級版）の1～3課を使用した。

表9 2021年度後期（筑紫地区）の時間割

	月	火	水	木	金
1時間目					
2時間目					
3時間目					
4時限目	中級	初級3		中級	
5時間目	初級2 上級【会話】	初級1 上級【読解】	大学院	初級1 初級2 初級3	

表10 2021年度後期（大橋地区）の時間割

	月	火	水	木	金
1時間目					
2時間目					
3時間目					
4時限目	中級【文法】	初級2/3【文法】		初級2/3【会話】	
5時限目	上級【作・発】	初級1【会話】 中級【会話】	上級【読・会】	初級1【文法】	

今後に向けて

今後の課題は、コロナ終息後のコース運営でオンライン授業の長所をどう活かしていくかである。限られた予算の中で学生たちのニーズに応じていくためにも、この2年間で得た経験を活かしながら、冒頭でも述べたハイブリッド型授業の導入を中心に検討していきたい。

注

- 1 本文（60頁）でも述べているように、筑紫地区の「初級1」の受講者数は、本コース（留学生センター主催の課外授業）とは別に、総合理工学府が正規科目として開講しているCSJ（前期）とFJC（後期）の受講者を含む。2020年度の受講者はCSJが0名、FJCが32名であり、2021年度はCSJが7名、FJCが13名であった。
- 2 太枠（2021年度後期の「初級2・3」）は、本文（65頁）でも述べているように、2つの学習者群を同一クラスで教えた。
- 3 2020年度は前期にCSJの開講を見送ったため、後期のFJCに（前期のCSJを受講するはずだった）修士の学生が参加した。結果、例年より多い32名が受講することとなった。

農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育

— 2021年度の実施状況 —

2021 Overview of the Japanese Language Education for those in the Undergraduate International Program in English (IUPE) at the Faculties of Engineering and Agriculture

柴田 あづさ*

1. はじめに

今年度は、農学部と工学部の学士課程国際コース（以下、IUPE¹）に入学した留学生（以下、IUPE生）が留学生センターの提供する Japanese Academic Courses（以下、JACs）を受講する体制に移行して4年目である。IUPE生は、I（総合日本語）コース、K（漢字）コース、S（会話）コース、W（作文）の4コース／8レベル編成のJACsの中からIコースとKコースを受講し、それを基幹教育・言語文化科目「日本語」に読み替え、単位を得ている。以下では、2021年度の1年生の受け入れと2年生に進級したIUPE生のJACs受講に関する概況を報告する。

2. JACs 受講までのスケジュール

新型コロナウイルスの影響を受け、今年度もJACsの授業はオンラインで実施することが決まった。表1および表2は、10月に入学した新1年生と、10月に進級した新2年生のJACs受講までのスケジュールを示したものである。

表1 2021年度新1年生のJACs受講までのスケジュール

1年生

8月23日	JACs システムへの受講登録・OT ² 受験に関する案内メール送信
8月23日～8月30日	OT 受験期間
8月30日	未受験者に対する OT 受験のリマインドメール送信

*九州大学留学生センター准教授

1 International Undergraduate Program in English の略。

2 インターネット上の日本語のレベル判定テストで、文法、読解、聴解の3種類がある。

9月30日	基幹教育ガイダンスでの JACs 受講オリエンテーション
	受講レベル及びクラスの結果発表
	メールによる質問受付開始
10月 6日	JACs 受講開始
	K コースのクラスで漢字のプレースメントテストの受験

表2 2021年度新2年生の JACs 受講までのスケジュール

2年生

8月26日～8月30日	JACs システムへの受講登録に関する案内メール送信、登録
8月30日	未登録者に対する受講登録のリマインドメール送信
9月21日	受講クラスの結果発表
	メールによる質問受付開始
10月 6日	JACs 受講開始

IUPE 新1年生は、農学部5名、工学部19名で、このうち5名が授業開始時に日本在住であった。新1年生への JACs 履修の案内メールは基幹教育教務係から代理送信された。新1年生に例年対面で行っている JACs 受講オリエンテーションは、昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響でメールによる連絡と質問対応となったが、今年度は、基幹教育のオンラインガイダンスでの開催が可能となった。そして、窓口担当教員（柴田／以下、窓口担当教員）が英語で説明を行い、質問はメールで受け付けた。通常 JACs 開始前に対面で行っている漢字のプレースメントテストは、昨年度に続き、初回の漢字クラスにおいて実施した。

一方で、新2年生のうち JACs を受講した IUPE 生は農学部9名、工学部14名で、このうちの11名が授業開始時に日本在住であった。受講登録の案内メールは、新1年生と同様、基幹教育教務係に送信を依頼し、8月26日～30日の間にクォーター3、クォーター4の登録するよう促した。

3. 受講レベル（コース）調整の結果

1年生は、OTの結果により判定されたレベルに、また2年生は、クォーター1、クォーター2に受講した JACs の成績評定に基づいて決定されたレベルの授業に出席し、そこで適当な難易度でないと思われた場合は適切なレベルに移動した。そして、クォーター3開始後2週間ほどで各留學生の最適な受講レベルが確定した。

ところで、2020年度 IUPE 入学生向けの『Kyushu University KIKAN Education 学士過程国際コース履修要項』（以下、『2020年度 IUPE 履修要項』）では、1年生は、IコースとKコースを、2年生は、Iコースを受講するよう定めているが、今年度は、工学部2年生に Q1および Q2でIコースの最上級レベルの I8コースを単位修得し、他に履修できるIのコースがなくなった者が一名おり、Iコースの代わりに Kコースの履修を認めることとなった。また、工学部の別の2年生は、Q3および Q4では I7コースを履修する予定であったが、本人から漢字力が不足しているためIコースではなく Kコースの学習

を継続したいと申し出があり、窓口担当教員が当該学生の漢字力を確認した後、Kコース履修が妥当であると判断し、許可するに至った³。さらに、工学部の新1年生に日本語母語話者相当であると判定された学生が1名おり、窓口担当教員が面談を実施し、これまでの学習状況と本人の希望を踏まえ、日本語はKコースのみを受講し、不足する単位は基幹教育の方針に沿って別の科目で読み替えることとなった。

4. IUPE 生の JACs 受講に関わる今後の課題

留学生センターが提供する JACs を IUPE 生が受講する体制に移行した3年目である昨年に引き続き、今年度も入学者に日本語と他言語の2つの第一言語を持つ学生が含まれており、特例措置を講じた。また、上記3. で述べたとおり、最上位レベルのIクラスを履修し終えた新2年生や、文法と漢字のレベルに開きのある新2年生に対しても特別の対応をとる必要が出た。だが、こうした取り扱いについて、『2020年度 IUPE 履修要項』には明記されていない。そのため、これらの特例に関しては、これを知らず申し出なかった一部の学生に不利益が生じる可能性があり、過去の窓口担当教員の頃から『IUPE 履修要項』の改定、つまり日本語を第一言語とする者や日本語レベルが日本語母語話者相当である学生の状況に応じた対応に関する記載が必要であるという提案を行ってきた。同時に、「日本語(=JACs)」の単位数に関する規定で、英文(正)とその日本語訳(副)の表記が一致していないところも修正し、『IUPE 履修要項』における「日本語」科目履修規定の表記を IUPE 以外の一般学部入学者向けに編纂された『基幹教育履修要項』のそれと揃えるよう⁴要請してきた。これらの課題に関しては、現在、対応が検討されている。

一方で、今年度は、工学部の2021年入学者用『IUPE 履修要綱』の履修細目が、『日本語では、「Integrated Courses (1)」から6科目6単位以上および「Kanji Courses (1)」から4科目4単位以上を修得しなければなりません。』というものから、『日本語では、「Integrated Courses (1)」、「Kanji Course (1)」から各4科目4単位以上、全体で10単位以上を修得しなければなりません。』という説明書きに変更され、JACs 運営側にとって課題となっている⁵。これは工学部側の、過去に2年生進級時にIコースに代えてKコースを履修する学生が複数名出たことへの対応であった。だが、変更後の説明は、全ての2年生がIコースに代えてKコースを選択可能であると読み取ることのでき、JACs にとっては来年度のKコースの定員超過の懸念材料となった。そこで、関係者を交えて協議を行った結

3 I6の教科書までは漢字にふりがなが振られているが、I7の教科書からは漢字のふりがながなくなることから、先学期にK4を終えたこの学生は、I7ではなくK5の履修を希望した。

4 2020年入学生用『IUPE 履修要項』の英文(正)では「Students also have to acquire 6 credits from “Integrated Courses” and 4 credits from “Kanji Courses”」となっているが、その日本語訳(副)は「日本語では『Integrated Courses (1)』から6科目6単位以上および『Kanji Courses (1)』から4科目4単位以上を修得しなければなりません」となっており、一致していない。なお、IUPE 以外の一般学部入学者向けに編纂された『基幹教育履修要項』では留学生の「日本語の履修」について「卒業までに12単位を修得します」のように記載されており、「12単位以上履修します」のような書き方はされていない。

5 英文(正)では以下のように変更された。「Students also have to acquire at least 4 credits each from “Integrated Courses” and “Kanji Courses”, for total of at least 10 credits.」

果、2021年入学生が2年生に進級する際は、工学部 IUPE コーディネーターが「原則はIコースを6単位、Kコースを4単位取るべきであること」を留学生に責任を持って指導し、混乱を回避すると約束した。しかしながら、スムーズな履修手続きのためには、「履修要項」にIUPE生に理解しやすい表現で履修方法の詳細を記載することが重要であり、今後も履修細目に関する協議を継続する必要がある。

日本語・日本文化研修コースの報告 (第21期生)

Report on Japanese Language and Culture Course (JLCC 2020-2021)

郭 俊 海*

1. はじめに

九州大学留学生センターの日本語・日本文化研修コース（Japanese Language and Culture Course、以下「JLCC」）は、日本国以外の大学の学部もしくは大学院に在籍し、日本語・日本文化に関する分野を専攻している学生を11か月間受け入れ、今後の日本研究に必要となる日本語能力の向上を図るとともに、日本の社会や文化に関する理解を深めることにより、諸外国の将来を担う世代に日本への興味・関心を伝播し、日本の事情に通じた指導者となる人材を育成することを目的とした短期留学コースである。

2. 概要

2. 1. 受け入れ人数

平成12年度から、日本語・日本文化研修生（以下、「JLCC生」）は一括して留学生センターが受け入れ主体となっており、令和2年度の受け入れ人数は8名である。

2. 2. 受け入れ期間 その年の10月1日から翌年の8月31日まで

2. 3. 出身国・地域と出身大学

21期生は、5カ国・地域の6大学から計8名が参加している。うち、国費奨学金受給者は1名（大学推薦）である。表1はその出身国・地域と出身大学を示す。新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、時差や家庭の経済的状況の悪化等の理由でオンライン授業の受講継続が困難となったため、2名の学生の在籍期間が変更となった。

*九州大学留学生センター教授

表1 21期生の出身国・地域と出身大学

国・地域	大学名	人数(名)
イギリス	ニューカッスル大学	1
中国	南開大学	2
	同済大学	2
中国(香港)	香港中文大学 ¹	1
フランス	国立東洋言語文化大学 ²	1
ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ校 ³	1
計(5カ国・地域)	6大学	8

1 令和2年10月1日から令和3年3月31日まで在籍。

2 令和2年10月1日から令和3年5月31日まで在籍。

3 プログラム修了後、令和3年9月1日から令和3年10月31日まで「特別研究生」として在籍。

2. 4. コースの修了要件

JLCCのカリキュラムは、必修科目、選択必修科目と選択科目から構成される。コースを修了するには、年間30単位(450時間)の履修が必要である(表2)。

• 必修科目(2単位、30時間)

留学生センターで春学期に開講される「自主研究(ISP: Independent Study Project)」で、2単位を履修する。

• 選択必修科目(24単位、360時間)

留学生センターで開講される選択必修科目群の「日本語論(JL: Japanese Language and Linguistics)」、「日本社会文化論(JC: Japanese Culture and Society)」のうち、それぞれ年間12単位以上を履修する。

• 選択科目(4単位、60時間)

基幹教育院や文学部、経済学部、法学部など各学部等が開講する日本の社会や文化に関する学部学生向けの授業科目を年間2科目(4単位)以上履修する。

表2 JLCC21期生のカリキュラム

	秋学期（10月～3月）	曜日&担当者	春学期（4月～8月）	曜日&担当者
必修科目			自主研究 2単位（30時間） ISP（Independent Study Project）	水3火2郭
選択必修科目	日本語論（Japanese Language and Linguistics） 通年12単位（180時間）			
	JL 101 日本語学概論	金3 齊藤	JL 202 日本語のバリエーション	火5 齊藤
	JL 102 日本の文学	火5 齊藤	JL 204 日本語教育学	金3 小山
	JL 103 日本語・日本文化概論 A	金2 郭	JL 203 日本語・日本文化概論 B	金2 郭
	JL 105 異文化間コミュニケーションのための日本語概論	火2 酒井	JL 205 実例で学ぶジャパノロジー	水3 小山
	日本社会文化論（Japanese Culture and Society） 通年12単位（180時間）			
JC 102 和菓子と日本人 A	木3 脇坂	JC 202 和菓子と日本人 B	木3 脇坂	
JC 103 現代日本の姿	木2 西頭	JC 203 人と社会を考える	木2 西頭	
JC 104 ドラマで学ぶ日本の歴史	水3 小山			
JC 105 4コマ漫画にみる日本 A	火3 和田	JC 205 4コマ漫画にみる日本 B	火3 和田	
JC 106 日本映像文化論 A	木5 大神	JC 206 日本映像文化論 B	木5 大神	
選択科目	通年4単位（60時間）以上 各学部等が開講する日本の社会や文化に関する学部学生向け授業			

2. 5. 単位認定

本コースで履修した科目は、成績認定が行われ、所定の要件を満たすと修了証が授与される。また単位互換に応じることでもある。

2. 6. 主な年間行事

日にち	行事内容
2020年	
9月16日（水）	オンライン・オリエンテーション、面談
21日（月）～10月2日（金）	JACs オンライン受講申し込み及びプレースメントテスト
10月2日（金）	令和2年度秋季入学式・外国人短期留学プログラム開講式 オンライン授業（Zoom）のオリエンテーション
11月5日（木）	国費留学生（1名）来日、入寮。
2021年	
1月6日（水）	JLCC、JACs、基幹教育及び学部の授業開始
12日（火）	長崎被爆者講話
14日（木）	オンライン折り紙教室
2月4日（木）	春学期オリエンテーション
3月22日（月）～4月5日（月）	JACs オンライン受講申し込み及びプレースメントテスト

4月8日(木)	基幹教育、学部、JLCC 授業開始
8月10日(火)	閉講式
25日(水)	オンライン成果発表会

3. 授業について

3. 1. 授業の取り方

授業の取りかたについては、従来通り、秋学期に留学生センターが開講する各種技能別日本語コース（総合、会話、漢字、作文）と JLCC の必修科目を中心に受講させ、日本語力を高めることを目的とした。春学期には、引き続き JLCC の必修科目、基幹教育院や学部の授業を中心に受講させた。

3. 2. 必修科目「自主研究」

JLCC 生の日本語の応用力を高めることと、身を持って日本人や日本社会に接する機会を与えることを目的とし、従来の「文献講読」を15期生から「自主研究（ISP: Independent Study Project）」としている。

「自主研究」は「文献講読」と「社会調査」に分けた。社会調査では、日本に関する分野から各自が興味のあるテーマを見つけ、それについて問題設定や社会調査（インタビュー調査・質問紙調査）を行う。隔週に口頭発表による進捗状況を報告し、学期末にレポートを作成する。文献講読も同様に、各自が興味のある分野から単行本一冊を選び精読し、隔週に口頭発表による進捗状況を報告し、学期末にレポートを作成する。

以下は、JLCC 生たちのレポートのテーマである。

【文献講読】

- | | |
|------------|---|
| 1 レー・アイントウ | 「日本人が作った住みよい人間関係」 |
| 2 タン・ダイキン | 「メカニズム分析から見る日本語のレトリックを使いこなす方法」 |
| 3 テイ・ガセイ | 「日本人における上下関係の比較基準の重要性順」 |
| 4 シン・インキ | 「甘えの心理の視点から「対人恐怖の発生する日本人の歴史的・社会的原因」の考察」 |
| 5 ジョ・イラン | 「人間失格」について |
| 6 ラ・ケイ | 「労働条件と労働基準法の適用」 |

(在籍期間が変更となった2名は未提出)

21期生の「自主研究」は、ほとんどのJLCC生が渡日できなかったため、「文献講読」だけにした。本学中央図書館が公開している、自宅でもアクセスできる電子コンテンツの資料を紹介し、「自主研究」に役立たせていた。

3. 3. エクストラ・カリキュラムの開発

近年、JLCC生の関心や興味は、日本語よりも日本文化や日本社会一般に移りつつある傾向である。修了生からは「日本文化を体験できる機会を増やしてほしい」、「見学旅行や日本人との交流活動をもっと多く行ってほしい」、「帰国前に日本でインターンシップを経験したい」等の声が上がってきている。こういった修了生のフィードバックを踏まえ、体で日本文化を体験できる活動を増やすことを目的とし、ゲストレクチャーや課外活動を含むエクストラ・カリキュラムの開発・実施を継続している。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大による影響のため、20期生の春学期（令和2年）から対面での課外活動をすべて中止している。21期生の場合は、オンラインで実施された一部の課外活動、例えば、長崎被爆者講話シンポジウムや本学図書館が主催するオンライン折り紙教室などに参加した。

3. 4. その他

学生の指導においては、これまでは、普段勉強や生活に関する相談に対し適宜手当を講じるほかに、学期ごとに、それぞれ2回にわたってJLCC生全員を対象に一人ずつ三者面談（コーディネーターと事務担当）を実施してきた。21期生の場合、来日していない学生に対して、毎週、授業前後の時間を利用して面談を行い、勉強上の問題点などを迅速に把握し、スムーズに問題解決に努めた。また、学生とのLINEグループを作って、授業時間外や週末にも迅速に学生対応できるようにした。来日した1名の学生に対しては、定期的に研究室に呼んで直接話を聞く、あるいは一緒に食事をするなどして、学生の様子を把握し適宜相談対応をした。

また、JLCC生が効果的に日本語や日本文化に関する研修を自ら行えるように、平成27年度から、閉講式終了後の翌日から成果発表会の前日までの期間を自主研修期間とし、研修前に計画書、研修後には報告書を提出させることにしている。しかし、21期生の場合は、新型コロナウイルス感染拡大による影響のため、自主研修の実施を中止した。

4. コース評価

コース評価は、これまでは春学期の「自主研究」の最後の授業時に、JLCC生によるプログラム評価の報告会を行い、カリキュラムの構成、授業内容、見学旅行及び今後の改善点の五つの面から、「非常に満足」「満足」「どちらとも言えない」「あまり満足しない」「満足しない」と5段階評価の形をとっていた。

21期生の場合は、プログラム評価はGoogle Formを使用した形に切り替えた。結果は以下のとおりである。

1. プログラム全体について（回答者：3人）

カリキュラムの構成、授業内容などプログラム全体について、「非常に満足」「満足」と回答した人が3人（100%）だった。「プログラムに参加する前に、日本に関する知識をたくさん学びました。しかし、コースが始まってから、日本について知っていることは本当にすくないことに気づきました。九大の面白い授業はいろいろ勉強になりました」とあるように、カリキュラムの構成や授業内容に満足していることが示されている。ただ、一名の学生が「自分の日本語力が低いため選択科目が難しく、大きなチャレンジだった」と述べている。オンラインによる日本人学生向けの「選択科目」の受講が、日本語力が不十分な JLCC 生には少し難しかった。

2. 「自主研究」（回答者：3人）

自主研究の難易度については、「ちょうどよい」が66.7%、「難しい」が33.3%だった。全体的に「良かった点」としては、「レポートの書き方を細かいところまで教えてくれました」「自分で研究することはやはり楽しい」といった肯定的な意見があった。一方、問題点として「研究レポートを書くのは今回が初めてなので、かなり難しかった」と一人の学生が述べているように、今後個々人のレベルやニーズに合わせ、テーマと内容の選定についてさらに細かい指導を工夫することが必要である。

5. 今後の課題

近年、研修コース生から「日本人学生と一緒に受ける授業が少ない」といった声や、日本企業への就職、日本や海外の大学院への進学に関する相談が増えてきている。今後、日本人学生と研修コース生との協働学習型のカリキュラムの開発や、研修コース生を対象とした、就職、大学院進学に関する支援やフォローアップをいかに提供すべきかが、引き続き課題となる。また、成果発表会では、オンラインで行われる部活やサークル活動などに参加したい、あるいは定期的にオンラインによるクラス会をやってほしいとの提言があった。今後の課題として検討したい。

2020年度 “AsTW2021” 実施報告

“ASEAN in Today’s World (ASTW)”

生 田 博 子*

1. ASEAN in Today’s World とは

ASEAN in Today’s World (AsTW) は、近年の世界政治経済への影響力を増している ASEAN 地域にフォーカスし、世界で活躍する次世代のアジアブリッジの核となる人材の育成を目的として本学が開発した教育プログラムである。平成20 (2008) 年度から ASEAN 諸国の有力大学を共同実施校 (ホスト校) として、2月下旬から3月上旬に ASEAN 地域で実施している。毎年、日本人学生及び ASEAN 諸国からの留学生生合計40名程度が参加しており、2週間のプログラム実施期間、生活を共にすることにより、活発な国際交流や異文化への相互理解を深める。

なお、新型コロナウイルス感染拡大により、2021年3月に実施された2020年度 “AsTW2021” についてはオンラインによる実施となった。

2. 共同実施大学 (ホスト大学) 及び協力大学

共同実施大学：

- ・マヒドン大：第13回 (2020年度) ～第15回 (2022年度)

協力大学：

- ・マヒドン大学 (第1回～第3回の共同実施校)
- ・アテネオ・デ・マニラ大学 (第4回～第6回の共同実施校)
- ・ベトナム国家大学ハノイ校 (第7回～第9回の共同実施校)
- ・マラヤ大学 (第10回～第12回の共同実施校)
- ・福岡女子大学 (学生・講師派遣について協力、2020年度は参加せず)

*九州大学留学生センター准教授

3. プログラム スケジュール (2020年度)

※2020年度は新型コロナウイルス感染拡大により、対面講義からオンライン講義実施に変更。

実施期間 2021年3月8日(月) - 3月19日(金)

- 3月8日(月)：オリエンテーション・ASEAN 事務局特別講演・開講式
- 3月9日(火)～3月18日(木)：授業、バーチャル・スタディ・トリップ等
- 3月19日(金)：文化交流イベント・閉講式

4. 開講科目及び修了要件 (2020年度)

- 1 ASEAN 研究コース (ASC: ASEAN Studies Courses) 2 科目
 - Social Innovator Incubation (マヒドン大学講師)
 - Multiculturalism in Asia (留学生センター生田准教授、招聘講師 4 名)
- 2 アジア言語・文化コース (ALC: Asian Languages & Cultures Courses) 3 科目
 - Thai Language & Culture Course (マヒドン大学講師)
 - Japanese Language & Culture Course (マラヤ大学講師)
 - Malaysian Language & Culture Course (マラヤ大学講師)

参加生は1ASC から1科目、2ALC から1科目の計2科目を選択して履修し、合計4単位の認定を受けることを修了要件としている。また、バーチャルスタディトリップや文化体験、及びASEAN事務局による特別講演等、参加生はすべての講義・活動に参加することが求められた。

5. 参加者 (2020年度)

日本 11名	日本	11名	九州大学 (10名) 共創学部 (4名)、経済学部、21世紀プログラム、医学部、芸術工学部、農学部、 法学部 各1名 ※上記10名に本学より助成金支給 宮崎公立大学 (1名)
ア セ ア ン 諸 国 20 名	タイ	8名	Mahidol University (8名)
	マレーシア	2名	University of Malaya (2名)
	ベトナム	6名	Vietnam National University, Hanoi (2名) Can Tho University (4名)
	インドネシア	3名	Gadjah Mada University (1名) University of Indonesia (1名) Universitas Tanjungpura (1名)
	ミャンマー	1名	Yezin Agricultural University (1名)

※マヒドン大学生3名と他のASEAN諸国大学生12名日本学より奨学金支給。

6. 奨学金（2020年度）

九州大学から参加者への経済的支援として、全学協力事業基金から ASEAN 加盟国の学生15名にプログラム参加費を支給し、また、今回はオンラインでの実施となり、特別に九州大学の学生10名に参加費のうち半分を助成金として同事業基金から支給した。

Summer in Japan (SIJ) 2021 オンラインプログラム実施報告

Report on the Summer in Japan (SIJ) 2021 Online Program

野 中 ちさと*

柴 田 あづさ*

五 嶋 佳 夜**

1. はじめに

九州大学留学生センターでは、2001年より短期受入れサマープログラムを実施しており、今年20年目の節目を迎えた。昨年度は対面開催で準備を進めていたが、新型コロナウイルスの感染状況により中止となった。そこで今年度は、早い段階でオンライン開催を決定し、調整・準備を行い、無事開催に至った。本報告書では、開催までの流れや背景を概観したのち、実施内容について報告し、参加者アンケート結果の考察を通して今後の課題等を簡潔に論じる。

2. プログラム概要

本プログラム (= Summer in Japan、以下 SIJ) は、海外の大学に所属する学生が日本文化および言語を学術的かつ実践的に学ぶことを目的としたサマープログラムである。例年夏季期間に、アジア諸国をはじめとする世界各国から20～30名ほどの学部生を受け入れ、九州大学で4週間程度のプログラムを実施している。

2. 1. 開催までの流れ

昨年度は、2020年6月23日～7月17日開催予定でプログラムを編成し、参加者の募集、選考を行っていた。しかし、2020年4月、新型コロナウイルスの感染状況を鑑み、中止するに至った。今年度に関しては、引き続き今後の感染状況や水際対策の見通しが立たないため、早い段階でオンライン開催を決定し、調整・準備を開始した。SIJとして、今回が初のオンライン開催となるため、講義やアクティビティの内容を新たにデザインし、オンライン開催のメリットや工夫を生かせるよう計画を進めた。

*九州大学留学生センター准教授

**九州大学国際部留学課職員

オンライン開催となることで、渡航や移動時間が削減されるため、例年4週間にわたり開催されるプログラムを3週間に凝縮した(図1)。また、参加が想定される諸外国の大学の夏季休暇期間を調査し、今年度のSIJの実施期間を以下のように決定した。

SIJ 2021 Timetable Monday, July 5 - Tuesday, July 27, 2021

	MON 05-Jul	TUE 06-Jul	WED 07-Jul	THU 08-Jul	FRI 09-Jul	SAT 10-Jul	SUN 11-Jul	
Morning							ILS (5) 10:00-11:30am	
12:00 noon - 1:30pm	Opening Ceremony 1:00-1:30pm	JL (1)	JL (2)	JL (3)	JL (4)	Enjoy your weekend!	Enjoy your weekend!	
1:50 - 3:20pm	Orientation/ campus tour 1:30-2:30pm	ILS (1) 3:00-4:30pm	ILS (2)	ILS (3)	ILS (4)			
3:40 - 5:10pm			Virtual city tour 4:00-5:00pm					
Evening	Tanabata (Star Festival) event 6:30-8:00pm		Making of Plastic Food Models 5:00-5:30pm		Welcome Party 7:00pm- (tentative)	Open Campus 6:30-7:30pm		
	12-Jul	13-Jul	14-Jul	15-Jul	16-Jul	17-Jul	18-Jul	
Morning	ILS (6) 10:00-11:30am						ILS (9) 10:00-11:30am	
12:00 noon - 1:30pm	JL (5)	JL (6)	JL (7)	JL (8)	JL (9)	Enjoy your weekend!	Enjoy your weekend!	
1:50 - 3:20pm	Pre-virtual lab tour 3:00-3:30pm		ILS (7)	ILS (8)	JL (10)			
3:40 - 5:10pm	Virtual lab tour 3:30-4:00pm		Virtual lab tour 3:30-4:00pm		Virtual lab tour 3:30-4:00pm			
Evening				Origami workshop 5:00-6:30pm				
	19-Jul	20-Jul	21-Jul	22-Jul	23-Jul	24-Jul	25-Jul	
Morning	ILS (10) 10:00-11:30am							
12:00 noon - 1:30pm	JL (11)	JL (12)		JL (13)	JL (14)	Prep for ILS presentation	Prep for ILS presentation	
1:50 - 3:20pm			ILS (11)	ILS (12)	JL (15)			
3:40 - 5:10pm			Global Startup Center 4:00-5:00pm		ILS (13)			
	26-Jul	27-Jul	Remember: All ceremonies, class sessions, and other events are in JST (Japan Standard Time) 🇯🇵					
12:00 noon - 1:30pm	ILS (14)	Closing Ceremony 1:00-2:00pm						
1:50 - 3:20pm	ILS (15)							

図1 プログラムスケジュール

2. 2. プログラム実施期間とプログラムスケジュール

実施期間：2021年7月5日（月）～7月27日（火）

2. 3. 学生選考

参加者数については、初のオンライン開催であるため、プログラムの運営に携わるプログラムコーディネーターと国際部留学課関係職員で定員について議論し、15～30名が適切であると判断した。参加者募集にあたって、本学の協定校（大学間および部局間を含む）並びに海外オフィスを通じて周知し、ウェブサイトやFacebookを中心に広報活動を行った。まず、第一次応募締め切りである3月31日（水）までに18名の応募があった。さらに募集期間を延長し、第二次応募期間に追加で2名の応募を受け付けた。選考課程では、所属大学における成績証明（GPAスコア）と英語能力を証明するスコア（TOEFL iBTあるいはそれに準ずる英語能力検定試験のスコア）、および小論文を総合的に判断し合格者を決定した。可否通知後、それぞれの参加意思を確認し、今年度は計16名が参加する運びとなった。

2. 4. 参加学生の動向

今年度のプログラム参加者の所属大学と所在国の内訳は以下の通り（表1）である。オンラインによる実施ということから、日本との時差が少ないアジア諸国からの参加が主であるが、アメリカ、イギリス、ハンガリー、ブラジルの大学に所属する学生も参加した。

表1 プログラム参加者の性別、所属大学、所在国および専攻

	Gender	University	Country	Major
1	Male	National University of Singapore	Singapore	Southeast Asian Studies
2	Female	Ho Chi Minh City International University	Vietnam	Chemistry
3	Female	National Economics University	Vietnam	Economic Development
4	Female	Swansea University	Wales (U.K.)	Law
5	Female	College of William and Mary	United States	Economics
6	Male	National University of Singapore	Singapore	Japanese Studies
7	Male	Renmin University of China	China	Human Resources Management
8	Female	Beijing Sport University	China	Journalism-Sports Event Resources (Program) Production
9	Male	Fudan University	China	Electronic Science and Technology
10	Male	South China University of Technology	China	Electrical Engineering and Its Automation
11	Male	Northeast Normal University	China	Finance
12	Female	Beihang University	China	Social Sciences
13	Female	Fulbright University Vietnam	Vietnam	Psychology
14	Female	Mahidol University	Thailand	English
15	Female	University of Debrecen	Hungary	General Medicine
16	Male	Federal University of Rio de Janeiro	Brazil	Law

3. 講義

本プログラムは現代日本と日本語に関する多面的教育に特化したサマープログラムである。英語によるオムニバス形式の講義（Interdisciplinary Lecture Series）と、レベル別に実践的日本語運用能力を育成する語学コース（Japanese Language Course）を展開した。

3. 1. Interdisciplinary Lecture Series (ILS)

例年は、現代日本研究入門コース（Introduction to Contemporary Japan または ICJ）として、主に、留学生センター教員が担当するリレー講義を実施しているが、今回はオンラインの特性を活かし、国内外の学外ゲスト講師を招き、以下の通り（表2）、日本を大きなテーマとし、様々な分野・地域からゲスト講師を招き講義を実施した。また、学生には最終課題としてグループプレゼンテーションを課した。

表2 各セッションテーマとゲスト講師

Session	Time and Date	Topic	Guest Lecturer
1	3:00-4:30pm Tuesday, July 6	Orientation and community building	n/a
2	1:50-3:20pm Wednesday, July 7	“World wars and cell phones: Dark secrets behind convenience” Part 1	Kaori BURKART, Oita University
3	1:50-3:20pm Thursday, July 8	“Transitioning into becoming a professional after university”	Nezia AZMI, University of Hawai‘i at Mānoa
4	1:50-3:20pm Friday, July 9	“Japanese online games, anthropology and the pandemic: The challenges and possibilities of doing long distance ethnographic fieldwork”	Mattias VAN OMMEN, Harvard University
5	10:00-11:30am Sunday, July 11	“When there’s no map: Writing to navigate the pandemic” Part 1	Mary CHANG, Independent Researcher
6	10:00-11:30am Monday, July 12	“When there’s no map: Writing to navigate the pandemic” Part 2	Mary CHANG, Independent Researcher
7	1:50-3:20pm Wednesday, July 14	“World wars and cell phones: Dark secrets behind convenience” Part 2 By Kaori BURKART, Oita University	Kaori BURKART, Oita University
8	1:50-3:20pm Thursday, July 15	“ ‘International education’ and edutourism: Critical perspectives”	Nezia AZMI, University of Hawai‘i at Mānoa
9	10:00-11:30am Sunday, July 18	“Thinking philosophically about the pandemic” Part 1	Kirsten BUSH, University of Hawai‘i at Mānoa
10	10:00-11:30am Monday, July 19	“Thinking philosophically about the pandemic” Part 2	Kirsten BUSH, University of Hawai‘i at Mānoa
11	1:50-3:20pm Wednesday, July 21	“The impact of internationalization on teaching and learning”	By Wendan LI, University of Hawai‘i at Mānoa
12	1:50-3:20pm Thursday, July 22	“Media and public perceptions: Japan”	Yoshie UDAGAWA, The University of Tokyo

Session	Time and Date	Topic	Guest Lecturer
13	3:40-5:10pm Friday, July 23	"Media and public perceptions: Juvenile crime"	Yoshie UDAGAWA, The University of Tokyo
14 & 15	12:00noon-1:30pm & 1:50-3:20pm Monday, July 26	Group presentations	n/a

3. 2. Japanese Language Course (JLC)

今年度の日本語コースは、Beginner_a、Beginner_b、Elementary、Intermediate の3レベル4コースにより開講した。4つのコースに分けるため、学習未経験者はBeginner レベルに自動的に振り分け、経験者にはオンラインによるプレースメントテストを実施し、文法力と聴解力、読解力を測定した。その結果、Beginner は8名、Elementary は1名（文法50点中15点）、Intermediate は7名（文法50点中39～49点）の学生がプレースされた。そして、人数の最も多かったBeginner レベルを2コースに分けることとした。表3には、各レベルで使用した教科書と学習課、教育内容を示している。

表3 SIJ 2021 日本語コース (JLC) の概要

レベル	教科書と範囲	内容
Beginner_a Beginner_b	Genki I L1 ~ L4 ひらがな、カタカナ	日本語学習経験の無い学習者を対象に、日常生活でよく使う基本的なことば・表現や初歩的な文法を学び、簡単な日常会話ができるようになることを目指す。並行して、ひらがなとカタカナの読み書きも学習する。
Elementary	Genki I L3 ~ L6	日本語学習経験の浅い学習者を対象に、日常生活でよく使う基本的な語彙や表現、各品詞の活用を学び、簡単な日常会話ができるようになることを目指す。
Intermediate	中級へ行こう L2, L5 ~ L8	初級の学習を終えた学習者を対象に、初中級の文型や語彙を学習し、作文や聴解、会話をとおして練習する。

また、今年度の日本語コースでは、新たな試みとして、オンライン授業に日本人学生を招き入れ、日本語の練習相手しながら交流する企画を組み入れた。平時であればSIJ生は教室の外でホストファミリーやコンビニの店員などとのやりとりを通して日本語の運用力を鍛えられるが、オンライン開催ではこうした機会がなく、日本語の上達を図ることが容易でないことが予想されたためだ。そこで、五嶋と柴田はSIJサポーターや共創学部1年生、SALC登録者からボランティアを募り、各クラスの日本語教員がボランティアと連絡を取り合うことで、受け入れの準備を行った。なお、今年度JLCに参加したボランティアの総数は18名（延べ42名）であった。

4. アクティビティ

平時であれば、福岡市や糸島市へのスタディトリップ、ホームステイ体験など実践的な学びの機会や、交流活動が主軸となるが、今年度は運用上の制約を見極めながら、以下の内容を計画・実施した。

4. 1. バーチャルラボツアー

サマープログラムの期待される効果として、諸外国の有力大学から優秀な学部生を受け入れることで、将来的な本学学位留学への動機づけをすることが挙げられることから、今年度初の試みとして、留学先として特に人気の高い理工系の研究室訪問をオンラインで行った（表4）。

表4 バーチャルラボツアースケジュール

Day	Time and Date	Laboratory Director	Research Area
Pre	3:00-3:30pm Monday, July 12	N/A	Orientation
1	3:30-4:00pm Monday, July 12	Prof. Tomo INOUE	Architecture and Building Construction
2	3:30-4:00pm Wednesday, July 14	Prof. Hisako NOMURA	International Agricultural Development Studies
3	3:30-4:00pm Friday, July 16	Prof. Masamichi KOHNO	Thermal Physics and Engineering

4. 2. イベント

例年 SIJ では各種イベントを通して学内サークルや周辺地域の人々との交流を図っているが、今年はオンライン開催のメリットや工夫を最大限に考慮しイベント内容を刷新した。具体的には、学内外の団体や機関との連携可能性を模索し、結果、9件のイベントを実施するに至った（表5）。

表5 イベントリスト

	Time and Date	Event	Host
1	1:00-1:30pm Monday, July 5	Opening Ceremony	SIJ Team
2	1:30-2:30pm Monday, July 5	Orientation & Campus Tour	SIJ Team
3	6:30-8:00pm Monday, July 5	Tanabata (Star Festival)	Kyushu University Central Library
4	4:00-5:30pm Wednesday, July 7	Virtual Fukuoka City Tour & Plastic Food Making Workshop	Fukuoka Convention & Visitors Bureau Food Sample RIKI, Co., Ltd SIJ Team
5	7:00-9:00pm Friday, July 9	SIJ 2021 Welcome Party	SIJ Student Supporters
6	6:30-7:30pm Saturday, July 10	Open Campus	Kyushu University Student Supporters
7	5:00-6:30pm Thursday, July 15	Origami Workshop	Kyushu University Student Club: ORUTO
8	4:00-5:00pm Wednesday, July 21	Global Startup Center Special Lecture	Global Startup Center (Fukuoka)
9	1:00-2:00pm Tuesday, July 27	Closing Ceremony	SIJ Team

4. 3. サポーターとの交流

例年通り、学内で希望者を募り、SIJ生1名に対し九大学生1名をサポーターとして選定した。選考に際してはSIJ生および九大学生の性別や出身国、大学所在国、専攻、語学能力（英・日）などできる限りマッチするよう調整を行った。今年度はオンラインでの交流となるため、交流の機会や質が懸念された。そこで、サポーターには事前オリエンテーションに参加してもらい、SIJプログラム開始前から担当するSIJ生とコミュニケーションをとるよう促した。結果、SNS等のツールを活用した積極的な交流が進み、サポーター主催のイベントやプロジェクトを通し連帯感が生まれた。

5. 参加者アンケートの結果

プログラム参加者（SIJ生）に対し、アンケートを実施し、全体の評価およびイベントや活動毎の感想を尋ねた。講義最終日にオンラインでアンケートに回答してもらったため、回答率は100%であった。以下、そのうち一部の設問および回答（原文ママ）をまとめた。

Q. How did you enjoy the Interdisciplinary Lecture Series (ILS)?

I think it was very interesting to learn about topics that are outside of my own academic discipline

Some of the classes were very interesting for me because it is related to the field I study in my home country. I love that we can discuss a lot of topics and exchange our opinions and perspective.

I really love it. They opened my horizon, and motivated for my future career path

The subject matter of the course is very rich and covers a wide range, and every teacher is very passionate about teaching. The interaction with teachers and classmates improved my oral English and gave me a better understanding of each topic.

I really love how internationalized of the ILS course. I think the ONLINE format of SJI program this year made the ILS very diverse because there are so many guest lecturers from so many places in the world. I studied many new methods for doing teamwork and professional writing as well as improved my critical thinking. Even though, I would say that the course might not be related to my current major, I did enjoy most of the contents and activities provided by professor. This course is very well organized and I really hope SIJ always include ILS in their future plan.

前述の通り、オンラインの特性を活かし、国内外のゲスト講師を招いたことでより多様性のあるテーマ、ディスカッションにつながったようだ。各分野の専門家から講義を受けることで専攻を超え視野が広がり、様々なバックグラウンドをもつSIJ生が協働的に学ぶことが意義深い経験となったようだ。

Q. What did you think about the Japanese Language (JL) course?

Sensei cared everybody and wait for our slow understanding so I am really appreciate that

I enjoyed the part where I had the opportunity to interview and converse with local Japanese students.

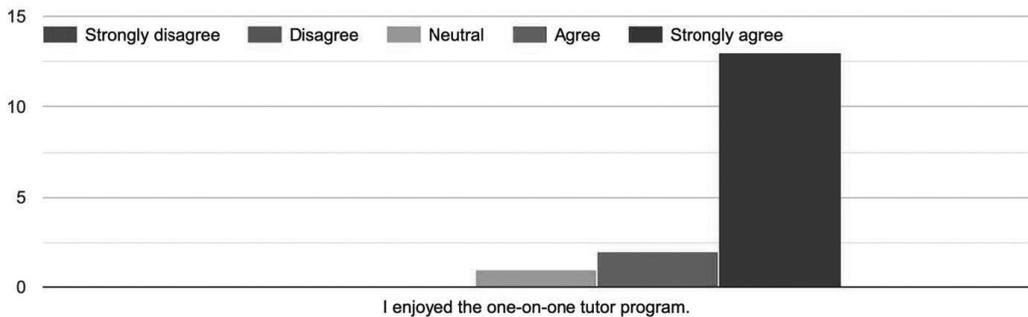
Kind of challenging but it's good to have supporters to talk

In just ten days, I got familiar with hiragana and Katakana, which was closely related to the teacher's curriculum and teaching level, as well as the cooperation of students.

It was great and I like it a lot. Honestly it was quite tough because there were many things to remember and worked on every. But it was worth it because I learned a lot from the class. Sensei was also very supportive. I hope that you can continue to have this class.

SIJ 生の JLC に対する評価は、日本語教員らの熱心できめ細やかな指導によって、概ね高いものであった。授業に日本人を招き入れたことに対しても、日本語会話の機会が増え、日本への見識を広めるきっかけとなったといった回答が複数寄せられ、一定の評価を得た。一方で、短期間に集中して仮名や多くの表現を覚え、日々の宿題に取り組むことに負担を感じていた参加生がいたことも明らかになり、来年度に向けた課題となった。

Q. Choose a response that best describes the following statement: *I enjoyed the one-on-one tutor program.*
Tutor program



大多数の SIJ 生がサポーターとの交流に満足したことが分かる。各ペアで多少の差はあるものの、平均して週に 2～3 回連絡を取っていたと回答した学生が多かった。

Q. Which event did you enjoy the “most” and why?

I enjoy Tanabata the most because we have so many chances to communicate with others

The Global start up, since it got the same position with what I am learning right now

Origami. It's so interesting.

Tanabata star festival. It was quite interactive with the other Kyushu university students and learning about its origins was very interesting to me.

City tour because I can feel the atmosphere there and it really motivates me to study in Japan

I enjoyed the plastic food making workshop because it's my first time seeing the production of plastic food model. It would be better if I had the chance to do it.

I enjoyed cultural exchange sessions the most because I get to connect with other students and supporters as well as understand more about Japan. I especially liked the plastic food workshop because I've never seen it before, and I appreciate that the staff printed our Tanabata wishes to put physically in the university campus!

Origami workshop as I have always wanted to try making origami figures.

Welcome party, meeting so many friendly Japanese tutors.

TANABATA ~ Because all of us can take part in it.

tanabata. interesting cultural activity

I enjoyed the welcome party because it was the first time we actually getting to know more about other participants and tutor.

The "Origami workshop". I have really loved Origami for a long time but I am a clumsy person and there is no person around who can teach me this. However, the student was nice and talented, and he guided so patiently. I love to join his workshop more

Japanese Tanabata Festival, because it originated in China, I have a sense of affinity, and I saw from this activity the Japanese people's protection and inheritance of culture, is very valuable, worth us to learn.

I enjoyed Tanabata event most. Since it is the first event I joined with all SIJ members, so I think it sticks on my mind so many memorable and wonderful memory.

The Tanabata event. Because it was a very interesting and cultural event

七夕イベントを挙げた回答者が多いが、それぞれの学術的興味や趣味嗜好なども回答に影響しているようだ。特に、九大の学生団体やSIJ サポーターが主導したイベントは心からリラックスし楽しんでいたように感じられた。

Q. How would you improve our program especially in the "online" format?

Add more events for students to talk with each other

The attendance in the classes. Hope I was not that busy to miss so many of the activities!

Maybe we can have more interactions.

I think that maybe the ILS sessions could be a more interactive as opposed to the standard Q&A format (Simple fun quizzes etc)

I think maybe we need to organize with longer time, more online activities

Perhaps more opportunity for SIJ participants and supporters to interact

I guess we can make it a little longer (4-5 weeks) and promote more sessions between supporters and students (like the welcome party, but with more time so we get to know each other more personally).

Possibly have more events; more general events about Japan as a whole. E.G. a session on the 'unwritten rules in Japan', food etiquette, things tourists do that Japanese people find rude, etc.

More relaxing activities held by students may be fine.

Maybe you can add some activities that all of our participants can take part in and not just listen to the teachers.

add interaction activities

n/a

I think it would be better to allow a free session for each SIJ student and his/her tutor to practice Japanese together

It seems to me that it's done exceptionally well already.

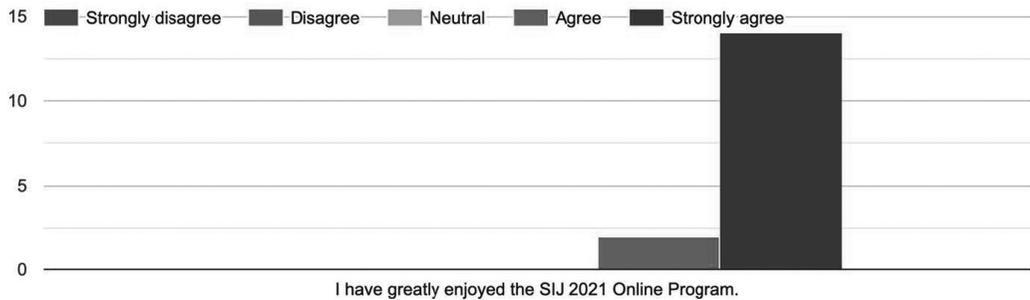
I basically love how SIJ 2021 was be like. Even though it was online but I have gained more than I expected. I never think of there is some points should be improved because it had been so well organized. I would recommend SIJ for all my friends who have wills to go to Japan like me in the future.

Nothing to add

学生間のインタラクティブさや学生主体のイベントの充実など、次回へ反映すべき点が多数挙げられた。オンライン開催のメリットや工夫を最大限に考慮したプログラム内容を検討、実施を心がけてきたが、学生たちの声をしっかりと受け止め、反省、改善につなげたい。

Q. Choose a response that best describes the following statement: *I have greatly enjoyed the SIJ 2021 Online Program.*

Your overall experience



SIJ全体に対する評価は総じて高く、回答者全員がプログラムに満足していることが伺える。自由記述でも、プログラムや各アクティビティに対してポジティブな回答が多く、運営サイドの試行錯誤や想いが成果として現れたのではないだろうか。

6. 今後の課題と改善策

参加者アンケートから示される通り、回答者全員がプログラムを高く評価していることがわかった。自由記述回答からも、SIJ生の満足度がうかがえる。他方で、少数ではあるが、「(講義に関して)もう少し専門性がある内容だと良かった」や「よりインタラクティブなイベントがあると良い」などの意見もあった。これらは重要なポイントであり、今後の課題として考えていく必要がある。

今回が初のオンライン開催であったこと、そして、コーディネーター教員2名(野中、柴田)ともにSIJ未経験であったこともあり、ほぼゼロからのスタートとなった。予備知識や強い思い入れが無いことで、逆に自由な発想で愉しんで取り組むことにつながったように思う。オンライン開催をいかに対面開催に近づけるか?ではなく、オンライン開催のメリットや工夫を生かせるよう講義やアクティビティの内容をデザインすることを目指した。プログラムを実施する過程で、オンライン開催の限界や改善点が明らかになった反面、オンラインならではの学習や交流スタイルが新たに生まれ、コロナ禍における国際教育の意義や目的を改めて検討・確認する機会となった。このような知見を、留学生センターや大学全体のプログラム運営に反映していくことが重要であると考えます。

アジア太平洋カレッジ in Hawai'i

The College of Asia Pacific Program in Hawai'i

木下博子*

Introduction

This paper describes the implementation of the College of Asia Pacific in Hawai'i online in August 2021. Due to the impact of the Covid-19 outbreak, the program has been online since its initial launch, providing students with a new type for their study abroad experience. This paper discusses the progress and future prospects of the online study abroad program based on the results of a post-program survey.

1. Outline of The College of Asia Pacific Program

The College of Asia Pacific program (CAP, hereafter) is a short-term study abroad program jointly arranged and implemented with the University of Hawai'i (UH, hereafter) as a partner institution. The participants include both Japanese and international students: those enrolled full-time in Kyushu University (mostly Japanese) and international students from universities in the Asia-Pacific region. While targeting primarily undergraduate students at an entry-level, students of any grade or major are eligible to apply. As a short-term and intensive program, CAP lasts for two weeks, typically in mid-August, during the summer vacation period of most universities in Japan. Similar to other short-term study programs Kyushu University arranges, CAP was originally designed as an onsite program. However, it has been shifted to an online program since FY2020 because of the surge in the global health crisis. The program is also registered as part of the University's KIKAN Education curriculum: upon successfully completing the program, Kyushu University students are eligible to earn two credits. International participants may also transfer the credits to their home institutions upon their own request and formal approval from the institutions.

The CAP program is comprised of three main components: formal lectures delivered by UH-affiliated faculty members; student-led discussion forums based on the lecture topics; and group research projects. All the formal lectures focus on examining diverse issues and historical backgrounds in the Asia-Pacific

*九州大学留学生センター准教授

region from a social scientific perspective. Main topics include, but are not limited to, “Historical Changes in the Japanese American Community in Hawaii,” “Representations of Asians in Hollywood Movies,” “Social Movements among Natives and Immigrants in Hawaiian Society,” “Japanese American Internment Camps in World War II and their Legacy,” among others.

The educational goals of the CAP program are three-fold: First, it aims to help students to gain intensive first-hand experience with engaging in problem-based learning (PBL) and team-based learning (TBL). The students are expected to declare an interest in the common issues of today’s Asia-Pacific region and to develop a better understanding of the background, causes, and current status of these issues through these learning approaches. Second, the program facilitates the students’ direct experience of co-learning with other participants from different socio-cultural and ethnic backgrounds in a diverse learning environment. This way, the students may develop a foundation for their cross-cultural competencies and leadership qualities in an internationally collaborative setting. Finally, but not of less importance, the program provides the students with short-term, intensive overseas experience as a significant step toward their long-term study abroad in the conceivable future, including studying at the University’s partner institutions as exchange students for a semester or longer.

2. Schedule

The following is the overall schedule from the recruitment to program implementation in 2021.

- Application period: April 1 to May 12
- Joint document review with UH: May 13 to May 15
- Joint interview with UH: May 26 to May 28
- Notification for acceptance: June 4
- Pre-program learning: 6th period (6:30 PM to 8:00 PM) every Friday from June 11 to August 6 (held as intensive course during summer semester)
- Program: 10 days from August 10 to August 21, excluding Sunday and Monday

3. Eligibility and screening process

Screening of Japanese students was based on a combination of essays on motivation for application, grade scores, and interview results. In addition, they were also asked to submit official documents proving their English proficiency for reference. International students were similarly asked to submit a motivation essay, grade scores, and proof of language proficiency.

The application period for international students was approximately two months, from April 1 to June 9. As it is shown below, International students began participating in the program in FY2021, but screening was not conducted separately for students from Korea University as they had undergone internal screening. In addition, for a student from the University of the Philippines, the coordinator concluded that their motivation, English ability, and grade scores were sufficient, and thus no screening was conducted.

The eligibility requirements for Japanese students are as follows. First, no specific faculty or department is a criterion—students from all faculties and disciplines are welcome hence eligible to participate. Second, English proficiency must be at least TOEFL ITP Test 460 or equivalent.

Of course, some short-term overseas programs are designed for students to study a specific academic field or discipline and deepen their knowledge in that field. On the other hand, as a preliminary step to deepening knowledge in a particular field, CAP is designed to help students acquire basic skills for group work, minimum skills such as speaking effectively in group discussions, and practical skills for mutual negotiation among students. Furthermore, by recruiting students from all faculties, rather than selecting students from specific faculties, the program aims to help students learn how to think and respond, understand others, and how to cope with others when they encounter opinions that differ from their own, spontaneously.

For English proficiency, the minimum TOEFL score for CAP is 460 as mentioned above. While the minimum TOEFL score required to study at a foreign university is 550 or higher, the 460 required for this program seems relatively low. However, since one of the goals of the program is to motivate and inspire students to study abroad for a long period of time, such as for a degree or a one-year exchange, and in order to get students interested in studying abroad, we believe that it is necessary to open the door to a wide range of students, even those who may not have a high English proficiency.

4. Participants

Table 1 shows the number of participants in FY2021. A total of 33 students participated including 26 Japanese students, six from Korea University, and one from University of Philippines.

In FY2021, the program decided to experimentally open its application to universities outside Japan and then accepted participants from two universities. The Japanese students joined from a variety of faculties ranging from the areas of humanities and social sciences to medicine and engineering.

Table 1 Number of CAP FY2021 participants by faculty and grade (Japanese and international students)

Institution (Japanese/Int'l)	Faculty	Number of students	Grade			
			1 st year	2 nd year	3 rd year	4 th year
Kyushu University	Agriculture	2	1		1	
	Economics	2	2			
	Engineering	1	1			
	Design	1	1			
	Law	2		2		
	Literatures	1	1			
	Medicine	1	1			
	Science	1			1	
	SISI*	14	2	7	4	1
	GSHES**	1	1			
	Total	26	10	9	6	1
Korea University	N/A	6	2	1	1	2
University of Philippines	N/A	1			1	
	Total	7	2	1	2	2
Total		33	12	10	8	3

*The School of Interdisciplinary Science and Innovation

**The Graduate School of Human-Environment Studies (the participant is a first-year master's student)

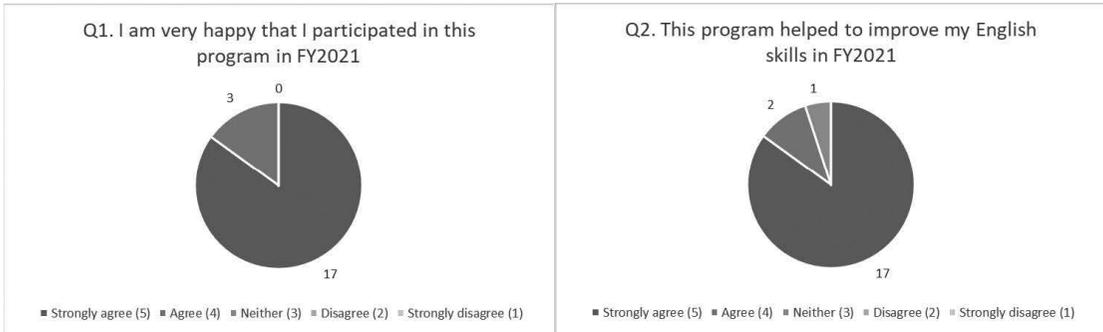
Source: Author

5. Program evaluation

First, I will examine the evaluation of the program as a whole. The survey asked whether they were happy to be in the program or not, and second, whether the program helped them to improve their English skills. The number of responses to these questions from the 2021 program was 20, compared to 21 valid responses for the entire survey. Responses were set as mandatory; thus, it is likely that one respondent was unable to answer for some reason. Students were asked to answer each question on five scales with points in parentheses for each choice: “very much so”, “agree”, “neither agree nor disagree”, “disagree”, and “completely disagree”. As the chart shows, for Q1, 17 in 2021 (more than 85%) of the respondents answered strongly agree, and for Q2, 17 of the respondents answered “strongly agree” in 2021.

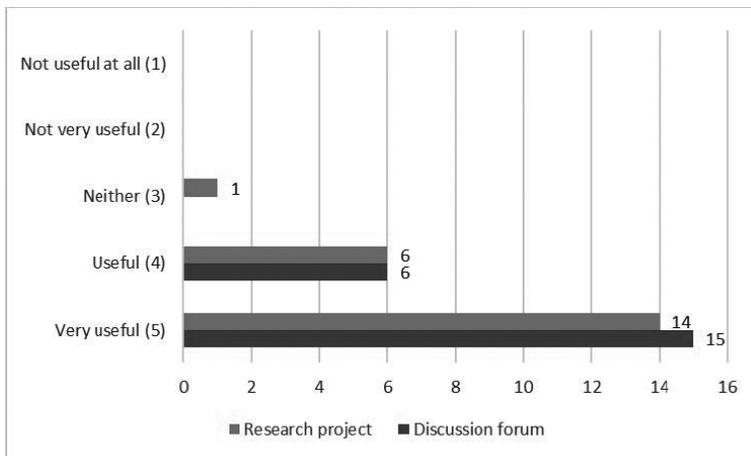
Next, an overview of the evaluation of program elements other than lectures, the discussion forum and research project, will be reviewed. The participants were asked to answer how useful the discussion forum and research project for them. The scale is: “very useful”, “useful”, “neither useful nor not useful”, “not very useful”, and “not useful at all”. In the responses, 15 (71%) said the discussion forum was very useful and 6 (29%) said it was useful. The research project was found to be very useful in 14 cases (67%),

useful in 6 cases (29%), and neither useful nor useless in 1 case. The research projects were also extremely satisfactory in both years, as were the discussion forums.



Source: created by author.

Figure 1 Overall satisfaction on the CAP program and responses related to improvement of English skills in FY 2021



Source: created by author.

Figure 2 Responses related to the usefulness of program elements in FY 2021

To help contextualize these extremely high levels of satisfaction, we will next present some of the comments that were written in the open-ended section. The survey was conducted entirely in English, so respondents were also asked to fill in the open-ended section in English. The original responses are cited:

“From the beginning of class, I was so worried because there are a lot of readings so I was not sure I can participate well or not. But I tried to be well-prepared as much as possible and better preparation helped me gain my confidence. Through taking part in discussion forums and presentation research, I

had opportunities to voice my opinions and learn how to speak in front of class confidently. In addition, it was also a chance for me to listen to other students ideas from different perspectives, which broadened my horizon a lot. And working as a team for Presentation Research, we learned how to collaborate effectively and smoothly and improve our academic skills as well.” (anonymous, 2021)

“These activities can help me have a chance to voice my opinions about topics and discuss with other students with different opinions. Through that I can be more open-minded and broaden my horizon about complicated issues. And when working in a team to research and present, I also learn how to collaborate to have the best results. It is a rewarding experience for me.” (anonymous, 2021)

These statements indicate that both the discussion forum and the research project were highly effective for students in developing discussions in English. The effectiveness of the discussion forum, albeit online rather than face-to-face, could be observed even as the authors was conducting participant observation as the coordinator.

This was clearly demonstrated by the presence of the University of Hawaii discussion leaders who led the discussion forums: six in FY2021, under the guidance of the University of Hawaii faculty member overseeing the forums, served as leaders for each group. All leaders are fourth-year undergraduate or graduate students in the Department of Second Language Studies at the UH, and are conducting research on how non-native or non-native speakers of English acquire English, as well as the unique language acquisition habits of non-native speakers. It was also a good opportunity for the leaders to learn in practice how to facilitate productive discussions with non-native English-speaking students. The leaders gave everyone in the group a chance to speak, and the students, who could no longer keep silent and listen to what others were sharing, were observed struggling to communicate their thoughts in English.

In addition, the online implementation of the program seems to have lowered the bar for Japanese students to speak up in English. According to a Japanese student who participated in the FY 2021 program, they felt nervous in face-to-face discussions because they did not know the correct way to make eye contact or facial expressions, but he was able to speak through the camera of the PC without feeling too nervous. Another student stated that he/she was able to look up unfamiliar words on the Internet quickly, which reduced the number of times he/she could not speak well because they were unsure of a particular word, and were able to actively participate in the discussion.

6. Future prospect

Implementing the program online was a challenging task for the program organizers. I was constantly confronted with the struggle of whether or not a program that did not involve travel could be considered a study abroad program. Compared to study abroad programs where students immerse

themselves in a different culture and society, and experience the local culture and social structure firsthand while overcoming various difficulties, online study abroad programs may have been a “casual” and “easy” way to experience the local environment. As a coordinator of study abroad programs, the authors can't help but wish for the immediate resumption of programs that involve travel to the field.

Furthermore, while Kyushu University has temporarily resumed face-to-face lectures, they were mostly online in the 2020 academic year, and face-to-face lectures have finally resumed in the 2021 academic year at the time of this writing, but significant restrictions are still being imposed. Students, regardless of whether they are freshmen or seniors, are already exhausted by online lectures, and managing their attitude and motivation is an urgent issue.

What the future holds for this infectious disease, which has plunged the world into an unprecedented situation, is completely unpredictable. However, it is worth noting that the inevitable transition of not only higher education, but also education and government to online as a result of the epidemic has opened up new possibilities for study abroad, an intellectual activity that used to be taken for granted. It is likely that in the future, such online study abroad programs will remain as supplementary programs to actual study abroad.

Japan In Today's World (JTW), ASEAN In Today's World (AsTW) & College of Asia Pacific (CAP)

Kyushu University Asia Week 2021 International Student Center Forum

International Education Lessons from the Pandemic and Suggestions for the Future

Masa Higo *

Chisato Nonaka **

Hiroko Ikuta **

Hiroko Kinoshita **

1. Background: Kyushu University Asia Week

Kyushu University International Student Center (ISC, hereafter) carried out an online forum as part of Asia Week for year 2021. First held the previous year, Asia Week is a new initiative of the university; as an annual, two-week event described with the caption “connect with, feel about, and talk about Asia,” it aims to facilitate cross-national academic exchange and networking with specific focus on Asia as a region of the world.¹ A variety of schools, institutes, and theme-based interdisciplinary groups of researcher groups across campus contribute to this campus-wide initiative by arranging activities of their interests and areas of specializations as components of the event program. Formats of those activities include, but are not limited to, conferences, seminars, forums, workshops, and poster exhibitions, among others. Asia Week 2021 ran from October 13 (Wednesday) to 27th (Wednesday), Japan Standard Time. Due to the persistent influence of the global health crisis caused by the spread of novel coronavirus disease (COVID-19), the whole event for year 2021 was conducted in the same way as last year, as a series of online events using remote communication tools such as MS Teams, Zoom, and Webex.

The ISC contributed to Asia Week 2021 in response to a formal invitation from the planning office of this initiative. Four ISC faculty members organized and delivered an online event as a one-time forum

*Professor, Kyushu University International Student Center

**Associate Professor, Kyushu University International Student Center

1 The official homepage of Kyushu University's Asia Week is available at: <https://asiaweek.kyushu-u.ac.jp/en/>

titled “International Education: Lessons from the Pandemic & Suggestions for the Future” (ISC forum, hereafter). This activity report summarizes the purposes and contents, main outcome, and some thoughts in retrospect of the ISC forum.

2. The ISC Forum: A Brief Description

The ISC forum was carried out on October 26 (Tuesday) 2021 from 15:00 to 16:30 Japan Standard Time as a webinar using the enterprise version of Zoom. Staff members of Kyushu University’s International Affairs Division provided administrative support, including the operation of the Zoom program. The medium of communication was English, and no service was provided for simultaneous interpretation due to the unavailability of funding. What follows briefly describes the order of how this forum was conceived, developed into a formal proposal, and publicized to call for attendance.

Roughly from July through September 2021, the following four fulltime faculty members of ISC brainstormed and developed a proposal for the forum: Masa Higo, Ph.D.; Chisato Nonaka, Ph.D.; Hiroko Ikuta, Ph.D.; and Hiroko Kinoshita, Ph.D. First, the theme of the forum was set to focus on the impact of the COVID-19 pandemic on the practice of international education today and in the future. As concrete cases of international education, the members decided to feature the experiences of three short-term study programs that ISC runs annually for international learning, and for which the four ISC faculty members serve as coordinators: *Japan In Today’s World (JTW)*, *ASEAN In Today’s World (AsTW)*, and *the College of Asia Pacific (CAP)*.

JTW is a one-year study program conducted primarily for exchange students from Kyushu University’s overseas partner institutions.² Dr. Higo and Dr. Nonaka are among the faculty coordinators for this program.³ AsTW and CAP are intensive programs lasting for about two weeks each, in which students at Kyushu University together with those of overseas universities participate to experience co-learning in cross-cultural settings. Dr. Ikuta is the coordinator for the former⁴, and Dr. Kinoshita the latter⁵. These programs all run for different lengths of time and at different timing during the academic year; the methods of teaching and learning also considerably vary by program. Nonetheless, in addition to using English as the official medium of instruction, all three study programs share at least two things in common – focusing on society, culture, and history of Asia as a core learning objective, and having been significantly affected by the global health crisis in their operation over the past two years.

To align with the aforementioned founding objective of the whole Asia Week initiative, the ISC forum was proposed to address the following three goals:

2 This group of students refers to those selected and dispatched by universities outside Japan that have formally established university-wide student exchange agreements.

3 For more information about JTW, refer to its official homepage available at: <https://isc.kyushu-u.ac.jp/jtw/>

4 For more information about AsTW, refer to its official homepage available at: <https://isc.kyushu-u.ac.jp/astw/>

5 For more information about CAP, refer to its official homepage available at: <https://isc.kyushu-u.ac.jp/capisc/en/>

- (1) Introduce the three ISC short-term study programs as part of Kyushu University's practice of international education that focuses on Asia.
- (2) Summarize the ways in which the COVID-19 pandemic has to date affected the operation of those programs and students' learning experiences; and
- (3) Discuss based on the coordinators' first-hand experiences and perspectives the prospects and desirable directions of these study programs in the coming, 'post-pandemic' era of international education.

The ISC forum was designed to consist of two main components: formal presentations and spontaneous discussions. The former refers to standard public presentations describing how the pandemic has affected conventional operations – those prior to the emergence of the health crisis – of those study programs. Dr. Nonaka, Dr. Ikuta, and Dr. Kinoshita agreed to each undertake the presentations about the cases of the programs for which they serve as coordinators: JTW, AsTW, and CAP, respectively. The forum's second component aimed to present to the audience live discussions among the presenters about their views and thoughts on the prospects and future directions of international education at higher education institutions at large and their respective programs in particular. The members also decided to invite the audience to join the live discussions; for this purpose, the forum was scheduled to spare the last 15 minutes of the event to encourage the audience to ask questions of and to share directly with the presenters their own experiences or thoughts on international education in our time. Dr. Higo decided to serve as the moderator of the whole forum as well as a discussant for the discussions. All these decisions and plans were put together to create the official proposal of the ISC forum as part of Asia Week 2021, which was then submitted to the planning office on September 24, 2021.

As part of Asia Week 2021, the ISC forum targeted a range of audience groups affiliated with higher education institutions around the world, including students, faculty members, and administrative office staff members who are interested in international education in their own respective capacities. To reach out to those groups of people, the forum organizers – the four ISC faculty members listed above – promoted the event in various ways. Summarized chronologically, first, two materials were developed as key tools for promotion: a flyer and a website. Both materials included a QR code and URL link to an online registration form to attend the event. **Image 1** is a photo image of the official flyer for the forum, which was created in a PDF format. **Image 2** is a digital copy of the first page of the forum website as a sample of the whole website, which was integrated into the program page of the official website for Asia Week 2021.

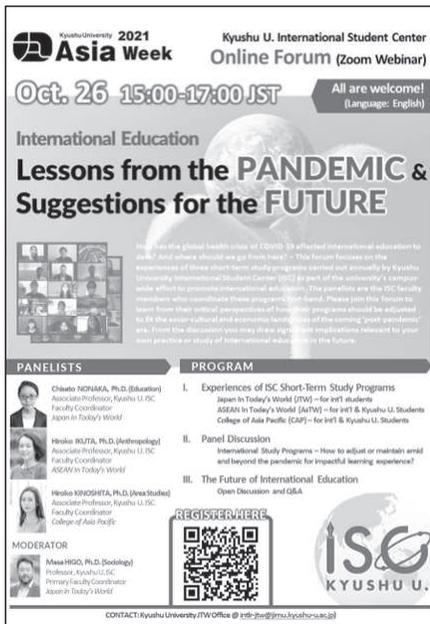


Image 1. Official flyer of the ISC forum

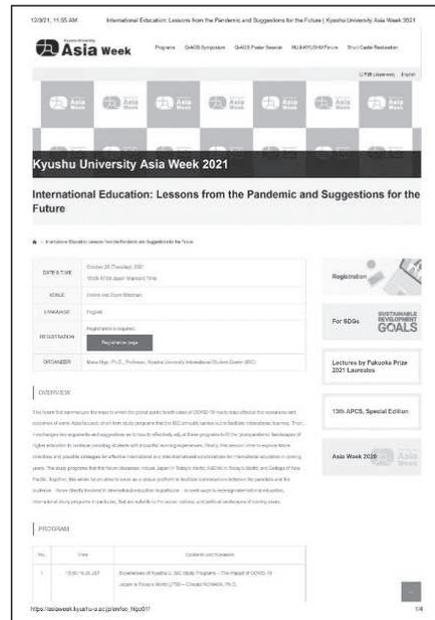


Image 1. First page of the ISC forum webpage

Together with these materials, the ISC forum was first announced at two separate, regular on-campus faculty meetings held in the month of October: the ISC Committee Meeting and ISC Faculty Meeting. In addition to utilizing their personal networks to request circulation of the promotion materials, the forum organizers then sought assistance from Kyushu University's Division of International Affairs, which helped to disseminate the materials to its key institutional partners, both domestic and overseas. The domestic partner institutions included other major national universities across Japan, such as the University of Tokyo and Osaka University. Chinese University of Hong Kong and Bordeaux Montaigne University in France are instances of the overseas partner institutions.

The ISC forum was carried out as planned. The key arguments that emerged out of the spontaneous discussions among the presenters are three-fold and summarized as follows:

- (1) The move to online operations of those study programs, as forced by the pandemic, helped the coordinators realize some advantages – for instance, this new approach seemed to ease many students' nervousness with co-learning in cross-cultural settings.
- (2) Simultaneously, the conventional, onsite operation of their study programs would have provided students with more constructively challenging learning experiences and thus richer learning outcomes.

- (3) While some aspects and activities of international education may continue to benefit from staying online, higher education institutions in the coming years should revisit the value of shifting short-term study programs such as their own back to onsite if and when possible.

3. Outcome: Turnouts and Reactions

Table 1 below presents summary characteristics and breakdowns of those who registered for the ISC forum based on the data drawn from the online registration form.⁶ A total of 143 individuals residing in 16 different countries including Japan, and from various regions of the world, registered to attend the event. These registrants represented 20 different nationalities (**Table 1**). About 97 percent of all registrants (138 out of 143) were affiliated with higher education institutions, and about 63 percent of these (87 out of 138) were members of one of 26 overseas institutions from across the world, as opposed to the domestic counterpart.

Table 1. Summary characteristics and breakdown of pre-ISC forum registerers ($n=143$)

By Country of Residence		By Affiliation	
China	54 (37.8%)	University	
Japan	51 (35.7%)	Domestic	
Indonesia	12 (8.4%)	Kyushu U	44 (30.8%)
Germany	7 (4.9%)	Osaka U	3 (2.1%)
UK	3 (2.1%)	U of Tsukuba	3 (2.1%)
France	2 (1.4%)	U of Tokyo	1 (0.7%)
Hong Kong	2 (1.4%)	Overseas	
Korea	2 (1.4%)	Shan Dong U	50 (34.9%)
Sweden	2 (1.4%)	Gadjah Mada U	7 (4.9%)
India	1 (0.7%)	Technical U of Munich	4 (2.8%)
Laos	1 (0.7%)	Chinese U of Hong Kong	2 (1.4%)
Mexico	1 (0.7%)	Politeknik Pertanian Negeri Pangkajene	2 (1.4%)
Russia	1 (0.7%)	USTC*	2 (1.4%)
Taiwan	1 (0.7%)	Bordeaux Montaigne U	1 (0.7%)
Turkey	1 (0.7%)	Cochin U of Science and Technology	1 (0.7%)
UAE	1 (0.7%)	East China Normal U	1 (0.7%)
Unknown	1 (0.7%)	Heidelberg U	1 (0.7%)
Total	143 (100.0%)	KAIST**	1 (0.7%)
By Nationality		KTH Royal Institute of Technology	1 (0.7%)
Chinese	56 (39.2%)	Middle East Technical U	1 (0.7%)
Japanese	42 (29.4%)	Phelma, Grenoble INP	1 (0.7%)
Indonesian	13 (9.1%)	Pukyung National U	1 (0.7%)
German	7 (4.9%)	RWTH Aachen U	1 (0.7%)
		STIKI***	1 (0.7%)

6 Permission has been obtained through the online registration program from the registrants to publicize their background information as summarized in Table 1, other than their individual names and contact information such as email addresses.

Korean	4 (2.8%)		Stockholm U	1 (0.7%)
Filipino	2 (1.4%)		Taipei Medical U	1 (0.7%)
French	2 (1.4%)		U College London	1 (0.7%)
Italian	2 (1.4%)		U of Guadalajara	1 (0.7%)
Swedish	2 (1.4%)		U of Hohenheim	1 (0.7%)
Tanzanian	2 (1.4%)		U of Leipzig	1 (0.7%)
American	1 (0.7%)		U of Leeds	1 (0.7%)
British	1 (0.7%)		U of Sheffield	1 (0.7%)
Indian	1 (0.7%)		Winchester School Jebel Ali (The)	1 (0.7%)
Irish	1 (0.7%)	Non-University		
Laotian	1 (0.7%)	Domestic		
Mexican	1 (0.7%)		Joyo City Board of Education	1 (0.7%)
Mongolian	1 (0.7%)		SOS Children's Villages Japan	1 (0.7%)
Singaporean	1 (0.7%)	Unknown		
Taiwanese	1 (0.7%)	Total		
Turkish	1 (0.7%)			143 (100.0%)
Total	143 (100.0%)			

* The University of Science and Technology of China

** Korea Advanced Institute of Science and Technology

***Sekolah Tinggi Informatika and Komputer Indonesia

Table 2 below presents the case of attendees of the forum – those who registered for the forum in advance and then actually participated in the webinar. The data were drawn from an automatic recording program of Zoom Enterprise.⁷ The turnout was nearly half of the registrants in number: 69 attendees, who signed in to the webinar at some point during the event. While attendees were the residents of 12 different countries around the world, the majority of them, 38 attendees, were in Japan, accounting for about 55 percent of the entire turnout. In contrast to the case of the registrants, therefore, the ISC forum was attended by more domestic participants than the overseas counterpart – the former represented 58 percent of the total turnout. While the attendees represented 13 different nationalities, the largest single nationality group was Japanese, with 31 attendees, accounting for about 45 percent of all those in attendance. Including both domestic and overseas institutions, Kyushu University was the single institution with which the largest number of attendees (33 attendees out of 69) were affiliated (**Table 2**).

Table 2. Summary characteristics and breakdown of pre-ISC attendees ($n=69$)

By Country of Residence		By Affiliation	
Japan	38 (55.1%)	University	
China	7 (10.1%)	Domestic	
Germany	7 (10.1%)		Kyushu U
Indonesia	4 (5.8%)		Osaka U
France	3 (4.3%)		U of Tsukuba

⁷ Permission has been obtained through the Zoom enterprise program from the attendees to publicize their background information as summarized in Table 2. Their identifiers including individual names and contact information were not gathered in the first place.

Hong Kong	3 (4.3%)	Overseas	
UK	2 (2.9%)	Shan Dong U	6 (8.7%)
Korea	1 (1.5%)	Technical U of Munich	3 (4.3%)
Sweden	1 (1.5%)	Chinese U of Hong Kong	2 (2.9%)
Taiwan	1 (1.5%)	Gadjah Mada U	2 (2.9%)
Turkey	1 (1.5%)	Bordeaux Montaigne U	1 (1.5%)
US	1 (1.5%)	East China Normal U	1 (1.5%)
Total	69 (100.0%)	Heidelberg U	1 (1.5%)
By Nationality		Ludwig Maximilian U	1 (1.5%)
Japanese	31 (44.9%)	Middle East Technical U	1 (1.5%)
Chinese	12 (52.2%)	Phelma, Grenoble INP	1 (1.5%)
German	7 (10.1%)	Pukyung National U	1 (1.5%)
Indonesian	4 (5.8%)	RWTH Aachen U	1 (1.5%)
French	3 (4.3%)	San Jose State U	1 (1.5%)
Korean	3 (4.3%)	STIKI*	1 (1.5%)
American	2 (2.9%)	Stockholm U	1 (1.5%)
Singaporean	2 (2.9%)	Taipei Medical U	1 (1.5%)
Filipino	1 (1.5%)	U College London	1 (1.5%)
Mongolian	1 (1.5%)	U of Hohenheim	1 (1.5%)
Swedish	1 (1.5%)	U of Paris II	1 (1.5%)
Taiwanese	1 (1.5%)	USTC**	1 (1.5%)
Turkish	1 (1.5%)	Non-University	
Total	69 (100.0%)	Domestic	
		Joyo City Board of Education	1 (1.5%)
		SOS Children's Villages Japan	1 (1.5%)
		Unknown	1 (1.5%)
		Total	69 (100.0%)

* Sekolah Tinggi Informatika and Komputer Indonesia

** The University of Science and Technology of China

The ISC forum organizers programmed an online post-event survey into the Zoom enterprise system and implemented it by sending it to the attendees upon completion of the event. **Table 3** presents the breakdown of summary characteristics of the respondents.⁸ A total of 23 attendees responded to the survey, making the response rate about 33 percent. The survey respondents were of 12 different nationalities and resided in eight different countries. As for country of residence and nationality, the largest category of respondents were of Japanese nationality (26 percent) and residing in Japan (43 percent). By gender, the respondents consisted of 13 women and 10 men; the former represented about 57 percent of all survey respondents. By age group, those in their 20s were the largest age cohort ($n=10$), accounting for about 43 percent of all survey respondents. As for occupation or status, 11 respondents were students, accounting for about 48 percent, which substantially outnumbered those who identified themselves as university administrators (or office staff members) ($n=8$), university faculty members ($n=3$), and other ($n=1$).

8 Permission has been obtained through the Zoom enterprise program from the post-forum survey respondents to publicize their background information as summarized in Table 3, other than their individual names and contact information such as email addresses.

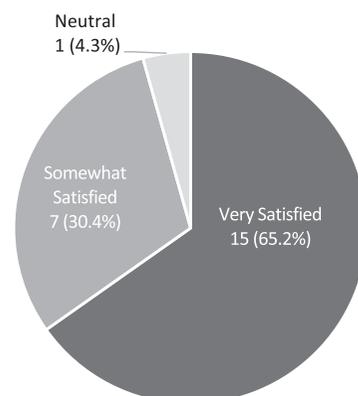
Table 3. Summary characteristics and breakdown of post-forum survey respondents ($n=23$)

By Country of Residence		By Nationality	
Japan	10 (43.5%)	Japanese	6 (26.1%)
Germany	5 (21.7%)	German	5 (21.7%)
Indonesia	3 (13.0%)	Indonesian	2 (8.7%)
China	1 (4.3%)	American	2 (8.7%)
France	1 (4.3%)	China	1 (4.3%)
Sweden	1 (4.3%)	Singaporean	1 (4.3%)
Taiwan	1 (4.3%)	Korean	1 (4.3%)
USA	1 (4.3%)	Taiwanese	1 (4.3%)
Total	23 (100.0%)	Swedish	1 (4.3%)
		Filipino	1 (4.3%)
		French	1 (4.3%)
By Gender		By Nationality	
Female	13 (56.5%)	Indonesia	1 (4.3%)
Male	10 (43.5%)	Total	23 (100.0%)
Total	23 (100.0%)		
By Age Range		By Occupation / Status	
10s	1 (4.3%)	Student	11 (47.8%)
20s	10 (43.5%)	Staff*	8 (34.8%)
30s	4 (17.4%)	Faculty**	3 (13.0%)
40s	5 (21.7%)	Other	1 (4.3%)
50s	2 (8.7%)	Total	23 (100.0%)
Unknown	1 (4.3%)		
Total	23 (100.0%)		

* University administrator/office staff member

**University faculty members

The post-survey results suggest that generally the attendees reacted with positive feedback to the forum. One of the survey questions asked the respondents to what extent they were satisfied with the forum as a whole. This question provided 5-Likert scale answer options consisting of “very satisfied,” “somewhat satisfied,” “neutral,” “somewhat dissatisfied,” and “dissatisfied.” **Figure 1** illustrates the distribution of the answers to this survey question - the response was almost unanimously favorable toward the forum - about 65 percent ($n=15$) of all the survey respondents selected “very satisfied,” and about 31 percent ($n=7$) “somewhat satisfied.” Only one respondent selected “neutral.”



Response rate: 33.3%

Figure 1. Post-forum survey – To what extent are you satisfied with this forum? ($n=23$)

Together, above 95 percent of all respondents reported that they were satisfied, or somewhat so, with the forum.

Respondents were then asked to answer a follow-up, open-ended question immediately after answering the Likert-scale question described above. For this question, respondents were asked to freely explain their reasons for the answers they selected to the previous question. Most respondents explained their satisfaction with the forum by expressing that they found the formal presentations well prepared and informative, and that they also found it rare and thus valuable to have an opportunity to listen to the spontaneous discussions between the presenters – the university faculty members taking the lead for operating their short-term study programs. One respondent, for instance, stated as follows:

I found it very valuable to listening to the challenges each presenter has faced and how they all have adjusted to help student gain meaningful learning experience as much as possible...A rare opportunity to hear the thoughts of university professors involved in such study abroad programs...I am glad presenters clearly understand the value of in-person mobility and seem to look forward to returning to it.

4. Summary and Thoughts in Retrospect

As reported above, Kyushu University International Student Center carried out on October 26, 2021 an online forum as part of the university's Asia Week 2021 program for this year. Based on the number of registrants, this forum interested above 140 individuals residing in a number of countries and affiliated with a range of higher education institutions across the world. Nearly half of those registrants ended up attending the forum. While only a third of the attendees responded to the post-event survey, most of those respondents expressed a high level of satisfaction with and appreciation for what the forum delivered through the presentations and discussion. This was the first time for ISC, using a remote communication tool, to disseminate to the world a forum in which faculty coordinators discuss about their short-term study programs. Arguably, an opportunity to conduct an activity such as the ISC forum might not have been conceived if there were no unprecedented global health crisis such as the COVID-19 pandemic.

Overall, the ISC forum was carried out as smoothly as planned in advance and has earned a positive feedback from the audience. However, this event has also left some agenda items that need to be addressed for its own future reference. The most representative are the following three items:

- (1) The ISC forum might have reached a larger audience and generated a greater turnout if it had targeted a more specific group of people around the world, such as overseas undergraduate

students interested in studying in Japan for a short period of time. As they were presented, the purposes and contents of the forum might have come across as unclear as to who would most benefit from attending it.

- (2) A substantially higher response rate should have been achieved for the post-forum survey. A greater response rate would have helped the ISC forum gather more generalizable and reliable data about what the attendees thought about the forum and how to improve its content and structure in the future. This was highly desirable especially if ISC is invited to contribute to next year's Asia Week.
- (3) The ISC forum would have been more valuable if it had included presentations and discussion specifically about language learning. Japanese language learning is arguably one of the greatest interests for those overseas students participating in short-term study programs such as those featured in the forum. Future audiences would find another ISC forum more valuable if the forum includes a section in which ISC-affiliated language specialists share their views and thoughts about how to deliver effective language instruction in the coming 'post-pandemic' era of international education.

2020年度 九州大学留学生センター・留学生指導部門報告 (カウンセリング関係)

Report on International Student's Advising and Counseling Division (2020)

高 松 里*

1. はじめに

九州大学留学生センター・留学生指導部門は、外国人留学生および留学生に関わる教職員・学生、さらには地域の人々を対象として、様々な活動を行っている。本報告は、留学生指導部門の活動の中で、カウンセリングに関連したものを掲載した。

活動としては、①相談活動、②教育活動、③留学生への支援システムの形成、④研究・研修活動、⑤学内協力講座・委員会、⑥社会連携、である。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19と表記）の影響で、活動が著しく制限された。相談室は一時期閉鎖され、その後は主にオンラインに移行して相談活動を維持した。授業（多文化クラス）は、学部・大学院ともに開講できなかった。学内外の国際交流団体はほとんど活動ができなかった。

そのような状況の中での、2020年度の活動を報告する。

2. 相談活動

(1) 相談室

相談活動の中心は伊都キャンパスであるが、必要に応じて、筑紫キャンパスや大橋キャンパスでも相談を受けることになっている。上述したように COVID-19のために、2020年4月7日で対面相談は停止し、一時的にメール相談のみとなった。その後、電話相談やオンライン会議システムでの相談が可能となった。

相談を担当している高松（筆者）は臨床心理士・公認心理師であり、心理的な問題が専門であるが、留学生に関することであれば、日常生活・勉強・進路など様々な相談を受ける。また、緊急事態（急性の精神病、自殺や自殺未遂、事件・事故）には、対面相談を含めて他職種とともにチームを組んで対応する。

また、高松は九州大学キャンパスライフ・健康支援センター（CHC）においても、カウンセラー

*九州大学留学生センター准教授

表1 相談分類および件数

留学生からの相談		2018年度	2019年度	2020年度
修 学	入学・進学関係	0	3	0
	教育制度・内容	10	0	0
	進路相談	16	2	3
	研究室の人間関係	27	31	43
生 活	法律的問題	3	1	0
	経済的問題	0	0	0
	宗教的問題	0	0	0
	宿舎問題【国際交流会館】	0	0	0
	宿舎問題（その他）	0	0	0
	生活問題	0	0	0
	事故病気等	0	0	5
	渡日・滞日許可	0	0	0
	人間関係	2	10	4
	子弟の教育問題	0	1	0
	帰国準備	0	0	0
そ の 他	メンタルヘルス	105	79	117
	国保・一般保険	0	0	0
	各留学生会	3	10	12
	その他分類不可	0	7	0
	小 計	166	144	184

その他の外国人からの相談

入進学	1	5	1
その他	0	12	0
小 計	1	17	1

日本人からの相談

学 生	留学生とのトラブル	0	0	0
	海外留学情報	0	0	0
	国際親善会関係	0	3	0
	その他	34	27	0
教職員	入進学	0	0	0
	奨学金	0	0	0
	日本語関係	8	0	0
	コンサルテーション	57	101	150
外 部	その他	0	0	20
	情報・コメント	3	4	14
	留学生との交流	0	2	4
	入進学	0	0	0
	苦情	0	0	0
	その他	0	2	3
小 計	102	139	191	
総 計	269	300	376	

ものが、友人を作ることもできずに、相談室に来たケースも多かった。

また、教職員に対するコンサルテーションの数が増えている。精神的な不安定により緊急支援（緊急入院）が複数件あった。

（留学生担当）として兼務している。CHCには、非常勤の留学生担当カウンセラーがおり、英語担当4名、中国語担当2名が勤務している。高松はそのコーディネイト役を担い、毎日非常勤カウンセラーと電話連絡を取っている。すべての相談ケースに目を通した上で、適切なカウンセラーに接続し、必要に応じてその後のスーパーバイズを行っている。

CHCの相談活動も同様に一時期中断したが、その後ホームページの目立つ場所に「Web相談受付フォーム」を置き、ここを通して相談依頼が入るようなシステムに移行した（日本語、英語、中国語）。非常勤カウンセラーには、留学課が携帯電話を貸与し、それを用いて電話相談が可能になった。また、Teamsなどを用いて適宜オンライン相談を行った。（詳細については、CHC発行の「九州大学学生相談紀要・報告書」を参照のこと）。

（2）来談状況

2020年度の相談室における相談件数は表1の通りである。参考までに2018年度と2019年度の数値も併記した。

相談全体を見ると、376件となり、例年よりもむしろ増えている。これはCOVID-19の影響により、およそ1ヶ月間相談活動が止まった上での数字である。留学生の人間関係が希薄化し、メンタルヘルスに悪影響を及ぼした可能性が高い。従来は友人などの相談していたの

①「留学生からの相談」は184件であった

例年と同じく、最も多いのが「メンタルヘルス（117件）」であった。高松が心理カウンセラーであることを考えると当然である。不安、不眠、鬱、発達障害に関する相談が多かった。

また、緊急入院を要する事案もあり、学内外の医療機関と連絡を取り、コンサルテーションを行った。緊急入院に際しては、「医療保護入院」（強制入院の一形態）のために、様々な工夫が必要となった。Zoomを用いて海外にいる保護者と連絡を取り、医師や指導教員、事務職員やカウンセラー、通訳などが全員顔を揃えることで、意思疎通が可能になり、入院同意も取りやすいことがわかった。しかし、入院先が決まるまでに数日かかるケースがあり、この間の本人の保護をどうするかが課題となった。

次いで「研究室の人間関係（43件）」であった。文化的背景や言語的な問題によって、指導教員や同僚の学生との関係が難しい。COVID-19の影響で顔を合わせる機会が減ったことも影響している。

「その他」の「各留学生会（10件）」は、主にイスラムの礼拝場所やイベント会場に関する相談である。COVID-19で金曜礼拝が中止となり、その後、再開を試みたが、感染拡大により、2020年度は実施できなかった。

②「その他の外国人からの相談」は1件であった

例年、九州大学の大学院に入学したいという相談が多かったが、COVID-19によりそもそも入国できない学生が多く、相談はほとんどなかった。

③「日本人からの相談」は、191件であった

最も多いのが「教職員」に対する「コンサルテーション（150件）」であり、例年よりもかなり多い。コンサルテーションとは、教職員とカウンセラーとが共同して、留学生の問題の解決や軽減を図ろうとするものである。緊急入院に際しては、指導教員・保護者・事務・医療機関など様々な人たちが関わる。その調整役をするのもカウンセラーの役割である。

外部からの相談では、「情報・コメント（14件）」「留学生との交流（4件）」などがあった。COVID-19下においても、地域交流を再開したいという要望があった。

3. 教育活動

（1）オリエンテーション

①新入生オリエンテーション

例年、留学生課が主催して、新入留学生が入学してくる直前の9月と3月に「サポートチームオリエンテーション」を実施し、入学後の4月と10月に、「新入留学生オリエンテーション」が実施していた。指導部門の教員はこれらのオリエンテーションに関与していた。これもCOVID-19の影響で入学者数が減り、十分に実施できていない。

また、2021年3月に、「留学生と友達になりたい日本人学生のための留学生超入門2020年度版」を例年通り発行し配布した。

②キャンパスライフ・健康支援センター関連オリエンテーション

- 例年「他大学出身大学院生のためのオリエンテーション」（各キャンパス）およびフォローアップ企画（懇親会）が実施されていたが、COVID-19のために中止となった。

（2）授業

2020年度は以下のような授業を開講する予定であったが、COVID-19のために開講できなかった。

①学部基幹教育フロンティア科目「日本事情」（前期セメスター、水曜日4限、担当教員は高松里およびキャンパスライフ・健康支援センターの船津文香）

例年は留学生60数名、日本人学生60数名（留学生数に合わせて受講生制限をかけている）で開講されてきた多文化クラスである。

②大学院基幹教育「異文化理解の心理学」（後期セメスター、金曜日5限、担当教員は高松里およびキャンパスライフ・健康支援センターの小田真二）

例年、留学生と日本人学生を合わせて20数名で実施されてきたものである。

（3）その他

- 2月26日（金）：留学生入試試験監督

4. 留学生に対する支援システムの形成

（1）サポートチームおよびチューターへの支援

例年、学部留学生（新入生）を支援するサポートチームのメンバー選考および評価を行ってきたが、今年度はなかった。

（2）初期適応支援

学部留学生に対しては、入学直後に「履修説明会」を行ってきたが、2020年度は実施できなかった。授業「日本事情」も実施できなかったため、学部新入生と顔を会わす機会がなかった。大学院基幹教育「異文化理解の心理学」も開講できず、新入大学院生との交流の機会もなかった。

（3）学生団体に対する顧問としての指導・助言

留学生指導部門の教員は以下のような留学生の団体や、学生サークルの顧問となっている。

①九州大学留学生会（KUFSA=Kyushu University Foreign Student Association）

九大に所属する全留学生を代表する会である。例年、4月に「スポンサーミーティング」が行われ、バスハイク、スポーツ大会、年末の国際親善パーティなどを実施していたが、2020年度は活動ができなかった。

②九州大学ムスリム学生会（KUMSA=Kyusyu University Muslim Student Association）

ムスリム学生会は、九大に所属するイスラム教留学生（約350人）の団体である。

例年、イスラムウィーク（パネル展示、イスラム衣装の紹介、アラビア書道、映画、講演、お菓子、各国の料理提供）およびフード・フェスティバルを実施していたが、今年度は開催できなかった。また、ラマダン（断食月）に関連したイフタルパーティも実施できなかった。

長年の懸案となっていた、集団礼拝（金曜礼拝）場所の確保については、イーストゾーンの多目的室を2020年度から使えるようになっていた。しかし、2020年3月20日以降の集団礼拝は新型コロナウイルス感染防止のため大学が自粛を要請した。集団礼拝は結局年度内は行われなかった。2020年11月に再度イーストゾーンの見学を行い、集団礼拝の再開に向けて検討を行ったが、COVID-19拡大のため今回も見送りとなった。

③九州大学国際親善会（KUIFA=Kyushu University International Friendship Association）

毎年の活動としては、5月から行われるシンガポール大学との交換プログラムの「Inter Link FUKUOKA」、毎週水曜日に「全学コーヒアワー」（センターゾーン）、九大祭に出店し国際交流をアピールしていた。これらは COVID-19の影響で活動停止となった。

（4）ボランティア団体への助言・指導

「九州大学留学生サポートネットワーク〈そら〉」の活動への助言

〈そら〉は、社会人を中心としたボランティア団体である。主な活動としては、新入留学生を対象とした4月の「博多街歩き」、10月の市内ツアー、井尻国際交流会館における「日本語交流」（週一回）、伊都協奏館での文化イベント（「七夕イベント」等）企画などをしてきた。これも COVID-19の影響で活動停止となった。

5. 研究・研修活動

（1）著書・論文・報告

【著書】

高松里（2020）. 改訂増補セルフヘルプ・グループとサポート・グループ実施ガイド. 金剛出版.

吉良安之・高松里（編著）（2021）. 学生相談の広がりや深まり. 花書院.

【論文】

高松里（2020）. 時代とエンカウンター・グループ、そして変わらぬもの——人間関係研究会第二世代として——. 人間関係研究会監修「エンカウンター・グループの新展開、出会いの書」, 10-17.

高松里（2020）. エンカウンター・グループは多様で自由だ——「スロー・エンカウンター・グループ in 沖縄」のこと. 人間関係研究会監修「エンカウンター・グループの新展開、出会いの書」, 62-63.

法眼裕子・水野行範・大下智子・高松里（2020）. さまざまなグループのかたち. 人間関係研究会監修「エンカウンター・グループの新展開、学びの書」, 30-31.

高松里（2020）. エンカウンター・グループの日常的展開. 人間関係研究会監修「エンカウンター・グループの新展開、学びの書」, 32-35.

高松里（2020）. 時代の変化とエンカウンター・グループ、そして変わらぬもの——人間関係研究会第

二世代として——. 人間性心理学研究, 38 (1), 7-13.

高松里 (2021). 留学生と日本人学生との相互交流を促す授業の展開——学部および大学院における「多文化クラス」. 吉良安之・高松里 (編著)「学生相談の広がり」と深まり」(花書院), 75-86.

船津文香・福盛英明・高松里・松下智子・小田真二・吉良安之 (2021). 九州大学キャンパスライフ・健康支援センター学生相談室における COVID-19への対応. 九州大学学生相談紀要・報告書, 第7号, 11-35.

高松里 (2021). 新型コロナ経験を言語化する. 九州大学学生相談紀要・報告書, 第7号, 39-40.

板東充彦・高松里 (2021). 「普通、へのとらわれから自由になったひきこもり者の一事例——三者往復インタビュー法による調査——. 跡見学園女子大学付属心理教育相談所紀要, 17, 21-33.

【その他】

高松里 (編) (2021). 座談会：学生相談の魅力. 吉良安之・高松里 (編著)「学生相談の広がり」と深まり」(花書院), 153-191.

高松里 (2021). 吉良先生のご退職に寄せて. 九州大学学生相談紀要・報告書, 第7号, 82-83.

高松里 (2021). 留学生のことをもっと知りたい日本人学生・教職員のための留学生超入門2021年度版. 九州大学留学生センター.

(2) 学会発表

土井晶子・高松里・井内かおる・本山智敬 (2020). 「海外研究生活」の意味は「語り」によりどう生成されるか：モノログと2種類のダイアログの比較. 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 63.

(3) 研究活動

【2020年】

- 5月10日 (日)：「経験の言語化プロジェクト」(オンライン)
- 5月16日 (土)～18日 (月)：日本学生相談学会オンライン開催 (主催校)
- 9月4日 (金)～6日 (日)：日本人間性心理学会参加 (オンライン)。ポスター発表および座長を担当。
- 10月24日 (土)：臨床心理士会主催「被害者支援研修会」を受講 (オンライン)
- 12月12日 (土)：「スロー・エンカウンター・グループ in 沖縄」スタッフミーティング
- 12月26日 (土) 27日 (日)：エンカウンター・グループ・プロジェクト (九大ゲストハウス)

【2021年】

- 2月20日 (土)：日本臨床心理士会主催「第22回被害者支援研修会」参加 (オンライン)
- 2月21日 (日)：人間関係研究会主催「オンライングループ研修会」参加 (オンライン)
- 3月6日 (土)：学生相談学会主催学生相談セミナー「新型コロナウイルス影響下での学生相談」参加 (オンライン)

※人間性心理学会2021年大会準備委員会 (委員として参加) が不定期に開催された。

（4）学会誌査読

- 「人間性心理学研究」査読1件
- 「心理臨床学研究」査読1件

（5）日本学生相談学会2020年大会準備委員会

- 準備委員会出席
- 大会運営

（6）日本人間性心理学会2021年大会準備委員会

- 準備委員会出席

6. 学内協力講座・委員会・その他

（1）人間環境学府関連

- 人間環境学府附属総合臨床心理センター研究員

（2）キャンパスライフ・健康支援センター関連（大部分がオンライン）

- センター委員会（月1回）
- 学生相談カウンセリング部門会議（週1回）
- 事例検討会（月1回）
- 相談担当実務者ミーティング（月1回）
- 非常勤カウンセラーミーティング（年2回）
- 学生相談セミナー（年1回）
- 学生相談室会議（年2回）
- 学生相談地区別連絡会議（年5回、5キャンパス）
- 常勤カウンセラー研修会（年1回）
- 研究推進会議（月1回）
- FD & SD（不定期）
- 7月22日（水）：難病を持つ学生ミーティング実施（オンライン）

7. 社会連携

【2020年】

- 8月3日（月）：九州大学学術研究都市推進機構（OPACK）による「コロナ禍における対応」についての調査に回答。
- 10月22日（木）：難病相談サポーター養成講座フォローアップにて講演「話を聴く：何を聴くか、

どう聴くか」(福岡県難病相談支援センター主催)

- 10月29日(木)および11月5日(木):OPACK(九州大学学術研究都市推進機構)との打ち合わせ(交流会等)
- 11月25日(水)に福岡舞鶴高校にて、「留学生のための糸島地図」作成会議実施

【2021年】

- 1月27日(水):OPACK(九州大学学術研究都市推進機構)事業「九大学研都市・外国人にも住みやすい環境整備推進会議」出席。
- 3月19日(金):OPACK(九州大学学術研究都市推進機構)事業として、福岡舞鶴高校にて、「留学生のための糸島地図」披露
- 1月25日(月):学生相談研究会議にてシンポジスト「学生支援の多様な現場としての留学生相談」(オンライン)
- 3月17日(水):甲南大学FD講師「大学キャンパスにおける異文化理解促進について」(神戸)

8. おわりに

以上のように、COVID-19のために、様々な支援システムが機能しなくなった。2020年度はそれに代わるものをどう作っていくかの悪戦苦闘の日々であった。

留学には、もともと「文化摩擦とその解消(理解)」が想定されている。異文化状況においては、文化的背景が違うために、意思が伝わらず誤解が生まれ、偏見が露わになる。それは留学に織り込み済みのことである。それに引き続きそこからどう相互理解を促進できるかが重要であった。ところが、COVID-19のために、後半の「解消(理解)」の部分がほとんど機能しなくなった。

今後は、十分な感染対策をした上で、対面・オンラインの両方の良さを生かした、交流促進が必要となる。

留学生相談については、オンラインに移行したことで意外なメリットも生まれた。一つは、キャンパス間のサービス格差がなくなったことである。九州大学には、伊都キャンパスの他、病院キャンパス、大橋キャンパス、筑紫キャンパス、その他の遠隔キャンパスが存在している。従来は、緊急事態を除き、伊都キャンパスと病院キャンパスまで留学生が来る必要があった。それがオンライン相談により、どこからでも相談が可能となった。国内のみならず、海外にいて来日できない九州大学の留学生に対しても、オンライン相談が可能になったのは、大きな展開であった。

また、相談が中断することが少なくなった。従来の中断理由としては、体調や気分の悪さから、相談室まで行くことを躊躇することがきっかけとなる場合があった。その点、オンラインならどこからでも接続できる。ただし、自宅では家人がいるために話ができない、という問題も生じた。

新しい事態には、新しい方法や、新しい考え方が必要になるだろう。今後も、柔軟に支援体制を整えていくことが重要である。

令和3年度スーパーグローバル大学創成支援事業 学部生・大学院生共通基幹教育科目「世界が仕事場Ⅰ&Ⅱ」

Super Global University Initiative Lecture Series “Work in the World”

生 田 博 子*

1. はじめに

スーパーグローバル大学創成支援事業とは、国の政策として高等教育の国際競争力を向上させ、グローバル人材の育成を図るため、世界トップレベルの大学との交流・連携を実現、加速することを目標として、大学内の体制強化や国際化を進める大学を重点的に支援する制度である。トップ型大学13校（世界大学ランキングトップ100を目指す力のある、世界レベルの教育研究を行うトップ大学を対象）とグローバル化牽引型大学24校（これまでの実績を基に更に先導的試行に挑戦し、我が国の社会のグローバル化を牽引する大学を対象）が選拔され、本学はトップ型に選ばれた。本章では本学におけるスーパーグローバル大学創成支援事業の一環として開講されている「学部生・大学院生共通基幹教育科目・世界が仕事場Ⅰ&Ⅱ」について報告する。

2. 「世界が仕事場Ⅰ&Ⅱ」

2. 1. 目的

「世界が仕事場」は、九州大学留学生センターにおけるスーパーグローバル大学創成支援事業の一環として、グローバル人材とは何かを探求する日本人学生を対象に開講された授業である。一般に大学が提供する留学支援は、語学の授業、留学プログラムや奨学金制度の充実、留学カウンセリングなどが挙げられるが、学生の海外留学や海外でのキャリアへの興味を引き出し、涵養することを目的にしたカリキュラムの例は少ない。近年、日本人学生の海外留学の減少が懸念されており、留学目的や意識・意欲の変化などの理由が挙げられている。九州大学も例外でなく、スーパーグローバル大学調書では日本人留学生派遣促進に関する取り組みを提唱するも、留学希望者が増えないことへの懸念から、学生の自主性、広報活動だけに頼らず新たな取り組みが求められていた。本コースは、そのような状況を打開すべく、基幹科目として全学の学部生、大学院生、留学生を対象に企画したものである。

この授業では、単に短期留学や海外での研究経験があるというだけでなく、海外の大学や大学院で学位を取得し、世界の第一線で活躍している日本人（国連職員、研究者、NPO代表、起業家、ジャーナリストなど）が、それぞれの仕事や生き様を語り、異文化や海外体験を含む、幅広い体験の意義や

*九州大学留学生センター准教授

意味を考え、グローバル社会での生き方のヒントを得ることを目的としている。学生たちには、海外で活躍する人々も、色々な事に悩み、失敗を重ね、試行錯誤しながら、国際社会の中でキャリアを築き人生を歩んできたということを知り、生き方の多様性を学ぶことを期待している。

この授業は2016年後期に始まり、6年目を迎える今年、累計で約1900名の学生が履修している。

2. 2. 実践

本コースは①講師による講義と質疑応答、②「問いとコメント」、③グループディスカッションと発表、が3本の柱となっている。秋学期と冬学期に開講し、全16回の講義はオリエンテーション1回、外部招聘講師10名と本学教員2名による講義12回、グループディスカッション3回から構成される(資料1)。受講生は、毎回の授業で、講義に関する短いレポートの提出、ディスカッションへの積極的な参加が求められている。今年度は、コロナ禍での対面講義にもかかわらず、秋学期の履修者数は学部生が209名、大学院生が30名の239名、冬学期は学部生が221名、大学院生が30名の251名で、履修登録者数は年を追うごとに増加している。また聴講生が多く、本学教職員も積極的に聴講している。

2. 3. 成果

本学の大学間交換留学申請者の多くは、本授業の受講生であり、学生や教職員から地球市民、グローバル人材を考える上で、大変有意義な講義であるとのフィードバックを頂いている。学外からの参加や見学などの依頼等も多い。

3. まとめ

本授業は、九州大学に在籍する日本人学生や留学生に、国際社会の現代における人生の選択肢、個々がグローバル人材として要素の探求などを狙いとしている。グローバル人材の育成や大学のグローバル化の達成にはさまざまなアプローチがあるが、学生の意識を変えていくことも大学の国際化に大きく貢献する。

(資料1)

スーパーグローバル大学創成支援事業
令和3年度秋冬学期・後期 学部生・大学院生共通基幹教育科目
「世界が仕事場 I & II」

— 君は、世界で活躍する先輩にどんな夢を抱いたのか聞いたことがあるか? —

本コースでは、多様な分野の第一線で活躍する講師が、人生やキャリアについて語る。異文化や海外体験を含む幅広い体験の意義や意味を考え、グローバル化の進む現代社会での生き方のヒントを得よう！授業は、アクティブラーニングのもとに①講師による講義と質疑応答、②「問いとコメント」、③グループディスカッション、を3本の柱とする。詳しくは、後期シラバス参照のこと。

日時：水曜日4限（14：50-16：20）

対象：学部生・大学院生・留学生

単位：全16回2単位（学部生—I 秋学期・II 冬学期、各1単位ずつ；大学院生—後期2単位）

問い合わせ：留学生センター准教授・生田博子 Email: ikuta.hiroko.953@m.kyushu-u.ac.jp

(注) 10/6、12/1、12/8、2/9は通常授業。



10月13日 「日本・台湾・中国へテレビ制作現場の経験を通して」

吉松 孝（番組制作プロデューサー、野球実況アナウンサー）

早稲田大学卒業

日本の放送業界に在籍した後、台湾に渡り番組制作を続け、中国大陸でも数都市（北京、杭州、長沙、大連等）で番組出演を行うなど制作現場に携わっています。中華圏や日本のテレビ業界の舞台裏について体験と比較を交えながらお話しします。



10月20日 「多様性の中で生きる」

山内 肇（医師・オーストラリア在住）

琉球大学医学部卒業 前職：南極観測隊（医療担当）他

沖縄で生まれ、南極で越冬し、その後オーストラリアに移住。10年のブランクを経て医師に戻るも、異なる言葉・文化・社会システム、そして多様な人々の中で働く大変さと面白さを経験しています。その一端を皆さんと共有できればと思います。



11月10日 「目の前のいのちのためにできること：卵巣がん患者の挑戦」

片木 美穂（卵巣がん体験者の会スマイリー代表）

歴任：（厚生労働省）偽造医薬品・指定薬物対策推進会議委員他

いのちに関わる病気になったとき、その治療薬が海外では承認されて使えるのに日本では使えなかったらどうしますか？壁にぶつかったとき大切なことを考える時間にしたいと思います。



11月17日 「デジタルマーケティングという仕事を20年やって思うこと」

伊東 周晃（（株）JADE 代表取締役）

京都大学卒業 前職：（株）ぐるなび他

私の大学生時代に「デジタルマーケティング」という職種は存在しなかったのですが、縁あって約20年の間、その職種で仕事をしてきました。ネットサービスの進化や今後の見通しを語りながら、皆さんの将来の人生の選択に役立つお話ができればと思います。



11月24日 「地図を毎日眺めています」

木田 新一郎 (九州大学准教授・海洋物理)

東京大学 B.S. マサチューセッツ工科大学 M.S. Ph.D. 前職：海洋研究開発機構(JAMSTEC)他

私は海の研究者ですが、ほぼ毎日のように地図を眺めています。地球科学の研究者は地球が研究対象だけで世界を相手に仕事をしている、というわけではありません。留学体験などを交えながら研究者の世界ではどう地球を科学しているのか、お話ししたいと思います。



12月8日 「21世紀の北極圏：気候変動、開発、伝統の中で」

生田 博子 (九州大学准教授・人類学)

アラスカ大学 B.A. M.A. アバディーン大学 Ph.D. 前職：米国アラスカ州政府野生動物管理局他

20代半ば、東京の金融機関で働いていた私は、北極圏に行きたくて退職。アラスカで学生時代を送り、米国政府の研究者として約20年間生活した。先住民の狩猟生活、グローバル化の進む現代社会における持続可能な社会、海外でのキャリアなど、共に考えよう。



12月15日 「『事件』から世界を見る」

永田 工 (朝日新聞記者)

一橋大学卒業

私は事件報道をメインにしつつ、紙面以外でニュースを伝えるデジタル発信に携わってきました。福岡の暴力団報道や現在のサイバーセキュリティなど、報道を通じ、日本と世界の関わり、また記者という仕事の魅力についてお伝えします。



12月22日 「VUCA 社会で生き・生かされるパラレルキャリアのすすめ」

佐藤 真久 (東京都市大学教授・環境学)

筑波大学 B.S. M.A. サルフォード大学 Ph.D. 前職：地球環境戦略研究機関(IGES)他

日本での高校進学を辞め、単身での英国留学を通して、世界の大きな転換期(東西冷戦の終焉、経済のグローバル化)を体感した。自身の変容に挑むコツとアイデアを共有しながら、これからの生き方、あり方について議論を深めたい。



1月12日 「冒険の人生は起業から始まった～起業から倒産、そして今」

村山 由香里 (女性活躍コンサルタント)

九州大学卒業 前職：(株)アヴァンティ代表取締役他

起業のきっかけは40年ほど前の職場でのお茶くみ体験。女性が置かれた立場は、世界の女性に共通する問題だった。起業して25年4ヶ月で倒産。女性への思い、社員への思い、そして倒産とはどういうことなのか、全てを赤裸々に語ります。



1月19日 「私たちが世界に貢献できることは何だろうか？」

轟木 亮太 (大分大学医学部学生)

九州大学卒業 歴任：FIWC九州委員会代表他

私は5年前「世界が仕事場」の受講生でした。その後ネパールの復興支援キャンプなどを経て医学部へ編入学。この5年間で何を考え、どのように行動へ移してきたかを話します。私たちが世界にどう貢献できるかを一緒に考えませんか。



1月26日 「違う世界が見えている人たちが共に生きる」

伊勢田 哲治 (京都大学准教授・哲学)

京都大学 B.A. M.A. メリーランド大学 Ph.D. 前職：ピッツバーグ大学他

福岡の高校から京都の大学へ進み、米国へ留学。住む場所を変えるたびに、背景の違う人達には世界が違って見えていると感じた。違った世界を見ている者同士がどうやって一緒に生きていけるのかというのはわたしの研究テーマです。



2月2日 「円満退社をしたくて渡仏の道を選んで渡ったフランスでの生活」

村井 浩二 (なにわフレンチびざん オーナーシェフ)

前職：(仏)ラ・フェルム・サン・シモン他

どんな料理でも作らせてもらえれば幸せだった社員食堂の18歳。厳しい修行時代から逃れる様に渡仏を決意した25歳。パリの星付きレストランで働いた26歳。現在のオーナーシェフの立場に至るまでを料理を背景に話します。

官民協働海外留学支援制度 「トビタテ!留学JAPAN 日本代表プログラム」

“Tobitate! (Leap for Tomorrow) Study Abroad Initiative”

生 田 博 子*

1. 「トビタテ!留学JAPAN」日本代表プログラムとは?

1-1 概要:

官民協働海外留学支援制度～トビタテ!留学JAPAN 日本代表プログラム～(以下、トビタテ)は、文部科学省企画・運営による、民間企業からの支援を活用した留学促進のためのプログラムである。日本国籍もしくは永住権を有し国内の高等教育機関に在籍し、産業界を中心に社会全体に貢献・還元する意欲のある学生の留学を主な支援対象とする。2014年度から開始され、年2回500名ずつの募集で1000名、2018年度より400名ずつの募集で800名の留学支援を計画している。2020年春、コロナ禍により、13期が1次審査結果公表前に採用中止となった。なお、13期の募集を以てトビタテは終了するという情報があったが、2020年11月末、第14期の追加募集が公示された。

1-2 目的:

過去約10年間における日本人海外留学生数の継続的な減少をうけて、今後海外留学経験者数を倍増させる為の取り組みの一環として企画された。「日本再興戦略～JAPAN is BACK」(2013年6月14日閣議決定)で掲げられた目標である、東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される2020年までに、大学生の海外留学12万人(現状6万人)、高校生の海外留学6万人(現状3万人)への倍増をトビタテの公式目標としている。トビタテの支援による海外留学を経験した学生は、将来的な社会貢献の一環として、支援企業と共にグローバル人材コミュニティを形成し「産業界を中心に社会で求められる人材」または「世界で、又は世界を視野に入れて活躍できる人材」へと育成される。また、帰国後は海外体験の魅力を伝える活動を通して、日本全体の留学機運を高めることに貢献することが期待されている。

1-3 特徴:

以下の4つのコースが設けられている:

- 1)「理系、複合・融合系人材コース」(対象:理系分野で留学する学生)

*九州大学留学生センター准教授

- 2) 「新興国コース」(対象：新興国へ留学する学生)
- 3) 「世界トップレベル大学等コース」(対象：世界トップランキング上位大学に留学する学生)
- 4) 「多様性人材コース」(対象：スポーツ、芸術、政治など様々な分野において留学する学生)

- この他、地方の高等教育機関と民間企業の連携により海外留学希望学生を募る「地域人材コース」が設けられている。
- 支援期間は最短28日から最長2年間の海外留学。
- 海外の大学等で講義受講などの学修活動をするのみならず、インターンシップやボランティア活動などの実践的な活動を盛り込んだ留学計画を募集している。
- 2020年度の報告書によると、多様な分野でグローバル・ビジネスを展開する企業249社および300名を超える個人が119.9億円の資金を提供している。
- 選考は書面審査（一次選考）と面接審査（二次選考・最終選考）の2段階から成る。

2. 九州大学の実績と支援体制

最終審査結果が出ている第14期までに、本学からの応募者数は468名、一次審査合格304名、最終審査合格194名（合格率41%）で、全国第5位の合格実績を誇る。1期から14期までの部局別申請者数を見ると、学部生・大学院併せて、工学部と芸術工学研究院のそれぞれ79名、農学部40名と続く（資料1）。

九州大学の国際戦略の一つとして、海外留学派遣人数を増やすというのがあり、その中でもトビタテは、総長を始め執行部も大変注目し、留学生センター教員1名、留学生課職員6名の7人体制で全学トビタテ支援をしている。応募者数そのものの伸び悩みを改善するため、7期までは全学スタッフのみが学生への周知やサポートに努めていたが、その後、留学者数・トビタテ応募者数そのものを増やすために、全学チームが部局と積極的に連携し、教員への周知・教育をしながら学生支援を行うという戦略を展開している。

部局名 (単位:人)	H30年度申請						H29年度申請																														
	11期 (R1.8.10~R2.3.31出発)			10期 (H31.4.1~R1.10.31出発)			9期 (H30.8.11~H31.3.31出発)			8期 (H30.4.1~H30.10.31出発)																											
	申請者	1次 合格者	うち 辞退者	2次 合格者	うち 辞退者	うち 退学者	申請者	1次 合格者	うち 辞退者	2次 合格者	うち 辞退者	うち 退学者	申請者	1次 合格者	うち 辞退者	2次 合格者	うち 辞退者	うち 退学者																			
文学部	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0																			
教育学部																																					
法学部				4	3	1	2	3	1	1	1	1	5	2	2	2	2	2																			
経済学部	3	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	3	2	1	3	2	1																			
理学部	1	1	1	1	0								2	2	1	2	2	1																			
医学部	1	0		1	1	1							1	1	1	1	1	1																			
歯学部	1	0																																			
薬学部																																					
工学部	4	1	1	1	4	4	1	3	1	2	1	0	7	6	3	2	2	2																			
芸術工学部	3	0		2	1	1						3	2	1	2	2	1	1																			
農学部												1	1	0	2	2	1	1																			
21世紀プログラム	3	2		2	1	1	0																														
共創学部	1	0		1	1	1	1	1	1	1																											
小計	19	6	0	6	2	4	17	12	3	7	1	6	11	6	0	4	26	18	3	9	1	8															
人文科学府	1	1	0				1	1	1	1																											
地球社会総合科学府(比文)																																					
人間環境学府	4	2	1	1	1	4	2	2	2	2			1	0			1	0						1	0												
法学府																																					
経済学府																																					
理学府																																					
教理学府																																					
システム生命科学府	1	1	0																																		
医学系学府																																					
歯学府																																					
薬学府	1	0	0																																		
工学府	3	2	1	1	6	5	1	3	1	3	1	0	3	1	0		5	3						5	3												
芸術工学府	5	3	3	1	2	10	7	4	1	3	5	4	2	6	4	2	6	4					2	6	4												
システム情報科学府																																					
総合理工学府																																					
生物資源環境科学府	2	0	0		5	4		3	1	2	1	1																									
統合新領域学府																																					
その他(他大学への進学)																																					
小計	17	9	1	6	2	4	28	19	1	13	2	11	12	6	1	2	20	13	1	9	0		2	20	13	1	9	0									
合計	36	15	1	12	4	8	45	31	4	20	3	17	23	12	1	6	46	31	4	18	1		6	46	31	4	18	1									

【備考】
原則として留学時の所属により作成

部署名	H28年度申請												H27年度申請												
	7期 (H28.8.18~H30.3.31) 出発				6期 (H29.4.1~H29.10.31) 出発				5期 (H28.8.19~H29.3.31) 出発				4期 (H28.4.1~H28.10.31) 出発												
	申請者	1次合格者	2次合格者	うち返還者																					
文学部																									
教育学部	1	1	1		1	1	1		1	1	1		1	3	2	1	1								
法学部	3	3	1											2	2	1	1								
経済学部					3	2	2	1	1	4	3	1	1	2	2	0	0								
理学部									1	1	1		1	2	2	1	1								
医学部	1	0			4	4	1	3	1	2			1	1	1	1	1								
歯学部													1	1	1	1	1								
薬学部													1	1	1	1	1								
工学部	3	3	3		3	6	5	1	3	1	2			6	6	4	4								
芸術工学部	3	3	1		1	2	2	2	2	8	7	6	6	1	1	1	1								
農学部	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2								
21世紀プログラム	3	2	1		1	3	2	2	2	2	2	2	2	4	4	3	1								
共創学部																									
小計	15	13	3	0	6	24	20	4	15	3	12	18	15	2	11	0	11	27	26	1	15	1	14		
人文科学府																									
地球社会統合科学府(比文)														1	0										
人間環境学府																									
法学府	1	0			1	1	1		1	1															
経済学府																									
理学府																									
数理学府																									
システム生命科学府																									
医学系学府	1	1	1		1								2	2	1	1	0								
歯学府																									
薬学府																									
工学府	1	1	1		4	4	1	3	2	2	3	2	2	1	1	1	1								
芸術工学府					2	2	2	2	2	2	2	2	1	0											
システム情報科学府					1	1	1		1	1															
総合理工学府	3	3	2		2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1								
生物資源環境科学府					3	3	3		3	3	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0
統合新領域学府																									
その他(他大学への進学)																									
小計	6	5	1	3	0	3	14	14	1	13	0	13	11	9	0	6	1	5	11	9	0	6	1	5	
合計	21	18	4	9	0	9	38	34	5	28	3	25	29	24	2	17	1	16	38	35	1	21	2	19	

部局名 (単位人)	H26年度申請										H25年度申請									
	3期 (H27.8.21～H28.3.31 出発)					2期 (H27.4.1～H27.10.31 出発)					1期 (H28.8.21～H27.3.31 出発)									
	申請者	1次合格者	うち辞退者	2次合格者	うち辞退者	留学者	申請者	1次合格者	うち辞退者	2次合格者	うち辞退者	留学者	申請者	1次合格者	うち辞退者	2次合格者	うち辞退者	留学者		
文学部	3	2	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1								
教育学部	2	1	1	1	1															
法学部	1	1	0	0	2	2	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0		
経済学部	4	4	3	1	2	1	1	1	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0		
理学部	1	1	0	0																
医学部																				
歯学部																				
薬学部																				
工学部	5	5	1	3	3	1	1	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0		
芸術工学部	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	1	3	2	1	1	1	1	1		
農学部	1	1	0	0																
21世紀プログラム	2	2	2	2	2	6	6	6	3	3	3	7	3	3	3	3	3	3		
共創学部																				
小計	20	18	1	10	1	9	13	13	1	5	0	5	18	6	0	4	0	4		
人文科学府																				
地球社会総合科学府(比次)							1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0		
人間環境学府							1	1	1	1	1	3	1	0	0	0	0	0		
法学府	1	1	1	1	1	1														
経済学府							1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0		
理学府	1	1	1	1	1	1														
数理学府																				
システム生命科学府	4	3	2	2	2	2														
医学系学府																				
学術学府																				
薬学府																				
工学府	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	5	1	1	1	1	1	1		
芸術工学府	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0		
システム情報科学府																				
システム情報科学府	2	2	0	0	1	1	1	1	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0		
総合工学府	3	3	3	3	3	3	1	1	1	1	1	3	0	0	0	0	0	0		
生物資源環境科学府																				
総合新領域学府																				
その他(他大学への進学)																				
小計	13	12	0	9	0	9	7	7	0	6	1	5	18	3	0	1	0	1		
合計	33	30	1	19	1	18	20	20	1	11	1	10	36	9	0	5	0	5		